
僕の彼女は百四十万人

アズマダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の彼女は百四十万人

【Nコード】

N0068Y

【作者名】

アズマダ

【あらすじ】

もし、異世界へ飛んでいってしまったら？　もし、その異世界が女性ばかりの世界なら？　もし、その女性達全てが、男性に奉仕する為に作られたバイオロイドだったら？　もし、そんな異世界に飛ばされたのが中2男子だったら？　そして男の子に友達以上、恋人未満のガールフレンドがいたら？　さらに、その世界に危機が迫っていたとしたら？　その危機を救う可能性があるのが自分だけだとしたら？

青少年育成条例改正案自主対策済み

作品（w）

1・仁と琴葉、消失

「ママー！ 助けてー！」

千九百五十八年アメリカ、ルイジアナ州。

アンナ・カーペンターの目の前で、九歳になる娘が鏡の中に吸い込まれていった。

和銅六年。浦島太郎の原型が乗せられているとされる『丹後国風土記』の編纂が命じられた。太郎が竜宮城で過ごした日々は数日だったが、地上では七百年以上経っていた。

建御雷？は天鳥船？を遣わして八重事代主？（やえことしろぬし）を呼んで問い尋ねると、その父の大？に語りて言いしく、「畏ま（かしこ）りました。この国は天つ？の御子に奉ります」と語った直後、その船を踏んで傾け、天逆手を打って船を青柴垣に変化させて、内に消えた。

2

反粒子は、時間を逆行している正の素粒子である。リチャード・P・ファインマン。

1・仁と琴葉、消失

「あと何分待てばいいんだ？」

せつかくの修学旅行なのに、北中学校二年生、小片^{おがた}仁^{じん}は、飛行機内でイラついていた。

もうとつくに那覇空港へ着陸している時間だ。

イラついているのは、一学年が乗り込んだ飛行機の計器不調のため、いまだ緊急着陸した関西国際空港で足止めを食らっているため

ではない。飛行機で缶詰になっているからでもない。

「大きい方でゆっくりしてるんじゃないのか？」

声を荒げる仁に対し。

「正解！」

仁の後ろで並ぶ斧田琴葉おのたことばが肩をすばめた。

自他共に認める綺麗な黒髪が、背中まで長い、小柄な同級生。と言っても、仁にロリ属性はない。どちらかといえばメカフェチ気味の綺麗なお姉さんは好きですかタイプ。

琴葉は平凡な顔だとみんなから言われている。すれ違う人十人が十人とも振り返るような美少女ではない。

でも仁は、仕草だとか性格だとか……優しさだとか、芯が一本通っているとか、そこがとても可愛いと思っている。

そして、お互いに同級生以上の存在。でも、恋人ではない。…

…今のところ。

なんで男子と女子が同じ列に並んでいるか？ それは単純に、教師の偏った男女平等策によるものだ。

「臭いは、仁の肺によるガス交換作用で消去しておいてね」

「しかたない」

くるりと振り向き、姿勢を低くする。

「代償に琴葉ちゃんのパンツを見せ」

乾いた音がした。低くなった仁の頭頂に琴葉の肘が落ち、顎に琴葉の膝がめり込んだのだ。

「馬鹿じゃないの？」

琴葉は、腕を組んで仁を睨み付ける。

「大人になったらソーブランドに行きなさい。……でもなんでソー

プという綺麗な単語の後にランドという楽しそうな単語を付けると嫌らしく聞こえるのかしら？」

「綺麗で……楽しそうだからだ……と思う」

しゃがんで頭を抱えている仁の前で、化粧室のドアが開いた。

「出た出た、むちゃくちゃ出た。三日ぶりだよ。だいぶ腸内発酵してたよ！」

柔道部レギュラーの津元が、太鼓腹を小気味よく叩きながら出てきた。

「ほら、空いたわよ。さっさとお行きなさい！」

琴葉は仁のお尻を足で押し、化粧室へ押し込んだ。有無を言わずドアを閉める。

「ぎゃーっ！」

くぐもった叫び声の中から聞こえた。臭気がキビシかったのだらう。

やがて、水の音に続き、仁が飛び出してきた。大きく喘いでいる。

くすくすと笑う琴葉。笑顔がとても可愛い。仁は手をさし示した。

「ど、どござ」

「うむ」

琴葉が入ると、仁がドアに身体を預けた。そしてドアを開けられないよう、がっちりホールドする。

「ぎゃーっ！」

トイレの中から悲鳴が上がった。臭気が厳しかったのだらう。仁は個室内で息を止めていたからよくわからない。

仁はクスクスと笑いながら青い携帯を開く。心配しているであろう家族に、安否のメールを打とうとしたのだ。

ふと窓から外を見ると、空が曇っていた。

まったく！ いくら安いからと言って、毎年毎年梅雨に突入した
沖縄に行くなんて。毎年毎年ダイビングコースが中止になってると
いうのに！

「あれ？」

電波が拾えない。おかしい。この携帯は衛星通信で圏外が無いの
が売りだ。

仁は、ドアから離れって、あちらこちらと携帯を移動させてみる。

琴葉が化粧室から勢いよく出てきた。

「馬鹿じゃないのー！」

肩で息をしながら仁を探す琴葉。彼女は、仁の様子に気づいた。

「どうしたの？」

仁が理由を言うと、琴葉は自分の携帯を取り出した。小綺麗にデ
コレートされたシャンパンピンクの携帯を開く。彼女の携帯は壊れ
ないので有名な、一番女の子に似合わない機種だ。

「仁のケータイ、壊れてんじゃないの？ って、あれ？」

琴葉の携帯もアンテナが立っていない。それどころか、時計表示
がおかしい。

「無料のを買うからだよ」

「失礼ね！ 一万円以上したのよ。コンテンツだって山盛り入れて
るし、類義語とか百科事典まで入ってるんだから！ でも変ね？」

琴葉は自慢の黒髪をかき上げ、後頭部、産毛の生え際を爪でポリ
ポリと搔いている。

そこを搔くのは琴葉の癖なのだが、綺麗な髪の毛もまたいいね。

あ、琴葉と目があった。

あわてて反らし、自分の携帯に視線を落とす。

「僕のも変だ……おっと！」

いきなり機内の照明が落ちた。エアコンが止まる。琴葉が仁の腕に絡んできた。

にやけた仁は、役得とばかりに琴葉の背中に片手を回し、もう一方の手で携帯をポケットにしまい込む。

座席各所からざわざわした声が上がってきた。生徒を落ち着かせようと、先生が声をはり上げるも、効果は薄い。昼間なのに、窓の外が真っ暗になったからかもしれない。

機体が揺れ出した。もしやヤバイ状況？ と思っまもなく揺れが激しくなった。悲鳴を上げて倒れる者も出てきた。

「席へ戻る」

轟音と共に飛び散る窓ガラス！

続いて起こる雷撃にも似た衝撃。機体の屋根が吹き飛び、破片が飛び散る。抱え込んだ琴葉が悲鳴を上げた！

鈍い爆発音と共に機体が折れた。裂け目から進入した電光が、乗客に襲いかかる。

琴葉の腕を握る手に力が入る。周りの景色が歪み、スッと暗くなる。

琴葉しか見えない。いや、こつちを向いている自分の姿も……琴葉の後ろ姿と共に。なぜ後ろ姿？

鏡？ 合わせ鏡？

上も下も右も左も無限に二人だけが映っている。ミラーボールの

様な物の中に閉じこめられていたのだ。

状況が把握できず、仁は焦った。つないだ手の温もりだけが現実を認識させる唯一の存在となった。

気がつく二人は水平になっていた。琴葉の表情が必死。二人とも息なんかしていない。

繋いだ片手。握った手を中心にぐるぐる回りだす。遠心力がきつい。足に血が集まる。今にも手がちぎれそう。

回転が速くなった。もともと強くない仁の握力は、限界に達している。なんとか琴葉だけでも助からないものか？

回転の角度が変わった。

ミラボールに裂け目ができたのだ。中の空気がジェットとなって外へ吹き出す。

まず、琴葉の体が裂け目側に来た。ガクンと体が加速する。

まずい！ 琴葉が吸い出されようとしている。

握り直しなどできる状態じゃない。どうしよう。繋いだ手に重圧がかかる。

遠心力という巨人が二人をつかみ、力づくで引き離そうとしている。

抗うこともできず、あっさりと二人の手は剥がされた。一生忘れることはできない恐怖に引き攣った琴葉の顔。琴葉が裂け目に吸い込まれて消えた。

「琴葉っ！」

初めて呼び捨てにした琴葉の名前。

琴葉が消えてしまった。

これは現実なのか？ 絶対信じない！

続いて半回転後、仁が裂け目から吸い出される。琴葉とはコンマ数秒の差。

光が目を焼く。外は明るいらしい。体に悪そうな刺激が、全身の細胞と骨格を乱暴にこねくり回す。激痛に、わき上がる嘔吐感。仁はあっさりと気を失ったのだった。

1 仁と琴葉、消失（後書き）

初めての投稿。こんなんで良いのかな？ たぶん30章くらいになりそう。

2・クレア少尉

「気圧を調べよ！」

形の良い眉をつり上げ、クレア・コウジユ少尉が命令を下した。嫌な予感に首筋の産毛が逆立つ。

クールビューティとして部下から頼られているクレア。見た目二十歳そこそこの女性士官である。詰め襟の白い軍服。タイトミニに、サバイバルブーツといった出で立ち。

山の天気は崩れやすい。とはいうものの、この気象は異常だ。いま見上げていた雲一つ無い青空が、二つ三つ呼吸する間に炭色の雲におおわれたのだ。あまりにも異常。

「報告します少尉っ！ 気圧に変化はありませんっ！」

若い女性兵士の報告がうわずっていた。しかたあるまい。一ヶ月前に入隊したばかりの新米三等兵だ。

「変化無し。了解」

部下の報告に頷くクレア少尉。声と態度はのんびりしたもの。

これはわざと。クレアの心臓は危機に備え、自動的に活動モードに入っていた。

それが証拠に、額のクリスタルを指でトントンと叩いている。これはクレアの癖。

今はまずい。ここにいるのは、副官のシェリルを除いて新兵ばかり。三日前から、新兵達を集めた山岳訓練の最中。教育監督係のクレアに言わせれば、体のいいオリエンテーリング。

ここは、とある山脈の中腹。小さいながら、軍の施設。サバイバルに必要な一応の物はそろったシエルターにもなっている。

風が出てきた。気温も下がっている。心配なのは……。

クレア少尉はシエリル軍曹に尋ねた。解っていることなのに。

「五班、まだか？」

「最後尾の五班。まだ見えません」

見れば解る。律儀な副官の報告を聞きかかったわけではない。自分の心の乱れが言葉となつて出たまで。

一班から五班まで、おのおの九人の中隊一個編成。一定の間隔を開けて、山道の踏破カリキュラム全行程四日の予定。今日の訓練が終われば後は山を下るだけとなつた事実上の最終日。

等間隔で出発したはずなのだが、五班の到着だけが、予定より三十分ずれ込んでいる。

もう一人の副官が殿しんがりを受け持っているから大丈夫だと思うのだが……。

「シエリル軍曹！ 命令、無線封鎖解除。五班に通信！」

クレアが命じる。クレア子飼いの部下、シエリル軍曹が敬礼。所定の者達に次々と命令を下していく。

主命を帯びた戦闘以外で、無駄に兵の命を失うことは、クレアの矜持が許さなかつた。

気圧に変化がないのにこの荒れ模様は？

異様な体の高ぶりを認識するクレア少尉。

ふと、新兵達を眺める。

三六人七二個の目がクレアに集まっていた。どの目も不安と、生まれもつて身につけさせられている何かの予感による熱っぽい光を湛えていた。

みんな女性兵士。

熱を感じたクレアは、軍帽を脱いだ。銀のショートカットを後ろに撫で付けてからかぶり直す。先ほどから耳鳴りが続いてしかたない。

「電波状態不良です。五班、応答ありません！」

「了解！」

ますます怪しい。気圧の下がる気配がない。なぜ電離層が乱れているのか？

異常な天候によるもの。クレアはそう判断した。

「グランツァで出る。救命パック用意！」

グランツァとは、五年前に軍へ配備された正式車両。踏破性に優れた二輪オフロード。

カーキを主体とした迷彩に塗装されたグランツァが、引き出された。

顎ひもで軍帽を固定し、小ぶりのバックパックを背負い、スカートのまま跨る。クレアのカンが、パンツに着替えている時間は無いと告げていた。

「シエリル軍曹、後は任せる。兵達の安全を第一に考えて行動せよ。異常事態である。軍規など無視しろ。責任は全て私が持つ！」

敬礼するシエリル軍曹を尻目に、メインスイッチに指をかけ一息つく。これは厳罰モノだなと、頭の中で覚悟を決める。

メインスイッチを押し込む。小さく唸る発動機関。マニュアル通り、照明類の動作を確認。スタンドを跳ね上げ、アクセルを回す。後ろのブロックタイヤが土を噛む。軽くフロントを持ち上げ、勢いよく飛び出した。

スタンディングのまま、速度を上げる。岩がむき出すラフな路面。サスペンションと膝と腰でショックを吸収する。なかなかの腕前。

岩場を駆け上がり、獣道をかき分け、訓練コースを逆走する。五班と出会ってもいい頃合はとつくに過ぎた。時間ばかりが過ぎていく。

本来なら、そして、普段のクレアなら、二次遭難を避けるためもっと早くに引き返していただろう。

過ぎていくだけの時間。

そのワードが、必要以上にクレアを焦らせた。嫌な汗が噴き出し、体を流れる落ちる。

風が強くなってきた。

山腹に作られたつづら折りの山道をグランツアのパワーにもものを言わせ、素早く駆け上がっていく。右は山肌、左は崖。

こんなところで落ちようものなら命はない。例え命があったとしても、四方を山に囲まれた窪地に落ちることになる。生還は難しい。

嫌な予感と、広義の意味での希望に顔を上げ、テーブル状の山を見上げる。元は優雅なラインを描く成層火山だったのだ。だが今は、

中腹あたりからスパリと切り取られた台形の山となり、最高峰の地位も、こちら側の双子山、ハティ山に譲り渡していた。

そのハティ山上空を中心として広範囲に黒い雲が、重厚な渦を巻いている。目で動きが追える。明らかに異常気象。

この気象状態は！

クレアの記憶層から忌まわしくも正確な情報が引きずり出されようとしたその時。一本の太い光の柱が、ハティ山頂と渦を巻く黒雲の中央を繋いだ。

「ビフレストの橋がつっ！」

叫ぶクレア。彼女が意識を保っていたのはそこまでだった。

二つの山を含む辺り一帯は、白一色で塗りつぶされたのだった。

2・クレア少尉（後書き）

第二の主人公？ 登場。

3・仁、発見

クレアの意識は唐突に戻った。

気がつけば、仰向けに倒れていた。どれだけの時間、気絶していたのだろうか？

頭の横にはバスケットボール大の石が転がっている。

遙か頭上。崖から突き出した木の幹に、グランツアのタイヤだけが引っかかっていた。

あそこから落ちてよく助かった。

右手、握れる。左手も握れる。右の太ももに強い刺激が存在する。それにもまして足が重い。頭を持ち上げて見れば、下半身が微細な砂に埋まっていた。浅く埋まっているだけ。砂は埃のように軽かった。

足を上げるだけで簡単に抜け出せた。下になっていた土が柔らかかったのが幸運だったのだろう。

体を起こそうと、いつものように右腕を支えにした。

「くっ！」

右肩に走る痛覚。

「これは脱臼？」

大事なときに！

左手と足腰を使い、何とか膝立ちの体勢に持ってきた。

俯いて右拳を地面の固い部分に当てる。肩の角度を調整。体重を入れる。

乾いた音を立て、肩関節が入った。

「はっつ！」

激痛という感覚は、ほんの僅か。続いて押し寄せ別の感覚。背筋を駆け抜け、脳のとある部分に到達する。

表現しがたい体の反応。それは体の裏切り。長い間、クレアは息を止めていた。止めざるを得なかった。裏切り者の体が、呼吸を拒んでいた。

やがて訪れた神経の安寧。息をすることを体が許す。激しく荒く呼吸。どつと噴き出す汗が下着を濡らす。

深呼吸を三回繰り返し、強制的に息を整えた。

気になっていた右の太ももを見る。ぱっくりと口を開けた裂傷。横方向に七センチ。浅くはない。結構な量の血が流れ出ている。

背中 of 救命パックは無事だった。飲用の水で泥を押し流し、消毒剤で傷口を洗い、細胞賦活軟膏を塗り込み、止血テープを貼る。

傷口が作り出す、あの刺激信号。クレアは身震いしながら、それをやり過ぎした。

もうすぐ必要になるであろう医療キットを節約しようかと思っただが、そのために自分が動けなくなっただけは元も子もない。おそらく、自分が現場に一番近いはず。

クレアは圧迫用包帯を取り出し、太もも患部を三重巻きにした。格段に動きやすくなる。

続いて、救難用の無線機を取り出し、スイッチを入れる。雑音しかしなかった。

「だめか……」

おそらく気を失ったあの時、バースト状の電磁波が……。

何時までもこんなところでぐずぐずしてられない。最近身に付いたクレアの長所は、気持ちの切り替えが早い事。

クレアはバックバックを背負い直し、砂場を後にする。

三歩歩いて違和感を覚えた。頭が寂しい。軍帽が無い？
近くに落ちていないか？

先ほどまで転がっていた場所に視線を向ける。あつた！

砂に埋もれることなく、行儀良く鎮座していたそれを勢いよくつかみ取り、流れるような動作で回れ右。再びクレアは歩き出した。

その時だった。巨大な岩石が背後に落下したのは！

衝撃と風圧が、クレアの体を押し倒す。

風に舞う砂埃。すぐ隣を見慣れたタイヤが転がっていく。

肩の痛みも忘れ、一挙動で立ち上がり振り返ってみる。軍帽の落ちていたあたり、クレアが倒れていたあたりに、軍用トラックほど角張った巨石がめり込んでいた。

崖を見上げると、パラパラと小さな石ころが降ってきている。

「これは……早くこの場を離れた方が良さそうだ」

クレアは、右肩をかばいながら、ここから離れる。落石のおそれがある地帯からは離れるに限る。方角を確認しようとしてハティ山を探す。

無かった。

ただ、ハティ山とおぼしき場所に、見慣れぬ台形の山が。……まるで中腹より上をスッパリ切り取ったかのような。

クレアは視線を横方向へずらした。同じような形をした緑の山がある。

今日この時をもって、ハティ山は十年に渡って防衛し続けていたアルフレイ最高峰の地位を他者に明け渡したのであった。

「やはりビフレストの橋がかかった！」

エルフィとしての最優先状態を頭脳が起動した。忘れかけていた神への憎しみが顔を覗かせたが、それを押しとどめる力を持った強制力が行動を優先させた。

「い、急がなくては！ この近くに……必ず……」

クレアらしくないあたふたした動作。崩れかけているハティ山へ向かう。

あの山のどこかにいるはず。

倒木を越え、下草をかき分け、岩場を走る。右肩が熱を持ってきた。太ももの傷口から血が滲んでくる。しかし、脳の処理スペースに、そのことを気にかける余裕はない。

いつの間にか、まだ新しい青肌を見せる巨石群に踏み込んでいた。最後の岩を回り込む。

クレアは神を信じない。むしろその不公平さを憎んでいた。だが、たまには気まぐれを感謝してみようと思った。

なぜなら、その先に、目的の場所があったからだった。

3・仁、発見（後書き）

次回、明日31日UPの予定です。クレアさん、短い間の主人公、ありがとうございます。あ、撃たないで！

4・プラストエンド・サバイバル（仁、再登場）

遠くで、誰かに呼ばれた気がした。

仁のぼんやりした脳の言語野が、自動的に人の声を認識した。とても小さい声だ。女の人の声。だれが何に向かって……。。

どうやら自分に向けたメッセージを送り出しているようだ。いったい誰が？

正体を知りたいという要求が、むくむくと湧き上がってくる。とたんに声が大きく聞こえた。自然とまぶたが開いていく。

人形のように美しいお姉さんだった。瞳が金色。額に張られた逆三角形のクリスタルが澄みきっていて綺麗。

声の正体、確認完了。まぶたを閉じる。

殴打音と共に、鋭い痛みが頬へリズムカルに伝わってきた。許容量をオーバーする刺激を受け、仁は激しく目を開けた。

「気づいたようだな」

ややハスキーな声。細い眉をキリリと吊り上げたお姉さんが、心配そうに仁の顔をのぞき込んでいた。初めて美女という存在に出会った。

またもや強烈な睡眠欲が湧き起こる。そして倦怠感も消えることがなかった。

なんかどうでもいいやって感じ。

仁はこのままの状態で、もう一度目を閉じることにした。

「寝るナ。体を 。ここはキケンな 。移動 死又ぞ！」
お姉さんが、なにか叫びながら仁の体を揺する。揺れた箇所が針で刺された様に痛い。

「ここ 土砂崩れ 沢になって 。あの木が 場所ま
移動するぞ！」

仁の体が引き上げられた。脇の下に、お姉さんの体が滑り込む。

いい匂いがする。これが大人のお姉さんの香りか……。
わずかな脳内作業領域が、体の変動を感じ取った。仁の体が大きく震えだしたのだ。

いや、揺れているのは地面の方だ。どこからか、うなり声のような音が聞こえてくる。

「土砂崩 。走れ！」

どうにか「走れ」という単語だけ聞き取れた。走る行為も知識として知っている。どうやら命令文らしい。だからといってランニングのできる体調ではない。

それ以前に、仁は迫りつつある危機を認識できていない。意識はまだ混沌としたままだ。

仁は、突然の浮遊感を感じた。

この浮遊感は、お姉さんが仁を担いで走り出したものだった。

女の人の力で、軽いとはいえ中学生の体重を担いで走れるだろうか？

案の定よろめいていた。それも歩くようなスピードで。

何となく、仁も走らなきゃならない、とだけ認識。モサモサと足

を動かすが、何の役にも立たない。むしろバランスが崩れて邪魔になる始末。

地響きが耳元で聞こえるようになった。お姉さんの荒い息づかいが耳元で聞こえる。足元に、砂と小石が流れてきた。城壁のような土砂が目の前に迫っている。

これは間に合わない！ 仁の濁った頭でさえ、そう判断できた。

仁の体が地面におろされた。お姉さんの体が覆い被さる。そんな事をしたって、万に一つも助かりっこないのに。

仁のぼやけた目が、安全地帯までの距離を測った。濁った意識がそこへ到達するまでの時間を算出した。

要は、あそこまで移動すれば、お姉さんが助かるんだ。

仁は、お姉さんのからだに手を触れた。そして。

気がつけば、草むらの中で寝転がっていた。なんだかずいぶん長い時間歩いていたような気がするんだが……あ？

仁の意識は突然の回復を見せた。

ここは森の入り口。数万トン単位の土石が、一メートルと離れず横たわっていた。

額に違和感。右手を持って行くと、頭に包帯が巻かれていた。

それを確認した右手にも包帯が巻かれていた。だれが手当をしてくれたのだろうか？

すぐに解った。

なぜなら、隣で片膝をついたお姉さんが、残った包帯をケースに

しまい込んでいたからだ。

尖りまくった人だが、綺麗な女の人だった。

年の頃は二十歳過ぎ……の軍人さん？ 頭のとっぺんには……軍帽っていうんでしょうか？ 沖田艦長が頭に乗つけてるあの帽子。仁は順を追って視線を下げていく。

帽子の、庇の下から銀の髪の毛が垂れていた。

細くて濃い、つり上がった眉。人形のように綺麗な顔。整いすぎた顔だ。

深紅のルージュをひいた艶やかな唇。下唇が肉感的でとてもセクシー。

きつちりと止められた詰め襟は、びしびしの堅物イメージ。

グレーを基調にした軍服……らしきものを着ている。大きな肩パットが入っているのだろう。やけに肩が張っている。それと窮屈そうに、ぱつぱつに張った胸。細いウエスト。

唯一の不明部分であるタイトミニ。ごついジャングルブーツで足を固めている。

スカートの奥から、チラリと白い逆三角形が見えているのだが、あれは何だろう？

おパンツ？

認識した瞬間、仁は完全に意識を取り戻した。偉大なり、煩惱！

いやいやいや！ そんなことより気になるのが、お姉さんの目。正確には虹彩。金色の目って、初めて見た。

あ、目が合った。

「気がついたか？ 怪我は擦過傷だけだ。化膿の可能性は低い」
お姉さんはぶっきらぼうにルージユの唇を開いた。うまいこと言えた顔で満足げに見えるのは気のせいか？

体を起こそうとして力んだ途端、全身の筋肉に激しい痛みが走った。

仁の体は、今のところ自由がきかないようだ。でも、口は動いた。

「あなたはどちら様で？ ここはどこ？ 僕はいつたい……」

「状況を説明する。ここはアルフレイという土地。現状、我ら二名は、危険値レッドの地域に滞在中。無線は通じない」

仁は、何のことも全く理解できないでいる。というか、理性が理解を拒否をしている。

「私の名はクレア。クレア・コウジユ。アルフレイ陸上軍少尉を努めている。体年齢二十の内年齢二十四だ！」

やっぱり軍人さん！ アルフレイってどこの国だ？ 今気づいたけど、この人、日本語を話している。

「……き、貴様の名は？」

少し口の端を引き攣らせながら、続けて名を問うクレア。視線は微妙にそれている。

「僕の名は……あれ？ 僕の名は……」

名前が出てこない。仁の顔がこわばっていく。

「落ち着け、少年！ どんな所に住んでいた？ 家の間取りは？」

「ご両親は？ 学校は？」

クレアが矢継ぎ早に質問をしていく。

仁は、家の玄関を思い出した。お母さんは下手くそなケーキ作りが趣味だ。お父さんは小さな商社に勤めている会社員。自分は学生。そう中学生だ。

修学旅行。飛行機事故。

音を立てて、記憶の鍵が鍵穴をこじ開けた。

「思い出した！ 僕は仁。小片仁。……そうだ琴葉ちゃんは？ 琴葉ちゃんはどこに！」

勢いよく立ち上がる仁。周囲を見渡そうとして首を振って……貧血と吐き気。

仁は、弱々しくしゃがみ込んだ。

「今の今まで寝ころんでいたヤツが急に立ち上がるからだ！ しばらく座っている。すぐに元通りになる」

腰に手を当てた立ち姿で、厳しく注意するクレア。

血の気の引けた仁。青い顔をして汗を流している。

「でも、ついさっきまで手を繋いでたんだ。たぶん、この辺りに……」

見えるのは土砂崩れの現場。仁の青い顔が、さらに青くなる。

「まさか！」

「落ち着け！ か、彼女は土砂の下敷きになどなっていない！」
半開きになった口。なぜクレアが知ってる？

仁は一筋の望みに託し、クレアの顔を仰ぎ見たのだった。

4・プラストエンド・サバイバル（仁、再登場）（後書き）

この勢いで連投UPの予定！ このままクレアさんを主人公にすげ替えようか？ という誘惑に負けず仁、再登場！ 仁君強い子負けない子。

誤字脱字、言い回し等、変なのがあったら連絡ください。 修正します。

5・前進。

「じゃどこに？ 知ってるんですか？ 琴葉ちゃんは無事なんですか？ いまどこに？」

クレアの肩を掴んで揺すりたい心境だった。そんな事できもしないヘタレの仁は、手を握ったり開いたりして我慢していた。

「そんなにコト八という女の事が心配なのか？」
うんうんと、何度も首を縦に振る仁。

クレアは、なぜか不安そうな表情をその美しい顔に浮かべた。
「き、きさま、コ、コト八という女のことか……好きなのか？」
仁の青い顔が赤に変わる。

「忙しい少年だな。コト八の事が好きなのかと聞いている。これは大事なことだぞ！」
柳眉を釣り上げたクレアの顔が迫る。パーフェクト美人を見慣れてないととても怖い。

「え、えーと、その、……好きです」
恥ずかしいやら逃げ出したいやらで、仁は恐る恐るクレアの顔を見た。

口をへの字にした顔が遠ざかる。むーん、と唸るクレアの頬がピンク色に染まる。

「ひよつとして、クレアさんって恋愛に免疫のない人なんですか？」
「うるさい！ 本官だって恋愛の一つや二つ！」
真っ赤な顔をして怒鳴るクレア。この年で恋愛が一つ二つなのかよ、と、仁としては嘔み付きたかったが怖いのでやめた。

「それで、琴葉ちゃんの安否は？」

このままではラチがあきそうにないので、仁は強引に話を続けた。

「残念だが、それについて話す権限は、本官に無い」

ふいと視線を反らせるクレア。

「言わせるだけ言わせておいて！ なんだよ！ 教えてよ！」

「話すべき権限を持った人物がセンターにいる。……そういう事だ。貴様がその者に直接聞くがいい」

クレアの焦点は仁の額に集まることで落ち着いたようだ。何らかの葛藤があったのだろうか。頬が上気している。

「じゃ、生きていますね？」

仁が一步前に出た。一步下がるクレア。

「機密事項だ！」

「怪我してないんですか？」

さらに一步進む仁。さらに一步下がるクレア。

「それも機密事項だ！」

「どこにいるんですか？」

「だから機密事項だと言つとるだろうが！」

クレアがキレた。足音を立てて一步前が出る。

「ひいっ！ すみませんっ！」

この逆襲に、仁が慌てて後ずさる。見慣れない金色の目で睨まれると、とても怖い。夜、光ったらどうしよう！

「どうやってあの土砂から逃げられたか、いまいち理解に苦しむが、

助かったのだから良しとしよう。とはいっても、この場所はまだ危険地域だ。取り急ぎ可及的速やかにここを離れるぞ。五秒で準備しろ！」

言うなりクレアはバックパックを背負った。

「いやちよつとあの……」

軍隊とはこのようなものなのか？ それを民間人に押しつけて良いのだろうか？

「ちよつと待つてください！ 携帯持ってますから！」

ポケットから携帯を取り出す。衛星通信で圏外のない携帯だ。

「これで……あれ？」

圏外の表示。

「気が済んだか？ 行くぞ」

衛星通話なんだけど……。

否応なく体を動かすも、体のあちらこちらから痛みの信号が伝達される。そこかしこの筋肉が悲鳴を上げ、仁を非難しだした。これはまだ動かない方が体によい。

「クレアさん、動けないものは動けません！ もう少しこのまま」

三発の銃声が轟いた。

仁の足元、左右そして前方の三箇所。無彩色の煙が立っていた。

クレアが握る拳銃の銃口からも、紫の煙が立っていた。

「面倒な子供だな」

さあついてこい。とばかりに首をクイと捻り、大股で歩き出すクレア。

仁は足を引きずりながら、一生懸命歩き出した。

歩き出したのはいいが、十分と保たなかった。

「あのー、足が痛いんですけどお」

「セントラルシティに着けばマツサージ屋がある。そこで足の裏マツサージでもしてもらえ。本官は嫌だがな。あんな痛いの」
話にならない。

「もうだめっス！」

腰から下が動かない。仁は足から崩れるようにしてへたり込んだ。後は、はあはあと肩で息をするのみ。

「仕方ないな。どれ、本官が元気にしてやろう」

バックパックを降ろすクレア。中から薄いシートを取りだしその場に広げた。

「ここで横になれ」

クレアがシートを指さす。

「固まる仁。『元気にしてやろう』と『横になれ』という二つのワード。」

これは「体を横たえて、リラックスなさい。お姉さんが、元気にしてア・ゲ・ル」ということか？

いけない妄想を膨らます仁。

極度の疲労を負っているにも関わらず、キビキビした動きで仰向けに寝転がる。

次にかかるはずの言葉「リラックスして」を心待ちにしている。

「そうじゃない。ベルトをゆるめて、うつぶせに寝ろ」

バックパックをこそこそやってくるクレアさんから指示が飛ぶ。ベルトをゆるめると指示が出た。……べ、ベルトっスか？

「う、受けですか？ 僕、受けつスか？」

「受け身だ。体の力を抜いてリラックスしてる」

き、きたーっ！ 受け身来た。リラックスと共にやって来たー！

「は、初めてなので優しくしてください」

「クレアさんの手が仁の腰にかかる。ベルトを引き抜いたズボンにかかる。」

「なんだ初めてか。よしよし、お姉さんに全て任せて、力を抜け」

パンツごと一気に下げられたズボン。むき出しになったお尻の双球が、山のすがすがしい空気を感じて緊張する。

ああ、さようなら僕のアレ。そして、こんにちは僕のソレ。

「こら、力を抜け！」

尻たぶに、クレアさんの柔らかくて暖かい手がかかる。バラの花びらが散っていくイメージ。

「は、はい！ ごめんなさい琴葉ちゃん はうっ！」

感覚が違う。約束と違う。予定調和と違う。何もかも違う。

気持ちよくない。むしろ痛い。むしろ激痛？ なにこれこわい。

「すぐ済むからな。筋肉注射だけど痛くない痛くない。消毒忘れたけど大丈夫だ」

この感覚は、注射器？ その針？ 太いのが刺しこまれて出血？ 冷たい液体が、臀部の筋肉に浸透していく。

「よし終わった。よく我慢したな。えらいぞ」

大技をキメた大型犬を褒めるがごとく、抜き取った跡を乱暴にスリスリするクレアさん。

「もうズボンはいいぞー」
肉体的痛みと精神的痛みから涙になっていた仁。意味はわかったが理解できないでいる。

「こ、これはナニ？」

「危ない薬ではない。栄養剤だ。……ヤッバリー製薬のニソニク注射。有名だぞ」

「すぐごとズボンを上げる仁。何かに負けたような気がするが、何にだろっ？」

「さあ、これで歩けるはずだ。出発するぞ！」

手際よく後片付けを終えたクレアの後にしたがう仁。言われたとおり、足が軽くなっている。

しかし、前にも増して心が重くなっていく仁であった。

5・前進。(後書き)

夜なべ(W)。手袋を編むように、5話アップ！次回、今日(11/1)の夜、時間未定でアップの予定。がんばれ、私！

6・あれ？ 遭難？ クレアさんと仁。

森を抜け、地肌むき出しの山腹を歩く。上ったり下ったり、岩がごろごろしてたり、倒木を乗り越えたり。もちろん道など無い。足場は、前後左右どちらかに必ず傾いている。

先を進むクリアは、叱咤しながらもペースを調節して歩く。

ニンニク注射で疲労感は消し飛んだものの、本調子でもない仁。何度も足を滑らせたり、ふらついたりさせていた。だが、その都度クリアから手が伸び、大事に至っていない。

そんなこんなで、仁は何かクリアの後ろに続いていた。

登りと下りがワンセットあった後。今は鬱蒼と茂る木立の中を歩いている。

仁の目の前で左右に揺れているのはクリア少尉のタイトミニ。：

…を通して見える魅惑的な双丘。

実にボンキュッバーンな女性的フォルム。軍服にしては短すぎるスカート丈が気になって仕方ない。

登りともなるとなおさらである。スリットが後ろに有れば、もうアレなのだが、いかんせん、前方左に有るのがなんとも惜しいところだ。

それは置いていて。

…最初から気になっていたが、右太ももに包帯が巻かれている。

少量の血が滲んでいた。右足の歩みは力強いものだが、ややもすると左足に重心が移る。

右腕が変だ。左腕に比べ振り幅が少ない。かなり前から、枯れ枝を何本も拾って小脇に抱えているが、拾う動作は、主として左手が行っている。

右腕が変と言うよりも、右肩をかばっているように見受けられる。クレアさんも怪我をしているんだ。

「……どこまで歩くんですか？」

「移動の目的は救助隊との合流だ。黙って歩け」
後ろの仁を見もしない。また枝をひろった。

「救助隊が出てくるんですか？」

「貴様を捜すために、軍は大規模編成の救助隊を組織している。黙って歩け」

たいした自信だ。……仁を探すためにというくだりが怪しい。仁個人のためだけに捜索隊が組まれるとは思えない。だいいち、この訳のわからない土地で、仁の存在を知るのは目の前に行くクレアさんだけだ。

仁は歩くのをやめた。

「クレアさんだつて遭難している口でしょう？　なんで救助隊が出てるって断言できるんですか？　気休めはやめてください！」

クレアの歩みが止まった。振り向いて仁を金色の目で睨みつける。
「我がアルフレイ軍の最優先行動事項だ。ビフレストの橋……簡単
に言えば、特殊な天変地異だ。その事象が観測されれば、全てに優先して救助活動が開始される。ただし……」

クレアが言葉を匂切り、手にした枝を空に向け、くるりと輪を描いた。

「この磁気嵐が収まらぬ限り、対磁装備の小部隊しかこのエリアに突入できないだろうな」

仁もつられて空を見上げるが、木の枝の隙間から、空のかけらが

見えるだけ。ひよつとしたら見えるかもしれないと思ったのだが、やはり磁気は目に見えない存在だった。

クレアにも見えるはずないのだが……まだ通信機が使えないからなのか？

「それもこれも貴様一人のためだ。貴様は救助隊と出会う。ブランデーセットの付いた最高級の救急車で搬送される。目的地はリゾートホテルのような病院。この国トップクラスの腕を持つ医師と、優しいナース達が操る最新鋭の医療設備……」

そこで何かを考え込むクレア。

「賭けようか？ 本官が外したら、なんでも言うことを聞いてやるう。望みを言え！」

意地悪く笑うクレア。それはそれでまた悪魔的な魅力をもった笑顔。真意がわからない。

仁は、息のつまった現状を打破しようというクレアのジョークだと思うことにした。だったら、返答のしようもある。

「じゃ、クレアさんと一日デートするってのはどうです？」

その時のクレアの顔を一言で言い表すとすれば、ずばり「へのへのもへじ」だろう。

変な顔をした後のクレアは、体を二つ折りにして笑った。

なんだかバカにされているような……。

「私でよければ、いつでもいいぞ！」

目尻に浮かんだ涙を綺麗な指で拭い、くるりと踵を返してクレアは歩き出した。

「てつきりスケベな事を言い出すと思って、心の準備をしておいたぞ！」

クレアの肩が笑っている。

そういうのアリだったのか。

奥歯を食いしぼり、額に皺を寄せ悔しがる仁。悔しがりながらクレアの後をついて行く。

しかし、この一件で二人の気持ちがおぼろげになった。会話が続く。遭難したときは、じっとしてる方がいいって聞いてますよ」「ハテイ山が崩壊した。何時大地震が起こっても不思議でない。そんな場所ですらじっとしていたならじっとしている」「それも一理ある。

「山からは十分離れたようですよ。こちら辺で火を起こして煙りでも上げてれば、上空からヘリや飛行機が見つ付けてくれますって！」「クレアは後ろを見ずに、左手に持った杖をひらひらと振った。「ヘリとは何だ？ ヒコウキとは？」「……動力付き飛翔体ですよ！ 空飛ぶ乗り物！」「クレアのニュアンスにかちんと来るものがあつた。

「ほー。貴様のセカイにはそんな怖い乗り物があるのか？ 言っておくが、アルフレイには空を飛ぶなどという馬鹿げた乗り物はないぞ」「あつさり飛行機を流された。……アルフレイって国は、飛行機も無い貧乏国なのか？」「このあたりでよかる」「クレアが立ち止まった。仁が追いつき、並んで立ってみる。

そこだけ、木々が無かった。ぽっかりと空に向け、穴が空いた空間。

短い丈の下草が一面に生えていて、空が見えていた。見上げれば

解る。今は夕刻。

「さて」

広場の縁に、大きな幹を持つ木が一本、空に向かってそびえていた。

根本に、抱え込んでいた枝をバラバラと落とすクレア。

「今日はここで野営する。設営開始！」

設営開始といわれても、野営経験どころか、テント設営も未経験の仁に何ができようか。ただ、おろおろと腰を引けているだけ。

突っ立っている仁を尻目に、どこからか手頃な石を集め、竈を作り出すクレア。着々とたき火の準備が整っていく。

「あ、あの、僕は何を……」

「うるちよろせず、そこで座ってる」

ホントのところ、軍人とはいえ女の人に座っているとされて、黙って座っているわけにはいかない。森の下草へと足を踏み入れた。

「じゃ、薪でも取りに」

「じつとしてる！ この辺りは金獣のテリトリーなんだぞ！」

息を詰めてしまった仁。金獣ってなんだ？ いかにもヤバそうな名称。

「森や山に棲む、体毛の濃い未開人だ。我らエルフィとは不文律で不可侵の関係にあったのだが、少し前から関係がおかしくなっている」

そーっと、草から足を抜く仁。

「ひよつとして、……肉食ですか？」

「田畑を持つとは思えんが……この発火剤、性能が悪いな」

クレアさんは、しゃがんだまま、小さな火を大事そうに育てている。

「凶暴な動物ですか？」

「直接戦ったことはないが、小口径の銃では死なないらしい。ああ、そうそう、この天変地異だ。連中の気が立っているのは、……火を見るより明らかだな」

炎が立ち上がった。クレアは、うまいこと言えた顔で満足げだ。

クレアが拾った枝は、どれもこれもよく乾燥していた。パチパチと音を立て、勢いよく燃え上がっていったのだった。

6・あれ？ 遭難？ クレアさんと仁。(後書き)

ほどよく疲れて、ニンニク充填。

次回「仁君ウイリー！」の巻。

…あ、明日(11/2)お昼upの予定…

7・お姉さんとドキドキキャンプ

人間、火を見るとなんだか落ち着くものである。

仁は、ほっと一息ついた。疲れがどつと押し寄せてくる。

火を見ても落ち着かないタイプらしいクレアは、手を休めることがない。火の番を仁に任せ、森の周辺を歩き回っては、薪を拾っているのだろうか。ごそごそと手を動かしている。

戻ってきたらきたで、救命パックを開き、せわしなく手を動かしている。

「クレアさん」

声をかけてみるが、快い反応がない。膝について背を向けたまま、黙々と用事をこなしている。

「肩と足、大丈夫ですか？」

タイミングがそうだったのかも知れないが、小さな紙ケースに伸ばした手の動きがゆっくりだった。そして、首を捻って仁を見る。

なんだか瞳孔が開ききつてるように見えるが、たぶん気のせいだ。

「何の問題もない」

生気のない目でひと睨みしてから、何事もなかったかのようにして元の作業に戻り、ごそごそと救急パックの中で手を動かしている。

「ほら」

振り返りもせず、小さなボトルを放り投げる。抱かまえこむようにしてキャッチする仁。手にしたものを見る。それは水の入ったボ

トル。

スクリューキャップをねじ切り、水を口に含む。喉が渴いていたことに気づいた。むさぼるようにして水を飲む。

「半分にしておけ。水は豊富な土地柄だが、次いつ手にはいるかわからない。ほら！」

クレアが金属製のマグカップを差し出した。ほのかに黄色いペースト状のモノが、すり切りいっぱい入っている。

受け取ると、魅惑的な甘い刺激が鼻腔いっぱいに広がった。忘れていた食欲。

クレアが安っぽい樹脂製のスプーンを差し出す。

「非常用のビスケットを茹でふやかしたモノだ。柔らかいが、意図的に噛んで食べる」

暖かいのがありがたかった。すでに、かき込むように頬ばっていた仁。ほんのりと甘く、香ばしくて旨味がしつかりある粥みたいな味。

「よく噛めと言っただろうが！」

ドンと片足をつくクレア。眉が鋭角に吊り上がっている。小さくなつてモグモグする仁。

「それでいい。では食事開始」

そう言うってから、スプーンを自分の口に運ぶクレア。三口ほどでスプーンを置く。ボトルの水を二口飲んでキャップを閉める。

それでクレアの食事はお終いのようだった。

仁は自分のコップをのぞき込む。まだ半分残っていた。

「クレアさん、僕の分が多いような」

「本官に太れと言うのか？」

切れ長の目が凄んだ。日本刀の鋭い切っ先のような目尻だった。

「いえ、残さずいただきます」

コップに口を突っ込むようにしてモグモグする仁。それをじっと見つめているクレア。

クレアさん、ひよっとして自分の分を削って……。

つと目線をそらせ、クレアが口を開く。

「シテイに行けば、美味しいものがたくさんある。何が食べたい？
無事に到着すれば手配してやるっ」

「おでん」

間髪を入れず答える仁。

先ほどよりは写実的なへのへのもへじ顔をするクレア。

「ないの？ 僕、練り物が好きなんだけど」

「……いや、ある。幸か不幸か、具はほとんど練り物ばかりだがな。
アルフレイは海の幸が豊富だ。練り物だって美味しい。本官は野菜系が好きだがな」

ちよっと誤魔化されたような気もするが、彼女の心遣いに感謝し、
舐め回すようにして綺麗に食べ終わった。

「コップとスプーンはそこに置いておけ。後で本官が片付ける」

クレアは、救命パックから取り出した新聞紙より薄そうな銀の布を広げている。

「ツェルトだ。……寝袋とテントがあわさったモノだと思え。薄い
が、完全断熱素材でできている。大気圏突入も可能という怪しい物
だ。潜り込んで寝るがいい」

見渡せば、辺りに夜が迫っていた。星はまだ出ていない。

体が鉛のように重くなっている。クレアさんの好意に甘えて、

ツエルトに潜り込むことにした。

クレアさんが言ったとおり、薄いツエルトの中は暖かった。背中は、もろ地面の感覚だがこれは仕方ない。安堵感に、大きく息を吐く。

「失礼するぞ」

クレアさんがスルリと入ってきた。

仁の顔のすぐ側にクレアさんの顔が並ぶ。よかった、暗くなっても目は光ってない。

……いや！ いやいやいや！

突然の成り行きに、目を白黒させる仁。古い言い方だと同衾。同床とも言つそれをわかりやすく言えば添い寝。眼前十？にあるクレアさんの綺麗な顔。

離れていても伝わってくる暖かい体温。生々しく聞こえるクレアさんの息づかい。

こっこれはっ！

「このツエルトは二人用だ。ならば分かち合っとうぜんだろう？
それとも本官と一緒に寝るのが嫌なのか？」

仁は真っ直ぐ上を向いたまま、ぶるぶると首を振って否定する。

これはチャンス！

「何だ、やっぱり嫌なのか？」

「違います違います！一緒に寝るのは嫌ではありません、という意味表示です。……いやいやいや、一緒に寝たいと言っているのではなくて、あくまでも……そう、枕を並べるといふ行為に対して

「いいから寝ろ！」

仁は、クレアの一言で撃沈してしまった。

しかし、この状況は！ 男子と生まれて十四年。最強最大美的チヤンス！

……体をくつつけて寝るということは、触れあってしまうのは当然の理。ちよつとくらいなら触っても良し！ 事故だよ事故！ これをきっかけにばばばーん！

中二思考全開の仁。手を動かして……。

ゴツ。

堅いのにあたった。

自分のではない。

クレアさんのだ。

位置的に鑑みて、これは自動拳銃が入っているホルスター……。いやいやいや、待て待て待て。クレアさんは疲れ切っているはず。ほんの少し待てば、ぐっすり寝入ってしまうだろう。

それを待つ！

真つ暗な闇の中。完璧な作戦。見よ、ニンニクの威力！

「眠れなくても目をつぶっておけ！ 就寝！」

起きていることバレバレじゃん。とりあえず目をつぶって……。

目を開けたら、明るくなっていた。

一般的に、朝が来た、という太陽系規模の現象。

「あ？ あれえー？」

もちろん、クレアさんは隣で寝ていない。妙に頭がスツキリしている。

「目が覚めたか？ 肉が焼けたので、ちょうど起こそうと思っていたところだが、匂いに釣られて起きてしまったのか？ いやしいやつめ！ 体は正直だな」

一生の不覚！

もう一度言う。一生の不覚！

握りしめた拳をこれでもかと地面に叩き付ける。もっと叩き付ける。何度も叩き付ける。

だのに、お腹が鳴った。いい匂い。肉が焼ける香ばしい匂いが、あたりに漂っている。

どこで見つけたのか、太い丸太の中程が燃えている。

大なり小なりの木の枝に刺した肉から、油系の煙が上がっていた。胃袋が肉を上納すると、多大なる要求を出している。

情けない話だが、ごそごそとツェルトから這いだした。

「体は痛くないか？」

クレアさんが聞いてくる。手や足を動かしてみるが、すっかり痛みはとれていた。

「一晩寝たら、直ってた」

ぐっすり眠ったのがよかったのだろう。悲しいけれど……。

「クレアさんはどうなんですか？ 肩、痛くないですか？」

微動だにしないクレアさん。金の瞳孔が開いているような気がするが……。

「悪化してるんですね？」

さらに微動だにしないクレアさん。

「クレア」

「やかましいっ！」

クレアは、ぐわわっと回り込みながら立ち上がり、無事な左腕だけを振り回す。

「右腕は全快した！ 見るがよい！」

言ってクレアは、勢いよく右腕を振り上げた。

ぴったり肩の高さまで。

「いやいやいや、それ以上あげないと」

仁のつつこみに対し、腕をあげるクレア。一センチだけ。

彼女はいつも通りポーカーフェイス。ただ、額に大きな汗の粒が浮いていた。

「やっぱり痛いんだ」

「やかましい！」

更に二センチ、五センチ、十センチと右腕をあげていくクレア。

青、赤紫、青紫と変色していく顔色。数を増す汗の粒。噛みしめた歯と歯の間から火花が散りそうだ。

「いや、ちょっと、無理しちゃ駄目だよ！」

「ふははははっ！ そーら、なんともないぞー！」

腕の角度は、仰角にして四十五度を超えた。

だらだらと流れ落ちる脂汗。見ている気の毒だった。

「解りました！ クレアさんの腕はなんともないです。だからもう許してください！」

泣いて謝る仁。気迫勝ちのクレア。

「はあはあ。わかったのならツェルトをたたんでおけ。丁寧にな。

「はあはあはあ」

血走った目を仁に向けるクレア。美女の血走った目って初めて見た。

クレアさんの命令に逆らうと撃ち殺されそうな気がしたので、仁は素直に従い、ツェルトを折りたたむ。

「たたみ終わったらこちらに来て座れ。朝食の用意ができています。先ほどから焼いている肉から、汁がこぼれ出ている。食べ頃だ。

「夕べ、罾を仕掛けておいたら、今朝ウサギモドキが二匹かかっていた。日持ちしないからできるだけ腹に詰め込んでおけ！」

「罾ですか？」

「そういえば、夕べ下草でゴソゴソやっていたのは罾を仕掛けていたためか。」

「本官はトラップ関係の教官も務めている。ほれ！」
クレアに肉を手渡される。

「朝食、開始！」

合図と共に、肉にかぶりつく。ジューシーで柔らかい。なおかつ臭みがない。

口いっぱい頬ばってもぐもぐと口を動かす。豚でもない、牛でもない、まして鳥でもない。まさにウサギ。ウサギ肉など食べたことないが……。ウサギモドキという単語が気になるのだが……。

フワフワの白い毛が目に入った。

草むらの上に、つぶらな瞳をしたぬいぐるみのように可愛い動物の頭だけが……。

視線を元に戻して、食事に集中する。

あっという間に二本を平らげ、三本目へ手を出す。と、手が柔ら

かいモノに触った。クレアさんが肉に伸ばした手だ。

「あ、ごめんなさい」

ドキドキと鼓動を高めつつ、あわてて引っ込める。反対側の肉に手を伸ばす。こちらも手が柔らかいモノに触れた。

「ごめんなさい！」

眉毛を下げて謝る先に……毛むくじやらの小さい人？

見た目、二歳児。明るい金色の目……。

バサラに伸びた金髪。頭頂で存在を主張する三角に尖った耳がピコピコ動く。ふさふさした犬系の尻尾。金色の体毛は、か細くて長い。……顔と腹部だけ毛に覆われてない。

それが、あーん、と小さな口を開ける。短いながら尖った犬歯が見える。

そんなちっこいのが、ちっこい手に持った肉をワイルドに頬ばった。にこにこしながら。

ほっぺたがマシユマロみたく柔らかそう。あ、こっち見て笑った。うわっ、可愛い！

……で？ あんた誰？

7・お姉さんとドキドキキャンプ（後書き）

すみません、やっぱザブタイトル変えます（汗

どこのどなたか存じませんが、毎回毎日3桁のアクセス&ユニークありがとうございます。明日（11/3）もがんばってUPします！ 引き続き、誤字脱字・句読点句読点・用法等の間違いご指摘受付中！

8・襲撃、金獣!

「撤収準備!」

クレアさんが叫ぶ。靴底で火を消しにかかる。すでにバックパツクに手を通してている!

「え? なに? なに?」

おろおろしてるだけの仁。反応が悪い。

「そいつは金獣の幼体だ!」

ホルスターから拳銃を抜き、第一弾をチャンバーに送り込むクレア。戦闘準備が着々と進む。

「近くに成体がいるはずだ! 全方位監視しつつ撤退開始!」

この子は可愛いけれど、金獣。それは獰猛な野蛮亜人。狼男の眷属?

仁の脳裏に、とある映像が浮かぶ。六連発を持った現代人が、槍を持った三十人以上の戦闘的裸族に取り囲まれている図。明らかに弾の数より、敵の方が多い。

その後、粗末な、それでいて頑丈な木の檻に入れられ、目の前で大きな釜が茹で上がっていく。スープは鶏ガラ? いえいえ、人の。

いやいやいや! ぶるぶると頭を振って、嫌な考えを放り出す。

とはいうものの、足が震えだした。体が硬くなっていくのが自分でもわかる。

「ど、どうしようクレアさん！」

「二時の方向！」

クレアさんが低く小さく警告を発する。

二時の方向って……時計の二時？

仁は右斜め前に首だけをめぐらす。木陰に、なにやら動く影が……。

飛び出してきたーっ！

「イーマスタート！」

なんか叫んでる。こっちへ走ってる。筋肉質の、金色の、大柄の、女の、獣耳の。

全力で間違ったイメージを沸騰させて具現化したケモノ耳、ケモノシッポをもったムキムキの女の人だ！

「七時の方向！ 走れーっ！」

その場で回れ右する仁。無邪気な笑顔を見せてる金獣の幼体が目に入った。

銃声が立て続けに三発。心臓が三回跳ね、血圧が三段階上上がった！

「ワー・ツー・ワー」

幼体がなにやら喋っている。何で聞こえるかというと、小脇に抱えていたからだ。

人間、地震や火事など、緊急事態により簡単にパニック。そんな時、金庫や通帳ではなく、身近にある枕を持って逃げることもある。

仁がそうだった。目の前に突っ立っていた小さな子を思わず小脇に抱えてしまったのだ。

「あわわわわ！」

ドタバタと、効率の悪いランニングフォーム。アンド、金獣の幼体であるチビッコを小脇に抱えたまま、真っ直ぐ森に向かう仁の背に、クレアの叱責が飛ぶ。

「こら！ 幼体は置いて走れ！」

身の丈三メートルの人狼。一クラス分の人数に囲まれる図。木の檻。茹で上がった釜。次々と光景を脳裏にフラッシュバックさせている仁。彼に、クレアの声は届かない。

立ち木の中に、一箇所開けている場所があった。獣道だろうが、かまわない。そこしか入れる場所がない。一目散に駆け込んだ。なんとか逃げのびた。

クレアさんが追いつけるように、ゆっくりと歩いて、静かな森の奥へ分け入っていく。

いま右の方から何か音がした！

木の枝が揺れている。金獣のちびっこを胸元に抱き構える。

「鳥？」

赤と青と黄色が派手な鳥が、羽ばたいていた。前後左右を見渡しながら、及び腰で歩いていく。

また右から音がする。こんどは草むらだ。木々の下草が揺れていた。

「ウ、ウサギモドキ……かな？」

思わず、ちびっこを抱く手に力が入る。

「ぶぎー！」

抗議の声上がる。

「あ、ごめん！」

謝ってばかりの仁。でも、ちびっ子から伝わってくる体温が、仁を落ち着かせていた。

「ほーっ」

深呼吸のような深い溜息をつく仁。

左で草の揺れる音がした。またウサギモドキ。

右で、左前方で、右後方で、かすかな音が立て続けに！ 何かいる！

左目の端が動く影を一つ捕らえた。右目の視野に複数の動く影。こんどは左の視野にはつきりとした人影が！
いつの間にか、一クラス分の気配が蠢いていた。

これはヤバイ！ そうだクレアさん！

発砲音が三つ聞こえた。三連射はこれで三回目。彼女の癖だろうか？ ……でも、かなり遠い。

クレアさん一人なら、なんとかかできるだろう。でも僕の場合……。

崖っぷちとはこのこと。これは現実。目の前に液晶ディスプレイも四方向レバーもない。昨日までの現実はどこへ行ったんだ？

仁の首筋の産毛が、全部逆立った。と、思ったら森の奥へ向かって走り出していた。

それをきっかけとし、仁の後方で金獣たちが一斉に立ち上がる。

「ぎゃーっ！」

悲鳴を上げる仁。ざっと二十四匹の金獣が、獣道に躍り出たのだ。

「く、来るなー！ それ以上近寄ると、この子の命はないぞー！」

シツポを嬉しそうにバタつかせているチビッコを正面に抱き直す仁。人質のつもりである。どうやって素手でチビッコに危害を加えるつもりだろうか、という疑問は置いて、どうか未開人の金獣に、人質の概念がありますように！

らららんと金色の目を輝かせた金獣が、次々と躍り出る。完全に仁に興味がある目だ。

人質の概念なし！

仁が飛び出したのは、獣道の果て。森の広場。ずらりと金獣たちが輪になった、その真ん中に飛び出した。

「あわわ」

急いで回れ右。だが、森への入り口は追いかけてきた金獣たちであふれかえっていた。

ふと、仁は、金獣たちの、ある共通点に気づいた。

みな、一様に金色の目。くすんだ長い金髪。毛皮や簡素な繊維でできた袖無しの貫頭衣は横隔膜のあたりまでの短い丈。長く尖った耳。ふさふさの尻尾。顔と腹部以外、全て毛足の長い金の体毛が覆っていた。

あと、全員が目が何かの欲に反応し、異様にギラついていること。

それともう一つ。

「メス……いや、全員女の人？」

とうとう金獣たちの数は百を超えた。

見た目十代から二十代まで様々あれど、みな一様に出るところは出、引つ込むところは引つ込んでいる。クレアさんとはまた違うタイプのナイスバディ。毎日走っていそうだしね！

そういえば、このチビッコも女の子っぽいし……。

「なぜ女ばかり……はっ！ アマゾネス？」

伝説の戦闘民族アマゾネス。長い槍を標準装備、弓にも長けている。男と見るや、無慈悲に攻撃を仕掛ける。

粗末だが頑丈そうな木の檻。目の前で茹で上がる大きな釜……。チビッコを抱く手に力が入る。

「人質ーっ！」

仁の叫びを吉祥に、一斉に飛びかかってくる金獣たち。

何本もの腕が、手が、チビッコを抱いたままの仁を捕まえ、自分たちの頭上に持ち上げる。おみこし状態のまま、連れ去られていく。

結局人質の効果は無し。仁が後味の悪い思いをするだけであった。

8・襲撃、金獣！（後書き）

さあさあ、人気のネコ耳の登場ですよ！ ちょっと違和感を感じますが、ネコ耳ですよ！

4桁目のアクセスありがとうございます！ 想定は2桁前半だったのに、嬉しい限り。これもひとえに皆様のおかげ！

9・ゴールデン・ビースト・ソルジャー

どんどんどんどんどん！
リズムカルな太鼓の音。

太鼓を叩く面は動物の皮でできている。ちなみに和太鼓は牛の皮でできていて、雄と雌とで音が違うという。

……なにが言いたいのかというところ、彼女たち金獣は、狩猟の能力を持っていてということ。

仁は、あのあと、長い時間をかけて金獣たちの本拠まで拉致されていたのだ。

「ウー・ヒー」

チビ金獣を抱いたまま、広場に座らされている仁。変な声を上げながら正座している。

木の檻が無いだけましかであろうか。

そのかわり、彼の周囲を槍や弓で武装した、ナイスバディのお姉さん達が二重三重に配備されていた。首長親衛隊ってヤツでしょうな、ハツハツハツハツ……。

動けばやられる！

さらに、目の前の祭事広場中央では、二つの釜が焚かれていた。二つともドラム缶サイズ。色が悪かった。金属のようにも土器のようにも見えるのだ。

そんなことはどうでもよろしい。

問題は……。

片方の大釜に野菜やら、肉片やら、岩塩やら、なんじゃかんじゃ

表現不可能な食材がバケツリレーでドボドボ放り込まれていること。もう片方の釜は、ただ湯だけが沸かされているらしいこと。こちらの釜が心配だった。

頃合いを見計らっていたのだろうか、年かさの女性が釜の近くにあらわれた。顔に素朴なペイントをしているが、それでも美しい金獣。

明らかに他の金獣たちと違ったオーラを持っていた。

「ワカマスタエ・オウ・ヨホ。アシア・ネ！」

仁を指さし、天を指さし、呪文のような言葉を唱える。

さしずめ、シャーマンといったトコロでしょうか？ 悪い方に悪い方に転がっていく予感に、仁の全身がこわばる。

「ワマスタエ！ エ！」

シャーマンらしき金獣の、短い呪詛っぱいのがいきなり最高潮の盛り上がりを見せた。

「エ！」

広場にいる全金獣が腕を突き上げ唱和する。

「ワマスタエ！」

「エ！」

ギツラギラした百の視線が仁に突き刺さり、唱和が続けられた。

「エ！」

チビッコも喜んで声を張り上げている。

いよいよ釜に放り込まれるのか？ 予感としてあった生命の危機が、現実味を帯びてきた。下痢にも似た、冷たい痛痒感が脊柱内髄液に走る。

「うわーっ！」「

悲鳴を上げたのは状況に変化があったため。

五体の金獣が仁の眼前に集まった。彼女らの顔は笑っている。でもいかにもといった作り笑顔。目が笑っていない。

それぞれ二対計十本の腕が、うねうねと仁に伸びてくる。絶体絶命！

「クレアさん！」

叫んだつもりだが、喉の奥に粘っこい痰が絡んでいて、声が出ない。

「ヤーフー！」

ザワリとしたウエーブが金獣たちの間に走る。みな一様に釜の向こう側に首を向ける。ここからだ、仁には金獣たちが邪魔で見えない。でも、誰かがこちらに向かって走っているのが足音でわかる。

「ク、クレアさん！」

精一杯首を伸ばし、視界を確保する。

確固たる足取り。金獣たちの群れを割って現れたのは 金獣だった。

血だらけの。これも女の金獣。

体のあちこちから血を流している。いや、血を流した後がある。

その数五カ所。

もう一カ所、右目に巻いた包帯風布切れが真っ赤だった。

これで合計六カ所。クレアさんが発砲した弾丸の数と合う。

見覚えのあるタンクトップ風貫頭衣。最初にキャンプ地を襲撃した金獣。

彼女がここにいるということは……。

「こ、これは、まさかクレアさんは……」

仁、体の震えが止まらない。

傷だらけの金獣の目的は仁らしい。走るのをやめた血だらけの金獣は、こちらに向かって一直線に歩いてくる。仁の顔をひしと睨んで。口元に肉食系の笑みを浮かべて。

「ニケ」

チビッコが傷だらけの戦士を指さす。

「ニケ？」

どうやら、戦士の名前らしい。

仁の眼前まで来ると、今度はシャーマンに首だけ向け、大声でなにか主張した。

「チセ・ワヒソ」

なんか、こう……、戦果の第一殊勲者は私である。最初の一口は私に権利がある。とでも主張しているのだろうか？

シャーマンは頷き、広場の方を向く。

「カ・ニケ・メ・マスタ・ナホ」

その言葉に我が意を得たりとばかりにニヤつくニケ。どうやら主張は認められたらしい。

満足げな笑みが浮かんだ顔を仁に近づけてきた。六つの傷跡が生々しい。

……六発も打ち込まれて痛くないのだろうか？

血が乾いた傷口を見て、ぼやっと考えていた。

銃で撃たれても何ともないなんて……。

ちらりちらりと傷を見る。

内、左腹筋の傷口に二本の指が伸びた。ニケの指だ。

そのままグリッと傷口に指を突っ込む。出血が始まった。

「ホアウツ！」

悲鳴を上げるニケ。そりや痛いだろう。眉を八の字に変形させたまま、傷口の中で指をかき混ぜる。

その表情に艶めかしさを感じてしまった。こういう時に発現するこの感情は危ない。

仁が顔を背けようとした時、ニケの動きが止まった。指をそつと傷口から出す。

二本の指に挟まれていたのは、先端のひしゃげた弾丸。

乾いた音を立てて地面を転がっていく。仁はそれが止まるまで眺めていた。

「ワロリ？」

はつと顔を上げる。凄まじい気迫を放つニケ。迫力ある笑みを顔に浮かべる。

「あは、あはあはあは」

仁は、笑うことで答えとした。どうせ、『お前の連れ合いに撃たれた弾丸だ。きさま、覚悟はいいか？』みたいなことを聞いているのだろうが、万が一ということもある。とりあえず愛想笑いを張り付けておくことにした。

「ワ・イロリ！」

高々と腕を振り上げ勝利宣言するニケ。何の勝利宣言だろうか？
なににせよ、今の愛想笑いが引き金となったのに間違いない。

「ニケ！ ニケ！ ニケ！」

全金獣による唱和が延々続く。誇らかに胸を張るニケ。けっこう大きな胸……いやいやいや。この場面でナニ平和なこと考えているのか！

「ナワコ！」
血まみれの手で指し示すニケ。なぜか、どや顔。拍手と笑いが湧き起こる。

周囲を囲む金獣アマゾネス達が仁を促す。目的地は、あの大釜。両脇に手を回され、立たされる。肩に手を置かれ、押されて歩いた。大釜の前で、とても幸せそうな笑みを浮かべるニケ。釜の底から、ときどきはみ出す炎が熱い。

その釜に梯子がかけられた。
広場の金獣たちが静かになった。あれほど騒がしかった声が消えた。空気が堅くなる。

だっ、だめだ！ 死ぬ！ 殺される！
琴葉ちゃんは、父さんや母さんは……。
「クレアさーん！」
涙声で叫ぶ仁であった。

9 ゴールデン・ビースト・ソルジャー（後書き）

クレアさんは、メインヒロインの仁を救えるか?! ……なんか違う感じがするが違和感なし!

次話も連投の予定です!

10・お姉さんとタイプ。

仁が叫んだ・その時！

自然界ではけっして聞くことのできない音が、広場に響き渡る。

それは、銃声！

音がした方角を向く仁。右側だ。金獣たちも同じ方向を見ている。今度は轟音がした。より重い音だ。反対の左側で。

右がフェイクで左が本命か！

左の森の一角が崩れ、土煙が立った。爆発的に紅い炎が踊る！

「ミヒ！ シエルファイ・ル！」

その場にいる金獣達が血にはやっている。ほとんどの金獣が、火を出した森に向かって走り出した。

これだけの数の金獣相手に、どうやってクレアさんは戦おうというのか？

トラップの教官と言っていた。サバイバルの教官だとも言っていた。今までこっそり準備をしていたのだろう。だけど……。

だけど、ニケはこの場を動いていない。火の出た森を睨み付けている。親衛隊の方々も森の方に向け、手にした武器を構えていた。

クレアさん一人でどうやってこの窮地を切り抜けようというのか？
金獣の大群を向こうに回し。

変化がおきた。

大釜二つがひっくり返った。
もうもうと上がる湯気。水煙と言っていていかもしれない。野菜と肉を煮込んだスープの美味しそうな香りが漂う。

「走れ！ 九時の方向！」

煙の中からクリアさんが飛び出し、仁の体を背で押した。何のことか一瞬理解できないでいる仁。

二ケも親衛隊の金獣も呆然としている。今の今まで気づかなかつた。反対の森ばかり見ていたからだ。

「シチ！」

いち早く我に返ったのは二ケだった。猛然とクリアに襲いかかる。クリアは両手で拳銃をホルドしている。

二ケの残った目を見たまま、右太ももに銃弾を撃ち込んだ。もんどり打って転がる二ケ。

「走れ！ 馬鹿者がっ！」

背後から、クリアさんの声が飛んだ。
脊髄反射で走り出す仁。

「あの大きな木の右から、森に入れ！」

「え？ 右？ 右？」

急に言われて、左右の区別ができる人の方が少ない。仁も大多数の方だった。

「お箸を持つ方、だ・ろ・う・がっ！」

そう言われた方が早い。

クリアさんが生きていた。助けに来てくれた。窮地を脱した。いや、まだだ。でもクリアさんと一緒なら、きっと助かる。そん

な感情を混ぜこぜにして、大木の右手に突っ込んだ。

クレアは森に入る直前で振り返り、もう一発撃った。金獣たちは、すぐ後ろまで迫っていたのだった。

発砲ののち、大木の左側から森の中へとジャンプしたクレア。

クレア憎しとばかりに続いて、左から森に入る金獣たち。その足下がすくわれた。

親衛隊の金獣三体が逆さ宙吊りになる！

「その小道の左、……お茶碗を持つ側に沿って走れ！」

左急速走行。

また背後から悲鳴が聞こえる。さっきより悲痛な悲鳴だった。どんなトラップが仕掛けられていたんだろう？ 気になる。

「血が苦手なら後ろを見るな！」

後ろを見ずに走る仁。今日はよく走れている。いつもより腿が高く上がっていた。

「山や森は金獣だけの物ではない。連中の油断はそこにある。ふふふふふ……」

後ろから聞こえるクレアさんの声が笑っている気がするが、あまり考えないことにした。

「その倒木の上を走れ！」

「下をくぐれ！」

様々な指示が飛ぶ。いったいどれだけ周到にトラップを用意したんだよ！

都度、背後から上がる悲鳴。

気のせいか、だんだんと声に悲壮さが増してきたような……。

だが、背後より迫る声や足音は、いっこうに減らない。むしろ数

を増している。

「そりゃそうだ。金獣の一部族を全て敵に回したのだからな」
大きなストライドで走るクリアさん。ミニスカート無視？

「それはそうと、貴様、いつまでその子を抱いてるんだ？」

「はっ！」

仁は、小脇にチビッコを抱えたまま全力疾走している。まったくの無意識だった。

「いや、これは……」

「その角、直角にお茶碗！」

定点左九十度回頭する仁。

「うおっとおー！」

そこは崖。目もくらむような高低差。眼下には、白波を立て轟々と流れる大きな川。

ああ、これ、見たことある。

小学校最後の春休みの深夜映画だったっけ。

明日に向って撃て！ つて西部劇で、ブッチとサンダンスが、追っ手から逃げるために滝壺に飛び込むシーン。サンダンスは金槌だったんだよな、ハッハッハッ！

……。

「まさか、クリアさん」

「察しがいいな」

口の端に冷たい笑みを浮かべるクリア。目がとっても危険。

仁の、そして男子の唯一体外に出ている内臓器官が二個、キュッと縮み上がった。

「その子はおいていく方がいい」

そういえばまだチビッコをダッコしたままだった。

遠隔操作された鉄人の様に、ギコギコした動きでチビッコを降ろす。チビッコは四つんばいで毛をプルプルさせた。

四つんばい？

「金獣の幼体は四足歩行だ。それより、覚悟はいいか？」

クレアはバックパックから、ポーチを取り出し二の腕に巻き付けた。

そして、残ったバックパックを放り投げた。そうそう、飛び込むには邪魔になる。

「ちょっと待って、ちょっと待って！」

「どーん」

チビッコが仁の足下に体当たりした。

……なにゆえ？

声を出す余裕など無い。崖の先端で両手をぐるぐる振り回しバランスを回復させる。何とかギリギリ耐えられそうだった。

「ほう！ 頭のいい幼体だな。どれ」

仁の額をチョンと押すクレア。

「あーっ！」

バランスを崩した仁。文字通り、大の字に両手足を広げ、崖を落下していく。

何回転目かで見上げた上空に、飛び込みスタイルで宙に浮くクレアさんと、ゴムボールのように体を丸めて飛んでいる嬉しそうなたチビッコを見た。

ふと無くなる現実感。すぐ後に続く、雪崩式バツクドロップによる着水のショック。背骨が軋んだ！

水中に潜っているのは頭のどこかが理解していた。ただ、上下左右がまったく解らない。手と足がどこにあるのかも解らない。水中にいた。と思ったら顔が空気中に飛び出した。

次第に水中にいる比率が高くなっていき、次第に頭の中が白濁していった。だんだんどうでもよくなっていき……。

いつしか意識が薄れ、ついに記憶が途切れたのだった。

10・お姉さんとタイプ。(後書き)

男性は身体が資本だと思う今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？

次、明日(11/4)お昼にアップ予定!

でもそろそろ、1日2回は辛くなってきました。

もう無りっポ(略)

11・深紅の唇

変なところに水が入った！

空気がある。川原の砂利が痛い。

仁は、一瞬でそれらを認識していた。

次に、体が自己防御のために反応する。体をエビのように曲げ、激しく咳き込んだ。

びっくりする量の水が、気持ちよく口から飛び散る。これ全部気管に入ってたのか？

「気がついたか！ もう大丈夫だ！」

クレアさんの声だ。無事で良かった。

何度か咳き込んだだけで楽になった。気管から水はすっかり出たようだ。

「クレアさうワばっ」

クレアさんが手にした布切れで、口を乱暴に拭われた。仁の口元を確認するクレア。布切れはハンカチだったのだろ、面を買えてもう一度唇を拭われた。

「よし！」

クレアは、仁の口を確認してから、ハンカチを内ポケットにしまひ込んだ。

拭われた時から気づいていた。ハンカチに赤い色がついていたのを。

血かと思ってどつきりしたが、すぐ違うことに気づく。血に比べ

色が鮮やかなのだ。

そう、例えるなら口紅の赤……。

「はっ！」

人工呼吸。マウス・ツー・マウス。唇と唇。直接キス。

まだ唇にナニが残っているはずっ！ 舐め回すなら。

「ミアーウ！」

チビッコが顔面に飛びついてきた。仁の唇を舐め回す。

「ナニをするかな！ このチビッコがっ！」

怒り心頭。せっかくのナニが、綺麗さっぱり無くなってしまったではないか！

真っ赤な顔をしてチビッコを振り回す。きゃっきゃうふふ、と喜ぶチビッコ。

「どうやら、しばらくは追ってきそうにないな」

帽子の収まり具合を確かめながら、川上を見るクレア。髪から滴り落ちた雫が、細い顎のラインを走る様が艶めかしくて……こっ……。

続いて、拳銃をホルスターから出しチエックする。

遊底が後退したままの銃。残弾数ゼロだ。

クレアさんが、いきなり胸のジッパーを開けた。

柔らかそうな丸いふくらみを包むレースの白が眩しい！

「ク、クレアさん！ なななな、ナニを？」

クレアさんは開いた胸元に手を差し入れ、まさぐっていた。

仁は左右を見た。右手は崖が空までそびえ立つ。左手は轟々と音

を立てて龍がごとく川が流れている。誰もいない。

これはアレじゃないのかな？ お誘い？

疲れによる精神レベルの低下。血中より抜けきれないアドレナリン。クレアさんの銃は弾がない。

ブチツと音を立て、仁の理性が吹き飛んだ。レスリングのタックルの体勢。

「クレアさーん！」

ガチリ！

額に冷たい金属が当たる。銃口だ。ただし。

「それ、弾入ってませんよね？」

仁のエヘラ笑いに呼応して、クレアが鋭い眼光をもって笑う。時々クレアが浮かべる、笑ってないのに笑っている笑顔。

クレアが胸元から手を抜いた。指先に挟んでいるのは尖った……。

「弾丸？」

クレアは排莖穴より一発だけの弾をチャンバーに押し込んだ。この拳銃って、そういう装填ができるんだね。

「そうか、試し打ちして欲しいのか？」

ブンブンと首を激しく振る仁を睨みながら、クレアは銃をホルスターにしまう。

「今から思えば、貴様の足下に打ち込んだ三発。もったいなかった。特に前面に打ち込んだ弾だが、よく跳弾しなかったものだ！」

座ったままでもピンと伸ばした背筋。後ろ姿が凛々しい。

ふと思い出して、ポケットから携帯を取り出す。ぐっしより濡れていた。お亡くなりになった模様。とりあえず、バッテリーだけ外しておく。運が良ければ復活するだろう。

「直ちに出發する。用意はいいな？」

クレアは胸のジッパーを上げ、魅惑の展望をしまい込んだ。

「じゃ、チビッコとはここでお別れだね」

「ミア？」

二足で立ち上がったも仁の股下にしかこない頭をなでなでする。

「金獣の幼体は連れて行く」

「え？」

意外な答えがクレアから帰ってきた。

「何処ともわからぬこのような谷間に、金獣とはいえ幼児を置き去りにはできない」

言われてみればその通り。

「万が一、金獣たちが追ってきた場合、人質や足止めに使えるかもしれないし」

鬼畜！

「しばし待て」

太ももの包帯に手をかけるクレア。……血の滲みが大きくなっている。

いきなりしゃがみ込むクレア。こっち向きだ。まったく無防備だったので十二的なものが丸見え。あわてて後ろを向く仁。

……いや、別に自分が後ろを向く必要はないな、と思い返し回れ

右。

テーピングよろしく、太ももを堅く縛り上げてトントンしている立ち姿のクレアがいた。

「だいぶ時間を食った。金獣たちに追いつかれる前に出発するぞ！」
両肩を怒らすクレア。何事もなかったかのように歩き出す。

「ああ……」
両肩を落とす仁。猫背のまま後に続いたのだった。

……、どうにもいけない。

クレアさんのパンツを見損ねた事ではない。

気力が消失している。体がだるい。背中が痛い。首筋が腫れている。何度か胃の中身を戻している。

もともと体の強い方ではなかった。

我が身の事や琴葉の事もあって、精神的に参っていたのかもしれない。それよりも超常現象空間をくぐり抜けたことによる、全身細胞へのダメージがここに来て出たようだ。

歩き出して程なく、体が重くなってきた。

たぶん発熱している。それをクレアさんに伝えるのもめんどくさい。ただ足が動いているだけの状態。倒れて眠りたい。

幸いにも、ここアルフレイとクレアが称する大地は、綺麗な湧水と小川が豊富だ。よって飲料水には事欠かず、喉の渇きだけは癒せる。それだけが唯一の救いだった。

緑の間から日の光が差し込む様は、まるでエンジェルラダー。気温は低くない。高くもない。そこかしこに小川や泉が点在する割に、湿度が高くない。実に快適な気候。

エデンといっても過言ではないだろう。

ただし、発熱していなければの話。今は天国のような自然より、薄汚れた寢床が欲しい。

「ミア！」

仁の前を歩くチビツコが、心配そうに見上げている。

「……大丈夫だよ」

粘っこい声が出た。

「ミアちゃんは……元気だね」

適当な名前を付けて金獣の幼体と呼ぶ仁。

ミアと呼ばれることになった幼体は、にっこり笑った。柔らかそうなおっぱいがまん丸い。

クレアさんは……気づかないのか、気づかないふりをしているのか、こちらに絡もうとも、見ようともしない。

冷たいなあ……。あれ？

クレアさん、杖持ってたっけ？

利き腕は右のはず。だのに左で持っている。

右腕の、肘から上が動いていない。

そういえば肩を痛めていたっけ……動かないのか？

体も傾かしいでいる。右足を引きずってる。太ももの怪我が酷そうだ。

「クレアさん……は、なんで軍人になっただんですか？」

いきなり体の具合を聞いても、はぐらかす人だ。仁は遠回りしてみた。

「……いろいろあるが、主に自分を鍛えるためだ」
これ以上鍛えたら大変なことになると思う。

「なんで陸軍に？」

「……母が海上軍の軍人だったのでな、本官は陸上軍に入った。海上軍に入るとどうしても母に甘えてしまうのでな」

お母さんがいたのか……。いやいやいや、親がいて当然だよな。

「じゃ、お父さんは？」

「存在しない」

間髪を入れず答えるクレア。これは、いけないことを聞いてしまったようだ。

「あの、すみません」

クレアは答えない。

「クレアさん、昔は弱かったんですか？」

「弱かった自分が情けなかっただけだ。……もう聞くな！」
クレアさんは小さな藪をこぎ出した。

「体、大丈夫ですか？ えーと、足と肩？」

立ち止まるクレア。振り返って複雑な表情を見せる。

「……人のことより自分のことを心配しろ」

藪こぎが終わると岩場に出た。少し前から地面の傾斜が緩やかなものとなっている。

苔むした大きな岩を迂回すると、チロチロと清水が流れる場所に

出た。

珍しく立ち止まったクレア。後ろを歩く仁に振り返る。

「しばし休息を取る。だが、立ったまま休憩だ。横になると二度と立ち上がれなくなるぞ」

寝ころぼうとアクションを起こしかけた仁。すんでの所でとどまった。

岩に手をかけ、もたれる事にした。

ミアが水面に顔を突っ込んで飲んでいる。

水の流れを指さすクレア。水を飲むアクション自体がめんどくさかったので、首を振って断った。

「歩き続けたかいがあつて、だいぶ高度が下がった。そんなに時間をかけず救助隊と合流できるだろう。もう少しの辛抱だ」

仁の隣で岩に体を沿わせるクレア。左手で帽子を取って、同じ左手で額の汗を拭う。

クレアさんの髪の毛もって、青みがかつた銀なんだな。あの額のクリスタル、汗を拭くのに邪魔にならないのかな？

そんなことしか考えられなかった。

仁は今、横になって眠ることを最優先事項と考えている。

そのためにアルフレイ軍が編成した救助隊に早く拾ってもらいたかった。

違う！ 琴葉ちゃんを搜索するために、軍組織と合流するんだった！

ずっと前から坂は緩やかになっていた。こうしている次の瞬間に

でも救助隊と鉢合わせできるかも知れない。

仁は、背筋を伸ばした。

歯のくいしばり方を覚えたのだった。

11・深紅の唇（後書き）

人工呼吸はお約束！

二人きりのサバイバルももうすぐ終わり。
次話も連投します！

12・アルフレイ・アーミー(さようなら、クレアさん)

「行きましょう」

仁は、体を預けていた岩から離れた。途端、体が崩れ落ちた。

「あ、あれ？」

体が動かない。うつぶせになったまま。顔を上げようとしたが首に力が入らない。

「仕方ないな」

クレアも岩から離れた。彼女も弾みを付けないと動けないようだ。

二の腕に巻き付けたポーチから、アルミ色のケースを取り出した。蓋を開けるワンアクションの後、取り出したのは、銀に光る長い針を持つ注射器。シリンジ内には、冷たい色をした黄色い液体。

それからのクレアさんは行動が素早かった。

仁の尻を左手で固定。逆手に持った注射器をノーモーションで突き刺す。

「げげぼっ！」

仁の悲鳴にお構いなく、プランジャを押し込む。中の液体が仁の体内へ消えていく。

「前のより強力なクスリだ。ちょっとアブナイ系の薬だが、薬害の報告はない。安心しろ」

仁はビクンビクンと二度三度痙攣。やがておとなしくなる。そして再び動き出す。

「ホあーっ!」

飛び起きた仁。血走った目でクレアに飛びかかる。元氣の使用法を間違えたようだ。

迎えたのはクレアの回し蹴り。

再び倒れ込むが、起き上がらない。動かないのは銃口が額にポイントされていたからだ。

「どうだ、落ち着いたか？」

冷めた目をしたクレアが、ゆっくりと撃鉄を上げた。

風もないのに、木々の触れあう音がしたのはその時。

クレアが左右に気を配る。仁は立ち上がって耳を澄ませる。

音がする。人の気配がする。後ろの方！

「救助隊が来た！」

喜色満面の笑みを浮かべ、振り返る仁。

「……後ろから？」

クレアは躊躇した。

音がする。右から、左から。扇形に、取り囲むように。

「違う！ 救助隊が後ろから来るものか！」

木々の間から見えるのは、金の瞳と金の髪。

姿を見せたのは、金獣の集団。先頭で飛び出してきたのは片目の

二ヶ。雄叫びを上げる！

「金獣だ、走れ！」

一発しか弾の入っていない銃を構えるクレア。背中で仁を押しした。

安堵から緊急事態へ急転直下。一気に体を駆けめぐるアドレナリン。

仁は走り出した。やっぱりミアを両手で抱いて。

波のように押し寄せせる金獣の大群。

注射の効果で体に疲れを感じないのに、足がもつれる。

腕を捕まれた。クレアさんに。

クレアさんの左手が仁の腕をつかむ。力強く引っ張られた。この人、足の怪我が酷いはずなのに……。

「ナマ！ マスタコレ！」

後ろから聞こえてくる声が、物音が大きくなる。薄暗い森の中、恐怖が背中を撫でる。

踏み込んだ水たまりが足を引っ張る。乾いた木の枝が音を立てて碎ける。

金獣たちが手を伸ばせば、仁の襟首に届くだろう。首の後ろの毛が逆立つ。クレアに引っ張られる腕が痛い。

いきなり周りが明るくなった。

足元を感じる喪失感。空中？ 接触。転がる。着地。尻が痛い。

二メートルくらいの斜面を転がって飛び出した場所は、緑の平原だった。見晴らしが良い。

それだけではない。

「アルフレイの救助隊だ！」

アルフレイ軍、災害救助隊がそこに展開されていた。

戦車が二十両。人間はその十倍以上。そこかしこに大きなテントが整然と張られている。

救助部隊の本部のようだ。

「助けてー！」

声を枯らして叫ぶものの、こちらに気づく者は一人としていない！

人の移動が激しく喧噪な状態ゆえに、声が届かないのだ。

みんな、こちらに背を向けている。仁が飛び出した場所はキャンブの裏側だった。

これでは味方が気づく前に、金獣に捕まってしまう！

とうとう金獣たちが森から飛び出す。先頭はもちろんニケ！

「最後の一発はこの時のためにある」

クレアが左手で銃を構えた。

空に向かって。

澄んだ蒼い空に轟く銃声。

アルフレイ軍の救助隊がこちらに気づいた。

クレアが叫ぶ。

「対象、スーパーS級！ 事態トリプルX！ 敵は森の中。金獣多数！」

対応は驚くべき速さで行われた。

クレアの声が終わると同時に、救助隊陣営から複数の発砲があった。

着弾地点は後ろの森。金獣たちが群がる地点。

「シ・エルファイ！ ワムカ！」

恐るべき跳躍力を見せ、森に飛び込む二ヶ。他の金獣たちも、晒した体を引っ込める。

金獣たちの撤退は速やか、かつ、静かであった。

もう、追っ手は来ない。

仁はその場にへたり込んだ。完全にガス欠だ。薬が燃焼させるベキエネルギーが底をついた。

いや、安堵感からか？ ミアちゃんの体温が心地よい。

重武装した兵士達が幾重にも隊列を組んで、こちらに走っている。迷彩模様の服も勇ましい。

…… 全員女性。なぜかミニスカート。

エンジン音が唸りを上げる。戦車までが動き出した。砲塔が回転し、森に向かって砲弾が発射された。二十台全てが連続射撃。鬼のように砲弾を叩き込む。森全体が土煙に覆われた。

この火力差、心強いのは有り難いが、ちょっと大人げないのではないだろうか？

「賭は本官の勝ちだな」

クレアさんは笑っていない。そういえばそんな賭をしたっけ。

どんどん人が仁の元に集まってくる。

集団の中でひときわ目立つのが、白衣の集団。白い担架を持っている。

「医療班のお着きだ。これで本官はお役ご免。……お別れだ」
クレアが薄く笑う。

仁の周りに看護兵が取り巻いた。ナース？ 白いミニスカートと笑顔が眩しい。

みんな、額にクリスタルの飾り。流行？

「強精剤二本使用。熱がある。心身共に強衰弱。されど意志は強固」
クレアの報告に頷くナース長。クレアは仁の発熱を知っていた！
広げられた担架に押しつけられる仁。この状態で、一旦横になつてしまえばもう最後。背筋と腹筋が終了した。動けない。

「ミアーツ！」

ナースがミアを引き離そうとしたが、仁は離さなかった。何かに
すがろうとする気持ちだが、仁にとっても意外と思える力を腕に出さ
せたのだろうか？

人が仁の周りに溢れている。クレアさんは人波に押され、遠く遠
く離れていく。

彼女は自分より怪我が酷い。自分との扱いの差に憤る仁。

「クレアさんは僕より重傷なんです！ クレアさんも手当てしてく
ださい！」

仁の願いに応えてくれる者はいない。なぜか全員女の人。みんな
優しい笑顔をしているが、クレアを顧みる者はいない。

救急車らしき水色の車に乗せられる。女性作業員の手がハッチに
かかる。

その時、クレアさんの姿が人混みの中に見えた。

クレアも仁を見ている。二人の視線が絡まった。

クレアの周りに彼女を気にかける人はいない。周りの兵士の中に

いるからこそ気づいた。

クレアの制服がぼろぼろだったからだ。

仁の耳から喧噪が消えた。

クレアは動かないはずの右手を挙げ、敬礼した。口の端を力ずくで持ち上げ笑う。

いい女とはこの人の事か？

そして、ハッチが閉められた。

意識が薄れていく中、救急車の中を見渡すが、……ブランディー
セットは無いようだった。

12・アルフレイ・アーミー(さようなら、クレアさん)(後書き)

これにてサバイバル編終了！

次回(11/5)より、アルフレイ・シティ編。

よろしければ、ちよびつと評価ボタンを押してください

13・恥ずかしながらっ！ 一人だけは助かったようですっ！

「うわばらっ！」

階段から足を踏み外してバランスを崩してしまった。
そんな夢を見て目を覚ました。

ふかふかのベッド。さらっとした接触感のタオルケット。暖かい
空気。左右に設置されたメディカル機器類。高級感溢れるサイドテ
ーブル。

クリーム色の明るい部屋は、仁が住んでいた家の敷地より広い。

「何でここに？ ここはどこ？」

記憶の混乱。前にもあったような……。

「ミアッ！」

「ぶっ！」

仁の顔面に覆い被さるミア。お日様の匂いがする。

両手でゆっくりとミアを抱え上げると、足をバタバタさせていた。

「マー・アー」

嬉しそうなミアの顔。手を伸ばす仁。アゴの下がぼよぼよに柔ら
かい。

「あれ？」

ミアは、名札の付いた可愛い赤色の首輪をつけていた。

「金獣の幼体はジン様のお気に入りとの報告がありましたので、お
側に置いておきました」

女の人の声が降ってきた。

「気がつかれましたか？ ここはキャツスル内専属病院。ご安心を。ジン様の体に不都合はございません。まったくもって御運がよろしい」

のぞき込んだのは、笑顔の女性軍人。クレアさん！

……クレアさんじゃない。

瞳は、クレアより薄い金色。細くて長いブラウンの髪に柔らかそうな頬。年の頃は、仁より少し上のハイティーン。額には透明なクリスタル。だから流行？

……高校生くらい？

「私はライラ・リイラ。クレア大尉の所属する陸上軍の少将です」
言って小首を傾げる。長い髪がサラサラと流れる。天使も裸足で逃げるような清純派美人！

少将と言っただけあって、クレアさんの軍服とはちよつと違う。肩や胸に細かい飾り付けがついていた。

「体年齢十七歳の内年齢三十五歳。こう見えても、大尉より年上なんですよ」

にっこり笑うとても可愛い！

意思の疎通に齟齬がある……。

おや？

「……クレアさんって少尉じゃなかったっけ？」

仁は自分の記憶を疑った。

「今回の功勞により二階級特進しました。……なぜか本人は嫌がっ

ていましたけれど」

まあ、あの人は嫌がるだろうな……。

「我が陸上軍が誇る優秀な尉官がすぐ側に居合わせ、なおかつ適切な行動を取ったのが、ジン様救出作戦成功の要でした」

……なんかこう、回りくどい言い方というか、自慢臭いというか。

「あっ！」

上半身をガバッと起こす。ミアが転がる。

「そうだ、クリアさん！ クリアさんは無事ですか？ 手当してやってください！ あの人の、大怪我してるんです！」

仁は、まだ混乱していたのだった。今、ようやく完全覚醒した。

ライラと名乗る少女は、仁の肩を抱き、ベッドに寝かせようとす。仁はそれに刃向かった。

「ご安心を。ジン様、救出されてからすでに二日経っております。クリア大尉はすでに体組織修復処置を完了。軍病院に入院中。順調に回復していると報告を受けています」

それを聞いて力を抜く仁。ベッドに体を寝かせる。いそいそとミアが上に乗ってきた。

「まさか粗末な扱いを受けているって事は……」

同僚である軍の人たちに、突き飛ばされ、無視されていたクリアを思い出す。

「最優遇扱いなのでこれ以上の優遇処置は、……なんでしたらオプションをおつけしましょうか？」

「オプション？」

「アルフレイ・ランドの全ての病院内に美容形成施設が併設されて

おります。そうですね、おすすめは全身泥パックと美顔オイルマッサージですが、どういたしましょう？」

「二つとも付けてあげてください。あと、足裏マッサージも！」
これで、心おきなく寝ていられる。

仁は安心して眠りについた。

……じゃねーよ！

「琴葉ちゃんを知りませんか？ 斧田琴葉！ 僕と一緒に、こつちへ来ているはずなんです！ 僕は助けてもらったけど、琴葉ちゃんはまだ山の中にいるかも！ 大怪我してて……ああ、金獣たちに捕まって」

「落ち着いてください！」

また起き上がろうとした仁の肩を押さえるライラ少将。

「私の言える権限での範疇で申し上げます。コト八様はすでに我々が別施設で……保護いたしております」

やや歯切れが悪いものの、琴葉は無事らしい。運がいいと言われた自分がこの様だ。琴葉は怪我をしているのだろう。骨折くらいしているのかもしれない。

「ジン様に、コト八様からメッセージを預かっております」

ライラがサイドテーブルに置かれていた金属製のケースを開ける。嚴重に封が施されている。

いくつかの鍵を開け、中から封筒をとりだした。

「どうぞ」

薄いピンク色した葉書大の封筒。

仁の左手が、それを受けとった。右手で開封口をつまむ。急いで、それでも丁寧に開封した。

中には便箋が一枚。見覚えのある筆跡。殴り書きの縦書きだ。『病院に来たらもう一通あるから、詳しくはそれを読んで』

「……はあ？」

誕生日プレゼントを贈るバカツプルの手口ですか？ これは。

仁は、なんとなく琴葉に余裕を感じた。張り詰めていた気が一気に緩む。なんにしても無事だ。それにこの人たちは親切だ。

今度こそ安心して、ベッドに倒れ込んだ。

「ジン様は丸二日間意識をなくしておいででした。説明をいたしまししょう」

ライラは、脇に控える女医に説明を促す。

背の高い女の人。白衣に黒のミニスカート。首からさげた聴診器。赤いフレームの眼鏡に切れ長の目尻がよく似合う。

「我々のアルフレイ・ランド特有の治療法ですが、ある程度以上のダメージを負った患者は強制睡眠状態にして治療を施します。えーと、ジ、ジン様……の、お体は、全快しておられるはずですよ。現在、どこにも不具合はございません」

「あ、ありがとうございます」

頭を下げる仁。女医は、はにかみながら一歩下がる。

「ごういう風習なのだろうか？」

とにかく自分の体も大丈夫らしい。となると、俄然、ある疑問が吹き出してくる。

「ここはどこなんです？ なぜ僕たちはここへ？ あなたたちは

「いつたい？」

この病室には、ライラ以外に医療スタッフが数名、詰めていた。全員女性。

ミア以外、みんな額にクリスタル。だから流行？

ライラは、手を振って彼女らに退室を促した。

この広い病室に、二人きり……グルーミングしているミアを含め、三人きりになったことを確認してから、ライラが口を開いた。

「私が答えられるのは、ここがアルfrey・ランドであると言う事柄だけ。その他につきましては、私に話す権限がございません」

「がっかりした内容。……また権限か。」

ライラは、そんな仁の心を見透かしたように話を繋ぐ。

「セントラルには、全てを話す権限を持つ者。調整者が（コントローラー）おります」

ライラはにっこりと笑った。クレアと言ってることは同じだが、笑顔は違う。

「……言つなれば営業スマイルだった。」

「それに、各種手続きが必要ですからね。ジン様のご都合に合わせて参りましょう。いつがよろしいですか？」

「今すぐに！」

意識して元気に答えた。一刻も早く琴葉の事、アルfrey・ランドの事を聞き出したい。体調不良を理由に、調整者なる人物に会えるチャンスを先のばしされたくないからだった。

13・恥ずかしながらっ！ 一人だけは助かったようですっ！（後書き）

いよいよアルフレイ・シティ編始まり〜。

いっぱいいっぱいお姉さんがでてきます〜。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。

まもなく作者の感謝が付いてきます！

14・キャツスル

クローゼットから出された学生服は、クリーニング済みだった。逃避行中に作ったかぎ裂きまで綺麗に修理されている。

ズボンをはいて……ポケットに携帯が入っていた。

取り出して見つめて　もう一度、ポケットへ大事に収め、病室の外へ出た。

仁が入院していた病院施設は、アルフレイ・ランドの首都中央に位置する、巨大な建築物の中にあった。

これまた仁の家のリビングより広いエレベーターで降り、五階ぶち抜き吹き抜けの巨大エントランスを抜け、旅客機が横付けできる一枚ガラス張りの広大な車寄せに出てきた。

ナース、ウエイトレス、ポーター、作業員、事務員風、軍人、エトセトラ……。この建造物で働いてる全員ではないだろうかという人数が、そこで頭を下げていた。

みんな額にクリスタルの女の子だったが、……ミアが意図的にでかい態度をしていたが。

アルフレイ・ランドにおいて、軍将校とは格別な地位に立つのであるだろうか？

実はアルフレイ・ランドとは軍事独裁国家で、ライラ少将は、その独裁者の子供だったりして。そんでもって、この国では、独裁者が調整者と呼ばれているのだろう。

仁の防衛本能が働いた。ライラさんに対して、エッチな妄想をしてはいけない！

ライラの後ろに続いて、腰を低くして外へ出る仁。

空が青い。天井付きの車寄せから外へ出たことになる。

くるりと振り返るライラ。仁の後ろを指さす。

「目的地は、今出たビルの隣です」
つられて振り返る仁。

二つ並んだ高層建築。ツインタワーとはいえない。デザインが正反対だった。

「今出てきたのが、右の塔。セントラルのキャッスルと呼ばれる建物」

ピンク色とか、薄ベージュ色とか、なんとなく劣情をかき立てる色合いの力学的高層建築物が天に向かってそそり立っている。

でも、キャッスルってお城じゃないの？ 今まで独裁者の実家で寝ていた？

「そして左側の塔がこれからご案内申し上げますセントラルのコントロールセンター」

イタリアンレッドを基調とした、これまた官公庁にあるまじき配色のビル。キャッスルよりは丸っこいデザインで、やや背も低い。独裁者が辣腕を振るう国会みたいなものか？

「あの中で調整者がお待ち申しております」
左というと……おお、懐かしい。

「お茶碗を持つ方ですね？」

「お茶碗？」

ライラが訝しげに仁を見た。

「こちらですが……」

もどかしかったのか、左手を挙げ、その手で左の塔を指さす。
あれ？ 通じないの？ ライラ少将、ナイフとフォーク派？

「現在ジン様は陸上軍の保護下に置かれております。わが陸上軍の大尉が保護いたしましたので、便宜上、引き続き陸上軍が保護に努めることになりました。その事を事前に申し上げておきます」

なんとなく……なんとなく、こつ……きな臭いにおいがそこはかとなく……。

仁は試してみることにした。

「海で溺れていれば海上軍の保護下に置かれていたのでしょうか？」
ライラは、声を殺して笑った。

「海上軍にそんな力があれば、ですね。海に落ちていれば、ジン様のお命は無かったと思います」

こ、これは。陸上軍バーサス海上軍の図式ってヤツですか？

「なるほど」

自分にどんな利用法があるのかわからないが、なんだかとっても面倒くさい事象に巻き込まれる予感。

「ところでジン様」

態度を改めるライラ少将。なんだか、足をもじもじさせている。

「私、綺麗？」

上目遣いの流し目。とっさのことでどう反応して良いのかわからない。

「綺麗な、お姉さんは好き？」

これはあれ？ やっぱ、僕が気に入ったの？ 調整者なる独裁者をお父様と呼ばなきゃいけないの？ 琴葉ちゃんの手前、それはちよつとまずい。

……いや、いやいや、琴葉ちゃんの立場が危なくなる。

「えー、あー、し、少将はお綺麗ですよ」
無難に答える仁。

ライラが太陽のような笑顔になった。営業スマイルではない。

「では、まいりましようか」

両手の指をちよんと合わせ、先に歩き出す。……なんか今の可愛かったぞ！

仁は、不明瞭な期待に胸を躍らせつつ、左の塔、コントロールセンターへ入っていったのだった。

14・キャツスル(後書き)

えーっと……。

酔った勢いで投稿……っど！

……。

次回は明日(11/6)お昼の予定。

よろしければポチツと評価ボタンを押してください。
もれなく作者の愛が付いてきます。

15・ハーレム・ハーレム！

「えーと、つまり、こういう事ですね……」

先ほどの過度な期待と緊張とは裏腹に、ダウンナーな仁がいた。

一通り説明を受けた仁。体全体が沈み込むようなソファーに、小さくなって座っている。

「まず、あなた……えーと……」

「コントローラー調整者のコトシロです」

「そう、コトシロさん。あなたはアルフレイ・ランドのコンピューターに繋がったサイボーグであると……」

オレンジ系のルージュを引いた唇に、柔らかい笑みを乗せるコトシロ。どこかで聞いたような名前。……天津神と戦った国津神のヤエコトシロ又シ。……は、関係ないか。

年齢は不詳だが、総合的に見て、二十代半ばの女性である。スタイルも悪くない。涼しげな声。口元に浮かぶ微笑みも、柔らかくて好ましかった。

どう見ても独裁者には見えない。ましてや、ライラさんのお父さんにも見えない。

「正確には、アルフレイ・ランドのスーパークラウドコンピュータの統括権を持ったコントローラーです」
右手を開くコトシロ。

その手は、人の手ではない。メタリックに冷たく輝く人工の物。

剥き出しの指関節。マニピュレーターと呼ぶ方が実感が湧く。

樹脂製とも金属製ともとれるヘッドセット。下から伸びる黒髪は本物……本物っぽい。コトシロさんの方が長いけど、琴葉ちゃんによく似た髪質だ。

黒いバイザーが両目を覆っていて、目の表情が読めない。……目はあるのだろうか？ 目のあるべき位置からコードが出てたら嫌だな。

そして鼻から下、細く尖った顎まで生身。首は樹脂製のハイネット
クで覆われている。

胴体は人の物だ。あの肌は、人工の物ではない。そんな肌をハイ
レグの薄い衣で隠している。

で、問題は両腕と両足。完全に機械。

肩間接なんかは剥き出し。あと、後頭部から二本伸びたオレンジ
色のチューブが気になるところか……。ドレッドヘアではなさそう
だ。

そんな半メカの人物が仁の前、小さなコンソールの脇に立ってる。
本物だとしたら、仁のメカフェチが目覚めようと、……もとい。
それこそアルフレイ・ランドという国はいつたい？

「じゃ、ライラさんは、独裁者のお子様ではないということに？」
「お言葉の理解に苦しみますが、ライラは実力で今の地位に就いた
将校です」

「そうでしょう、そうでしょうとも！」

仁は話を誤魔化した。顔が赤くなっているのを静めるため、ジュ
ースに手を伸ばした。

ミアの分も出ていたが、早々に飲み干し、今は仁の膝で眠りこけている。仁が喋るたび、ミアの尖った耳がヒクヒク動いている。眠りが浅いのだろう。

「で、琴葉を保護しているത്？」

さらに勘違いを亡き者とするため、話を無理に戻した。

「今はだめですが、条件がそろえば接見室に入ることができます。そのあたりはライラに聞いた。ここの病院はエステ機能付きだ。琴葉は、ずいぶん余裕をぶっこいてくれている。

居眠りから目を覚ましたのか、膝の上でミアが大きな欠伸をした。コトシロが細かく動かす指を目で追うミア。たぶん、コトシロもミアを気にしているのだろう。

「ミアちゃんというその幼体。良い名前をおつけになりましたね。金獣の言葉で『小さな女の子』という意味なのですよ。性的な意味で」

「だめじゃん、それ！」

あれ？ ということは……。

「コトシロさん金獣の言葉を話せるんですか？」

「当然。わたくしはアルフレイ・ランドのコントローラーです。言っただけのような存在ではありませんが、金獣もわたくしの支配下に形式上あるのですけれども、困ったものです」

顎に人差し指を当て、小首を傾げるコトシロ。
そりゃ確かに困るでしょう。

「ミアちゃん的首輪に付いている飾りですが……」

言葉を句切ったコトシロさんが、含み笑いをする。

「私ミアちゃん、よろしくね」

ミアが喋った。

いやいやいや、ミアの喉元、首輪から声が聞こえた。

当のミアが一番びっくりしている。二本足立になって目を丸くしている。

「名目上は金獣の幼体の監視なのですが、首輪には、簡単な位置発信器とスピーカーを仕込んでいます。これで迷子になっても位置が特定できます。ミアちゃん、迷子になったら困るもんねー」

それは便利だが、コトシロさん、意外とファンキー。子供が好きなんだなー。

仁の顔が少しにやける。

いかんいかん、話がそれた。ライラさんが変な顔をして、こっちを見てる。

仁は、咳払いを一つして話を元に戻した。

「で、次にこの国というか、地域なんですけど、……アルフレイ・ランドは、コトシロさん達がチキユウと呼ぶ惑星最大の大陸なんですよね?」

アルフレイ・ランド。アルフレイ国という意味だろうが、……仁の記憶に、アルフレイなんて国も大陸もない。

「そうそう、百聞は一見にしかず。地図をご覧ください」

コトシロが壁に顔を向ける。埋め込まれた横長のディスプレイが輝きだす。浮き上がってきた画像はアルフレイを中心としたモルワイデ図法。衛星写真が元になってる。

デフォルメされたタツノオトシゴというか、腰をひねったカブトムシのメスというか……。

それがアルフレイ大陸。

大陸というより、大きい島と言った方が良いかもしれない。

陸において面積が広いグループを大陸と定義するならば、アルフレイ・ランドは大陸だ。

そんな図形が南半球に一つ。

で、その自称大陸以外は全て青色。つまり海。両極も青。白いのが無い。

ちよこつと離れた西の方に、子供が書いたびっくりマークのような陸がある。その向こうは芥子粒のような点々がまばらにあるのみ。

「なるほど」

頷く仁。あの超常現象が原因だ。ここは地球じゃない。いわゆるパラレルワールド。水の量がハンパねえ。

そして次が、ある意味一番肝心な話。パラレルワールド説を冷静に聞けた理由なのであった。

15・ハーレム・ハーレム！（後書き）

いよいよ、アルフレイランドの謎が明かされる！
クレアさんやライラさんの謎が明らかに！（煽っているつもり）

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の真心が付いてきます！

16・アルフレイ人の秘密。

「えーと、それからクレア……大尉や、ライラ少将たち、アルフレイの人たちは、エルフイって種族で、人間じゃない、と？」
そこがいまいち信じにくいところ。

「ええ、種族どころか生物ですらありません。エルフイの初期開発名称が、ロボ・ワイフだったそうです」

「ほほう！」

仁は、眉につばを付けてから話を続けた。

「えーと、人の手によって作られた疑似生命体で、……原始分子から始まって、体を構成するタンパク質まで、全て無から人の手によって作られたと……」

「その通りです」

ライラが胸を張る。

「エルフイは工場で生まれ（ロールウト）、一括して教育されます。見かけはヒトと大差ありませんが、ヒトではありません。生物でもありません。疑似微生物や疑似昆虫を初め、食料となる動植物まで全て、我らが敬愛する、創造主^{マスター}ヒトの生み出した物。我らエルフイにとって、創造主であるヒトは、神に相当するのです」

その点にだけは！ とばかりに合いの手を入れるライラ少将。マスターの発音あたりで顔が輝く。

人間を作ったのが神であるなら、彼女らにとって、エルフイを作った人間が神の地位に立つというわけなのか？

でも、神扱いの割に軽い。それは宗教観が無い証。ここは神様のいない世界。 と、これは仁の推測。

クレアさんが母と呼ぶ人は育ての親か……。父親が存在しないと言っていたのは、本当に存在しないという意味だったのだ。

「で、もともとチキユウに住んでいた人間達は、何らかの理由で、ある時を境に、地球上から姿を消した、と？」

コトシロがゆっくりと頷いた。

「約千年前のお話です。場所は知らされておりません。おそらく衛星軌道より上の、どこかに、新しい居住区を作り、移り住んだものと思われます」

上を見上げる仁。スペースコロニーか、他の惑星へ移住したのだろうか？

移住した理由はなんだろう？ 戦争か、昨今流行の環境破壊か。陸地がアルフレイだけになったのも、なんか理由になってるのだろうか？

「そして、そのどこからか、人間達が『ビフレストの橋』という転送技術を使って、地上へやってくる、と？」

ゆっくりと頷くコトシロ。

「マスター達は、ビフレスト・ポートと呼ばれる施設内に降りてくる、ビフレスト・ポットで行き来していました。最繁期は六百四十機あったビフレスト・ポットでしたが、故障や劣化が進み、現在はたった一機。それも故障するのは時間の問題」

コトシロの目がこちらからは見えないので、何を思っているのか、いまいちわからない。

「なぜか人間、……もとい、マスター達が来なくなつて二百年が過ぎたと？」

何かが起こつたな！

「正確には三百年で一人だけ。とても悲しい瞳をしたマスターであつたと伝承にあります」

コトシロが、バイザーの内側に写っているであろう情報を読み取つていた。

「本物の『ビフレストの橋』はエレベーターサイズ。御降臨される場所も決まつております。山一つが破碎されるような危険なシステムではありません。ジン様が巻き込まれたという超常現象が引き金となつて、いわば『亜ビフレストの橋現象』が起こつたものと推測されます」

ま、そのあたりは納得できる。つーか、体感したし、死にそうになつたし。

「で、もう一度超常現象が起こる可能性が高いから、その時は元の世界へ帰れる、と？」

そこが一番大事。大事だからもう一度言つ。

そこが一番大事！

この話をさつき聞いたから、ここまで冷静でいられたのだ。

素の表情で　目はバイザーで見えないが　頷くコトシロ。下の表情は、おそらく柔和なものはず。

「我々はジン様の世界まで、ピンポイントでビフレストの橋をかける手段を持ち合わせておりません。しかし　」

細かい顎を引き、口元を引き締めるコトシロ。

「エネルギーバランスを戻すため、同じ現象が必ず起こると断言できます。たとえるなら……そうそう、柱時計の振り子が戻ってくる様な。揺れ戻しですね。その時が唯一無二のチャンス」
喜色を顔に浮かべる仁。

「ああ、今よい知らせが入ってきました。中央電算部からの報告です」

バイザー越しに遠くを見るようなコトシロ。

「二回の事象で、亜ビフレストの橋現象発生時のエネルギースペクトルパターンを採取・分析できました。充分観測が可能です。そして我がアルフレイの全観測システムは、総動員体勢に入っております」

光が見えた。

16・アルフレイ人の秘密。(後書き)

やればできるじゃないか！ 2回更新/日
初期のナニではダツチ……ゲフンゲフン！

次回更新は11/7お昼の予定。

よろしければポチツと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の投げキッスが付いてきます！

17・まっ昼間っから・ハーレム(前書き)

あれ？ アップしてたつもりが抜けてる？

17話と18話が抜けてました。
とんでもないポカミス！

申し訳ないです！

17・まっ昼間っから・ハーレム

「ただし！」

コトシロが語調を強めた。

「未知のエネルギー、また、発生原因不明が故、いつ起こるかの予想が付きません。十分後かもしれないし、十年後かも知れませんが」
仁の顔に浮かんだ喜色はそのまま。ただ、紙のように薄くなっている。

いつ帰れるのかわからない。

「その事を認識しておいてください」

そして、コトシロの物腰がもとのように柔らかくなる。

仁は天井を見上げた。

でも、きつと帰れる。

「それと、マスターが帰ってしまうと、エルフィ達は心の支えをまた無くすと言うことも」

仁のため、仁を元の世界に返すために努力するエルフィ達。だけど、その努力が実を結ぶと、悲しい結果になるということだ。

「話戻りますが、人類が地上を去ってからエルフィが生まれたのですね？」

コトシロは頷いて答えた。

「時系列的な意味では合ってますが、一部訂正させていただきます。エルフィは生まれたのではなく作られたのです。エルフィは生物と認識されておりません。ロボットの一種に分類されています。よっ

て人権というものもありません。エルフィとは、ヒト女性の人権を守るために作られた疑似生物なのです」

女性の人権ですか……それは主にアレに関する人権ですね。……
ってことは？

「で、エルフィ……さん達が作られた目的ってのが……えー、……
いわゆる……」

急におどとした態度を取る仁。目が拳動不審。

続きはコトシロが引き継いだ。

「いわゆる風俗ですね」

ごく普通に、そう、「あ、春ですね」ってくらいの気軽さで言い放つコトシロ。

「我らがマスターと呼ぶ存在は、人間の成年男子。アルフレイ・ランドは人間の男子専門の地。故に、女性型の疑似生命体しか存在しません」

落雷に匹敵する衝撃が仁の全細胞を貫いた！

全人類（健全な男子限定）が一生に一度は夢見た世界！

女の子ばかりの世界。

人（健全な男子限定）、それを理想郷と呼ぶ！

仁の鼻息が荒くなるのも致し方あるまい。

「エルフィは誕生し（ロールアウト）た時から死ぬまで同じ外見を保ったまま。例えばライラは十七歳の姿で誕生し（ロールアウト）、三十五年間活動を続けている事になります」

じゃあ……、体年齢二十歳だと言ったクレアさんは、二十歳の外見で生まれてずっと二十歳の外見のまま育ったんだ。……これは、なぜか合点がいった。

「さて、ジン様」
いままでコトシロの後ろで控えていたライラが、前に進み出た。
なぜかコトシロの口元に、含み笑いが浮かんでいる。

「ヒト男子であらせられるジン様は、実に百年ぶりの御降臨という事になります。エルフィ達は全て女性タイプ。個体数は百四十万。全てがマスターからの愛を数百年間求め続けておりました」
のほほんとしたなりのままソワソワしているライラさん。
神様。もの凄く期待していいですか？

「ある者は恋いこがれ、ある者は憎み、絶望し、夢を見たまま生を終え……」

ライラ少将は、いつもの表情のまま、大人びた仕草で指を鳴らした。

仁は音に気づいて後ろを見る。

後ろの壁が、するすると左右に開いていく。
現れたのは、……綺麗どころが十人ばかり。

女子学生風、アイドル風、男装の麗人、女教師風、お嬢様、同年代、年上、ロリ、エトセトラエトセトラ、様々なコスチュームで身を飾った見目麗しきエルフィの方々。

みんな目が熱い。あれは恋をした乙女の目。もちろん恋の対象は、仁ただ一人。

「さて、ご用意させていただいたのは左の端から、陸上軍教育学部の学生、ネーナ。続いて、陸上軍酒房部所属、アルナ。陸上軍出入りの備品製造会社社長、アッカそれから」
「ちよっと待って、ちよっと待ってください！」

仁が手を振ってライラによる紹介をとめる。

「ひよつとして私をお求めですか？ まったくかまいません。むしろお願いします」

頬を赤らめるライラ少将。実に初々しい……。いやいやいやいや！

昇ったはいいが、梯子を外されては困る。念のため、わかりきった質問をぶつけてみる。

「この皆さんはなんですか？ 僕にどうせよと？」

にっこりと笑ったまま、頭頂部にはなマークを浮かべているライラ。

「なにつて、……ジン様のお側付き恋人候補者です。夜のお供はもちろん、トイレに立たれた際の介添えまで、なんでもマスターの言いつけ通り働きます」

「凄いことをサラリと言つてのけるライラ。さすが少将！ ……つか、全員陸上軍縁故の女の子ばかり。権力闘争見え見えじゃん！」

「どれでもお選びください。それとも全員、お持ち帰りになりますか？ 全然かまいません。むしろ願ったりかなったりよ」

仁が持つ保身能力がブレーキを掛けた。

想像するに……、陸上軍の関係者というふれこみだが、おそらくライラ少将個人の息がかかりまくった女の子ばかりを厳選したのである。恐るべきは、その向上心。

これは……うかつな行動に出られない。

綺麗なお姉様は好き？ はい大好きです！
しかしっ！

大奥的な、或いは飛鳥から平安にかけての権力争いが仁の脳裏をよぎる。歴史、勉強しててよかった。

待ったをかける仁の保身能力と、もういいじゃん諦める男の本能がせめぎ合う。

「マスターは絶対者。なんなりとご命令ください」

ライラの言葉が男の本能にエネルギーを与えた。

「絶対者？」

そんな大げさな。でもこれはっ！

「我らエルフィを作ったのがヒトであるゆえ、ヒトは我らの神に相当するでしょう？」

さっきも同じような事言ってたっけ。でもまさか、ここまでとは……。

「エルフィの存在意義は、神であるマスターを愛すること。天上の幸せは神に愛されること。ですから、マスターはご遠慮なさらず、我らに何なりとお申し付けください」

絶対者。神。なんでもオツケイ！ 大事な事だからもう一度、なんでもオツケイ！

そして、仁の煩惱が理性を退けた。

「例えば、この場で服を脱いでください、とか言っても……？」

「皆さん、マスターのご命令です。直ちに脱衣！」

躊躇無く衣服に手をかける女の子達。とても嬉しそうに脱ぎだした。

有り難う神様。さようなら理性。仁は、猛烈な感動に固まったまま動けない。

「では、私も」

ピンク色に頬を染めたライラ少将まで、襟に手をかけた。

「少将、しばしお待ちを。大事な手続きを忘れていきます。皆さんもストップです！」

コトシロが割り込んできた。

「手続き？ はて？ 初耳ですね」

ライラ少将が受ける。穏やかな表情を浮かべたままだが、言葉に険がある。

コトシロはライラの言葉を無視した。あなたに向けて言ってませんよ、と言わんばかり。

「わたくしは調整者。（コントローラー）アルfrey・ランド全ての電子機器を調整する者。たとえば……」

部屋の照明が暗くなる。ドアが開く。コトシロは指一つ動かしていない。

「この部屋のように、各セキュリティシステムや、エルファイ生産管理のコンピュータを管理したり調整したりするのがわたくしの仕事」

部屋の照明が戻る。ドアが静かに閉まり、カチリと音を立てロックされた。

「もちろん陸上・海上両軍のコンピュータまで管理しています」

コトシロはライラを見ていない。ライラも、のほほんとした表情を浮かべたまま、コトシロを見ていない。

「さて、ここからがわたくしのお仕事。本来ならヒトの管轄機関で発行されたマスター認定書を提出し、登録させていたただかねばアル
フレイ・ランドの地にとどまることができせん。ただ今回は緊急事態の上、特殊案件扱いに相当します。ジン様が人間の男子であることは、入院中の検査で証明済み。病気等も持つておられません。よって、アルフレイ・ランドの地において、今からマスター登録をいたしましょう」

「は、はあ……」

要はパスポートがないと、きゃっきゃうふふできないから、パスポートを発行いたしましょうという事だ。

「ただ……一点だけ、証明しようのない点がございまして……アルフレイ・ランド条例三百一条記載、自己申告による認定という事例に当てはめたいと思います」

なんか含み笑い浮かべているよ、コトシロさん。

ライラさんは、相変わらずおっとりとした立ち姿に、柔らかな表情を浮かべてるけど、苦虫をバリバリと噛みつぶしてる音が聞こえてくるのは気のせいかな？

よろしいですか？ とコトシロが念を押す。

ハイと頷く仁。なんだろう？ 知らず知らずミアを抱く腕に力が入る。

「では質問です。ジン様は、『おいくつ』ですか？」
即答してはいけないっ！

仁の頭の隅っこ。十四歳男子としての知性と煩惱が、最大のピン

チとチャンスを告げる。

なぜわざわざ年齢を聞くのか？ 仁は中学二年。十四歳。見ればわかる。それが引つかかる。中二の頭が熟考を開始した。

ヒントはある。アルフレイ・ランドに散りばめられている！

コトシロの説明を思い出せ！ ライラ少将の言葉を思い出せ！
と、十四年の経験が叫んでいる。

。
いわゆる風俗ですね。

お酒と煙草は二十歳から。

……それだあつ！

「は、二十歳はたちになったばかりです」

沈黙が続く。物音はミアの寝息だけだ。恐怖で背中を汗が一筋流れた。

「二十歳にしては、ずいぶん……お若いような？」

コトシロが仁を疑っている。ライラに同意を求めた。

いや、これはカマかけだ。仁の煩惱が、脳に攻撃命令を出した。

「ひどい、背が低いのは僕のせいじゃないのに！ マスターに対してなんとという仕打ち！」

仁、一世一代の猿芝居。嘘丸出し。冷たい汗がだくだくと額を流れていく。

「申し訳ございません。失礼をお詫びいたします。これでジン様はマスターと認定・登録されました。よろしいですね？ ライラ・リ
イラ陸上軍少将？」

ずいぶん堅苦しい名称を口にする。

笑顔を浮かべたまま、ライラはワントンポ置いて頷いた。

二者間にどのような戦いがあったのか？ なんとか最大のピンチを脱したようだ。

コトシロの唇が微妙に歪んでいる。まるで笑いを我慢しているみたいであった。

18・クレアさん再登場。だが、ハーレム！（前書き）

抜けていた分 - 2

18・クレアさん再登場。だが、ハーレム！

これでこの話は終わりとはかり、コトシロが手を二回打った。

「さあ、さあ、マスター！ ご指名ください」

うって変わって、ライラの話をお勧めにかかるコトシロ。だがセリフは終わっていない。

「それとも市井しせいに下りて、お探しになりますか？」

その言葉に、ライラ表情は変わらない。相変わらずおっとりとした笑顔。だが、目が笑っていない。

これ、権力闘争だ！

なんか怖い。できれば、逃げたい。

「あの、選ばなきゃだめなんですか？」

仁、溢れる劣情を全力で押さえつける。性欲よりも生存本能が勝った。逃げの一手。

「ご指名はデフォルトです」

ライラ少将の目が怖い。逃げられない。

本心は諸共飛び込みたい。なにか良い手は……。

あつたーっ！

「じゃ、クレアさんを指名します！」

凍てつく波動が空間を支配した。俗に、間が空いたという現象。

コトシロは笑いを噛みつぶしていた。ライラの目が、いっぱい泳いでいた。

そう、クレアの所属は、陸上軍少将ライラー派。そして、彼女の母は「海上軍」の軍人。

「決まりましたね。クラス・トリプルS発動！」

コトシロが厳かに宣言する。部屋の照明が赤基調に変色した。壁を埋めるディスプレイに明朝体風のエルフィ文字が流れる。

眼前のパネルに手を伸ばすコトシロ。

そっだけ旧式になっているマイクのスイッチを入れた。

四音の予鈴が鳴る。

「全、エルフィに告げます。ただいまジン・オガタ様をマスターであると認定しました。皆、お勤めに励むよう要請いたします」

スピーカーで拡大されたコトシロの声が、締め切ったこの部屋にまで聞こえてきた。

「ここからアルフレイ・ランド全域へ放送できるのです」
何事かと目を丸くしている仁への答えだ。

……ああ、あのマイクで全国へ放送できるんだ。災害放送みたいなもんか……。

「少将、この件はあなたに一任します」

「了解いたしました！」

びしりと敬礼。ライラーの頬が紅潮している。

アニメでよく聞くタイプの警報まで鳴り出した。

うるたえて、ソファァーから腰を浮かす仁。ミアの下半身がブラブラしている。

「全アルフレイランド行政組織は、ライラ少将を全面的にバックアップ！」

国という組織が、ただ一つの目的のため動き出したエネルギーを感じる。

「承りました。アルフレイ全軍出動！ 直ちに準備に入ります」
全軍つて……。

マスター一人を接待するのに、そこまで大きな組織を動かさねばならないのか？

「マスターに可愛がられるよう、全戦力を動員してクレア大尉を装備します」

駆け足で部屋を出て行くライラ少将。

部屋の照明が元に戻った。クリーム色の暖かい明かり。

「ジン様、いえ、これからはマスターですね。マスター、大変お見苦しいところをお見せいたしました事、深く陳謝いたします」

一人残ったコトシロが頭を下げた。権力闘争の事だ。

仁が気づいたのを察知してお詫びだろう。

「いえ、別にいいんですけど……。ここまで大げさにしなくてもいいんじゃないですか？」

ミアをブラブラさせながら、恐縮しまくっている仁。

「百年という年月は長いのです」

コトシロの言葉は答えになっていない。

「三百年という歳月はもつと長い。彼女らエルフィはマスターを愛し、恋に狂う。それだけが存在理由。三百年間見続けていた夢が現

実となったのです。存在が肯定されたのです。この程度のお祭り騒ぎ、煽ってやってなんの罰があたりまじょうか？」

答えになっていた。

ミアが腕の中で身をよじる。ちよつと重たい。

「コトシロさんも嬉しいのですか？」

目は隠れて見えないけど、見開いたような気がした。

「嬉しくないわけではありません。彼女らの浮かれ具合を見ている限り。……分類上、わたくしはコントローラーという種族^{パーツ}であつてエルフィではないのです。マスターを愛さなければならぬ、という規制は受けておりません。そのかわり、アルフレイランドを調整することに幸せを感じる仕様^{チユン}になっております」

「はあ、そうですね、と生半可な相づちを打つ仁。

「それに……」

機械の手を上にあげる。

肩の球体関節からモーター音がする。肘と手首と指の関節が回転し、おのおのを任意に動かしていく。

一分のーリアルフィギュア。仁は指関節を凝視した。

「オイルさしたりするんですか？ あ、密封^{シール}されてるんだ」

「それは秘密です」

機械の指が、音もなく後退した。

「お部屋にご案内させましょう。準備が整つまで、お待ちください」

オレンジの唇に浮かぶ寂しそうな営業スマイルが、仁を誘つ（いな）（いな）。

懐かしい。と、仁がその時思ったのは、コトシロが寂しそうな顔

をするからだったのかもしれない。

準備ってなんだろう？

仁は、王族が宿泊するような広大でリッチなスイートルームで時間をもてあましていた。

床面積は学校のグラウンドより広い。天蓋有り無しとのキングサイズのベツトルームが一つずつ計二つ。クイーンサイズのベッドを二つ並べた寝室が二つ。

サイドチェストの引き出しを開けてみた。チョコレート箱があった。

食べてみよう、箱を開けたらゴム製品が出てきたので、あわてて元に戻す。

全てのベッドルームに巨大な鏡と、バスユニットが付いている。リビングは、……たぶんリビングであろう、ソファと床が一体化した超贅沢品。マホガニー製巨大暖炉つき。

隣接した書斎は、一流会社の社長室もかくや、と言わんばかりのリッチタイプ。

メインはマスター用だろう。テニスができるんじゃないかという程の大きさを誇る、黒檀で作られた巨大机。

ソファみたいな椅子に腰掛け、一番小さな引き出しを開けてみた。耳搔きやら裁縫道具やらの小物が入っている。

天井まで届く本棚から、ハードカバーを一冊抜き取り、開いてみ

た。

一糸まとわぬお姉さんの写真集だった。本の背表紙デザインを記憶し、元に戻しておく。

トイレはどこだろう？ あれはコンテナだろうか？ それとも冷蔵庫だろうか？

迷子になったらどうしよう。

興奮したミアが走りまくっていても全然気にならない。そんな仁専用ルームをライラがノックしたのは、あの騒ぎの二時間後だった。

笑顔だが、なんかやつれてる。目の下に赤い痣ができてたり、髪の毛が乱れていたり。

誰かと喧嘩でもした？ 反乱軍？ 金獣の襲撃？

「お待たせいたしました。改めて紹介いたしましょう。クレア・コウジユです」

クレアを押し出した。

その姿は、軍帽以外、すべてに強モザイクを入れなければならぬ、あるまじき出で立ちであった。

18・クレアさん再登場。だが、ハーレム！（後書き）

いせちゅっど（汗）

じめんなわいー！

19・おでん。だがハーレム！

「いやー、びっくりした。まさか、あんなスタイルのクレアさんと再会するとは！」

「いやかましいわー！」

手にしたスリッパを床にたたきつけるクレア。

今は白い軍服のクレア。ただ、ちょっと胸元にくりがある。そこからマシユマロのように柔らかかそうな谷間が覗いている。それが陸上軍服飾部が、クレアとせめぎ合った末の、精一杯の抵抗であった。

「マスターを喜ばせようって気持ちは嬉しいけど、全力で方向を間違つて、いえ、何でもないです！ すんませんでしたーっ！」

大型の拳銃を一挙動で抜き放ち、第一弾を装填し終えたクレア少佐。顔が真っ赤だ。

「これは対金獣用の大型銃だ。アレについてこれ以上何も言うな。全て忘れる、いいな？」

アレは、忘れると言われて忘れられるような、柔なインパクトではない。それでなくとも仁は十四歳。向こう半年、あの記憶だけで生きていけます的生動画であった。

「はい、忘れました、少佐殿！ そうそう、ご昇級おめでとございますー！」

そう。彼女は仁お側付きという地位を得て、一階級上がったのだ。アルフレイ陸上軍マスター・ジン付き少佐というのが、今の彼女の地位。

「ヒト一人助けただけで、昇級されてしまって！ 貴様……じゃな

くてマスター！ 少佐という立場を知っておるか？ 管理職だぞ！
前線に出られないのだぞ！ 新兵をネチる……もとい、教育する
立場で無くなったのだぞ！ 本官以外に厳しく新兵をネチる……も
とい、鍛えられる人材が、このアルフレイのどこにいると言つのか
！」

サバイバルの時より一回り大型になった拳銃を本棚に向かって三
連射。

ハードカバー写真集を含む、貴重な資料が粉々になって吹き飛ん
だ。

「どうなさいました！」

ドアが開き、少女兵が二人なだれ込んできた。手には短機関銃。
ドア外で待機するマスター専用衛兵の女の子だ。

とうぜん、ミニスカート。しゃがんで構えている子など、ふつく
らとしたシマシマの逆三角が丸見えで、目のやり場に困る。

「僕がちょっと、アレしてコレしてナニしただけです！ 何でもあ
りません！」

渋々というか、仁に流し目というか、「わたしも是非お側付きに
！」と訴えてるようなサインを送りながら、部屋を出て行く衛兵。

「ご迷惑おかけしました！ ごめんなさい、ごめんなさい！」
謝りまくる仁。

あれ？ ちょっとまでよ、なんで僕が腰を低くしなければならな
い？

「クレアさんは、エルフィなんですよね？」

「何を今さら」

「エルフィはマスターである人間の前に出ると、その人を愛そうと

する習性がある」

「その通りだが、なにか？」

「じゃ、なんで僕を前にして何ともないんですか？」

「精神力」

会話が途切れた。

「えーと……」

「本官の気質は、より軍人としての運用に重きを置かれて設定されている。エルフィ全員がマスターに恋狂いしてはシステムが成り行かんぞ。説明があつたはずだ。我らエルフィは人造疑似生命体である。疑似生命活動を開始する前に性格を設定できるのだ」

つまり、本官が一番キャツキャウフフしにくい人格であると、こう申しているわけだ。

がっくり膝をつく仁。

……他に、お尻の軽い、可愛い子がいっぱいいたというのに。ドアの外にも二人……。

「マー・カー」

二歳児のミアに、優しく頭をなでてもらっている。それが悲しい。それが惨め。

中学二年男子として、最悪の人選をしたのかもしれない。

「ま、選んでくれて有り難いと思っている。エルフィとして生まれただからには、マスターに愛されてナンボの人生だからな。人生五十年。エルフィの一生は夢幻の（ゆめまぼろし）ように短く儚い」
どこかで聞いたようなフレーズ。

「寿命短いんですか？ エルフィの皆さん」

仁の問いに、まずいこと聞かれたとばかり舌打ちをするクレア。額のクリスタルを指でトントンし、仕方ないとばかりに口を開いた。「きっかり五十年だ。多少人格が変わっていいのなら、意識を新しい体に移すこともできる。過去、マスターがお気に入りエルフィをそうやって延命させたことがあるという」

いや、ほんとロボットだ。パソコンの寿命が来たら新しいパソコンへファイルを引っ越しさせるような感覚だろうか？

クレアさんが悪戯っぽく笑う。

「なかには大枚払って、性転換目的でエルフィになるマスターもいた、という話もある。どうだ？ 貴様……もとい、マスターも、一つ経験を積んでみるか？」

プルプルと激しく首を振る仁。

「だろうな」

S的愉悦感をひとしきり顔に浮かべるクレア。でも綺麗。額のクリスタルが……あれ？

「クレアさん、額のアクセサリ、ピンク色してましたっけ？」

指さす仁。ダイヤモンドのように無色透明だったクリスタルっぽいジュエリーが、綺麗なピンク色に染まっていた。

「あ、これか？ これは気分的なモノだ。気にするな」

トントンとクリスタルを指で叩いたクレアさん。いそいそと黒檀のディスクから椅子を引っ張り出し、綺麗な足を組んで座ろうとする。

組み終わる直前がチャンス！ 姿勢を低くする仁。いや、ちょっと

と速すぎ！

何も見えなかった……。

もともとタイトミニだったスカートがさらに短くなっていて、とても目の保養に……もとい、目の毒だ。

極薄のノーパソを立ち上げ、何やら入力した。

「それは？」

「仕事だ。毎日、その日一日の報告書を提出しなければならぬのである！」

仁は、窓から外を見る。抜けるような青空が広がっていた。

続いて、金銀で装飾された豪華で巨大な鳩時計を見上げる。正午には数十分を残した時間だ。

「まだ一日終わってませんが……」

「朝から一回。……朝の方が調子良いというマスターがいると聞くしな。就寝は二十一時と。こんなもんでいいだろう。いいな、口裏を合わせるのだぞ！」

口裏をあわせるも何も、ぜんぜんいい目見てないし、見られないし！

「僕マスターだよ！ 知ってる？ マ・ス・タ・ア！ エルフィの皆さんにとって絶対者マスター。神！勝手にスケジュール決めないでくれる？ パンツ何色だよ！」

怒りのあまり、クレアに指を突きつけ声を荒げる仁。

「知ってるよマスター！ 薄ピンクだよマスター！ だから何だマスター！」

立ち上がるとクレアの方が背が高い。軽く額を小突かれた。

「貴様……もとい、マスターは『恋人』という玩具が欲しいだけだろう？ 恋という経験をしたいただけだろう？ コト八とかいう女の事をどう思っているのだ？ 私の、いや本官の前でコト八を好きと言ったのはなんだったんだ？ 真剣にヒトを好きになった事があるのか？ 恋をしたいだけ。つまり恋に恋しているだけではないのか？」

一気にたたみかけるクレア。彼女の言葉という切っ先はレイピアより鋭く、十四歳の心を切り刻んでいく。

「ごめんなさい、ごめんなさい。もう虐めないでください！」
謝ってしまおう仁。耳を押さえ、小さくなつて震えている。

クレアは眉をゆるめ、ため息を一つついた。

「わかれば良い。あまり気にするな。気を抜くと好きになつてしまつから、自分を奮い立たせているだけだ」
うって変わつて優しい声。

「え？ 耳ふさいでたんで聞き取れませんでした。最後の方なんです？」

「何でもない！ 気にするな！」
また怒り出すクレア。

「そうそう、お昼時だな。昼食をとるとしよう。その後、町の案内をしてやるう」

話がちがらりと変わった。

ディスクの受話器を取り、なにやら命令している。頬がちよつぴり上気しているクレアであった。

「貴様……もとい、マスターの好物であるう？」
……お昼はおでんだった。確かにその通りだが……。

話通り、練り物の多い具材であった。

香辛料をよくきかせたブイヤベース仕立てだった。おでんであったおでんでない。

それは何かと尋ねたら。煮て異なる料理。うまいこと言えた。

仁は、フォークに刺さったパイプ状の練り物を眺めていた。

テーブルの下、ミアが幸せそうな顔をしてスクリュー状のカマボコにかじりついていた。

クレアさんは、ナイフとフォークを使って黙々と食べている。

「食べるのか？」

「いえ、いただきます」

ナイフで一口サイズに切り取り、口へ運ぶ。情緒もへったくれもない。

美味しい、でもおでんの味じゃない。もちろん関東煮の味でもない。

「ところでクレアさん、いつになったら琴葉ちゃんに面会できるんですか？」

きよとんとした顔を上げるクレア。

「会いたいのなら、申請書、出しておこうか？」

申請しなければ許可も下りない。官僚的なアルフレイ・ランドのシステムであった。

19・おでん。だがハーレム！（後書き）

辛子をたっぷり付けたおでん。おいしいですよね！

次回、11/8お昼更新予定！

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者のアレが付いてきます！

20・琴葉の病室

「やーやー、どうもどうも！ あ、こっちもですか！」

時は、フォークとナイフで食べるスパイシーな昼食後。

場所はオーブンカーの後部座席。

セントラル・シティの、西端にそびえるセントラル中央病院に向かう道中。

沿道を埋める無数の女の子達に手を振っているところ。

巨大とはいえ、一つの都市を半分横断するだけで、パレード騒ぎ。

色めき騒いでいるエルフィ達。様々な職業の制服で集まっている。

みんな美人。

一大コスプレ大会といって良いかもしれない。

そんなお姉さん達が、仁へ湯水のように熱い声をかけている。

具体的には「ピー」とか、「ピーピー」とかで、アンダー十四に投げかける言葉の羅列ではない。

アルfrey・ランド政府公式発表参加人員、百三十九万六千体。

アルfrey・ランドの総エルフィ数は百四十万體。残り四千體は軍関係者でパレードを仕切っている。

全アルfrey・ランド国民がこのパレードに参加していることとなる。

これ全て、仁にラブコールを送っているのだ。

現に、運転手に任命されたエルフィは、感極まって泣き出したものだった。

手を振る所作にも熱が入ろうというもの。一緒になって手を振っているミアの横で、黒いサングラスをかけたクレア少佐は、眉を上げ、周囲を警戒していた。

「ね？ 選り取り見取り？ 選り取り見取り？ そうでしょクレアさん！」

仁は、完全に舞い上がっていた。

「思い出したのだが、貴様……じゃなくてマスター。前に山の中で十四歳だと本官に言っただけじゃなかったか？」

手を振る動作をピタリと止める仁。助手席に座るライラも、意識を後部座席に向けている中、ミアだけが元気に手を振っている。

クレアを見るも、ティアドロップ型の黒いサングラスの下、表情は読み取れない。でも、なんだか不機嫌だ。

「再調査するか否かは、本官の心づもり一つだが……」
参道の中に見知ったエルフィがいたのか、軽く手を挙げて挨拶するクレア。

「あ、まあ、琴葉ちゃんの容態が心配だしね。浮かれない方が良いでしょう。あははは……」

何も言わず、仁を見上げるクレア。ふいと横を向く。
「な、なんかまずい事でも僕、言いました？」

クレアという女性を前に琴葉の名前を出したのがいけなかったのか？

ゆっくり頭を（かぶり）振るクレア。

「手は振ってやって欲しい。なにせ、生きたマスターを見るのは数

百年ぶりだからな」

シートに座り、上品な仕草で手を振る仁。

「貴様……いや、マスターの言うとおり、選り取り見取りだ。気に入った子がいれば、拾っていくがよい」

妬いているのかな？ 職務にまっとうなだけなのかな？

「これから、メインイベントが待ってるわけだから、無駄なエネルギーは消費しない方がいいと思うぞ」

言葉の端々に陰を含めるクレアであった。

「よくわからないけど、面会条件がそろったんですね？」

「そういう事になるのだろうか」

明るいう照明。だのに陰気な廊下。それが病院。

頬を上気させ、必要以上に仁を意識した病院院長を先頭に、ライラが続ぎ、すぐ後ろで仁とクレアが並んで歩く。病院ということ、ミアは一階特別室でお留守番だ。飛び出してはいけないという事で鍵がかけられている。

話によると、琴葉は、未だカプセルに入っているとのこと。詳しい話はしてくれない。と言っても例の睡眠治療だろうから、面会のタイミングが難しかったのだろうかとうと推測する。

そここうするうち前方突き当たり、扉の前で立っている人が目に入ってきた。

コトシロだ。

この人が出てくるということは……。

院長が立ち止まっていた。こちらを向いて、行儀良くたたずんでいる。

「マスター。面会の条件が全てそろいました。お待ちせいたしましたことをお詫び申し上げます」

仁に形だけの詫びを述べてから、クレアに対し頷いてみせるコトシロ。目で合図を返すクレア。

院長は、それを合図として、チップキーをスロットに差し込んだ。扉が、ゆっくり開いていく。見かけより肉厚な扉が開くと、もう一枚、内側に閉じられた黒い扉があった。

黒い扉が、重い音を立てゆっくりと開く。奥にはさらにもう一枚、白銀の扉。合計三枚の扉が間を開けず開いていく。

全てのドアが開くと、白い空気が床に流れ出てきた。

それは、冷気だった。

20・琴葉の病室（後書き）

ここまで付いてきてくれた皆さん。
アズマダさんを信じてください！

次回、琴葉ちゃん登場！

次は9日 お昼の予定！

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者のナニが付いてきます！

21・琴葉から仁へ

ちょっと仰々しすぎないか？

仁の、顔の筋肉が強ばっていく。

コトシロが薄暗い部屋に入っていた。

「どうぞ」

振り向いて仁を招く。

導かれるまま、仁とクレアが、冷たい部屋の中に入る。

ライラと院長は外で待っていた。

この扉から先へ行けるのは、調節者であるコトシロと、お側付きエルフィのクレア少佐と、仁の合計三人だけのようだ。

仁は納得した。

つまり、お側付きというか、専属エルフィを携える事。すなわち、マスターとしての形が整い、正式にアルフレイ・ランドに認められるというのが、面会の条件だったのだろう。

部屋の中央に、たった一つの明かりが灯されていた。

木でできた小さな文机。

机の上には一通の封筒。

「どうぞ」

メタリックな腕を差し伸ばし、手に取ることを促すコトシロ。

生唾を飲み込み、ゆっくりと手を出す仁。気になるのが、クレアが後ろからのぞき込んでいる。

桜色した、軽い封筒。

琴葉からの手紙じゃないか。別に緊張する場面じゃない。

「ほんとに読んでいいの？」

コトシロを見る。彼女は小さく頷いた。

封筒に目を落とす。封はされていない。中の便箋を取り出して、
読んだ。

「壁のスイッチを押してください。中に最後の手紙があります！」

……またかよ。

苦笑いしながら後ろのクレアに顔を向ける。クレアは素早く、明
後日の方を向いた。

コトシロが壁際に移動した。そこには黒いスイッチがあった。

仁はボタンを押そうと、気軽に腕を伸ばす。

その伸ばした腕を捕まれた。メタリックな義手に。

なに？ とばかりに、仁はコトシロのバイザーを見る

「……この壁の向こうにコト八様がおられます」

だからその壁を開くためのスイッチだろう？

仁に見つめられ、顔をそらすコトシロ。ゆっくりと手を離す。と
ても冷たい手だった。

コトシロさん、何が言いたいのだ？

押せと書いているんだから押す以外無いだろう？ 仁は、首をひ
ねりながらスイッチを押した。

圧搾空気が漏れる音。

奥の壁が、ドア型に切り開かれた。

「いいかげんにしてよね、琴葉ちゃん！」
仁は文句を言いながらドアをくぐる。
中は、狭い部屋だった。

中央に棺桶大のカプセルが一つ。腰高の台に乗せられている。
カプセルに歩み寄る仁。

付属したパネルにデジタル表示。表示窓は全部で三つ。左の表示数は十。中央の表示数は五十五。右の表示数は……五桁の数字が一定の時間で変化している。

カプセルの上にピンクの手紙が乗せられていた。琴葉からの最後の手紙。

仁はそれを手にしていない。
カプセルに取り付けられた、たった一つの窓。そこを食い入るように覗き込んでいる。

窓の向こうには、顔を白い布で覆った琴葉が横たわっていた。

「これは、どういう!」
振り返る仁。クレアは仁を見ていた。でも、全てを知っているはずのコトシロが、顔を背けている。

クレアは、ちらりとコトシロを見てから口を開いた。
「失礼ですが、お手紙を読まればいかがでしょう?」
クレアらしからぬ丁寧語。

嫌な予感を振り払い、仁の手が手紙を取った。封筒の中に指を進入させる。

でも見てはいけない気がする。手紙を読んでしまえば……。

乾いた音を立て、中の便せんを取り出す。琴葉の筆跡。綺麗な字だ。

目を這わせる。

「仁へ、

琴葉です。

おたがい、ドジっちゃいましたね（笑）

仁、ケガしてませんか？ ケガしていたとしたら、だいじありませんか？

私はだめみたいです。

仁がこの手紙を読んでいるということは、私がだめになってから何日か後のことでしょう。

仁と会えずに終わってしまうのはさびしいですが、仁だけは元気でいてください。

そして、かならず元の世界に帰ってください。アルfreyの人たちはみんな親切です。帰る方法も、めどをたててくれてるみたいです。

その時は、私のお母さんとお父さんによろしく伝えてください。

悲しむなといつても、泣き虫仁のことだから、むだなことを言うのはやめておきます。

泣くだけ泣いたら落ち着いてね。

最後のお願いがあります。

この場にいるはずの責任者に聞いて、あるレバーをあなたが入れてください。

じゃあね、仁。さようなら

斧田琴葉「

……そんな馬鹿な。

「そんな馬鹿なっ！」
遺体安置室の壁を振るわせ、仁が叫ぶ。

「これを開けてください！ 琴葉ちゃん！ 琴葉ちゃん！」
甲高い叫び声を上げながら、カプセルを叩く仁。

「開けてどうするといのですか？」

コトシロが聞く。いやに落ち着いた声。

「人工呼吸に決まってるだろ！ 電気ショックとかないの？ 医者
を呼んでよ！」

喉が裂けそうな悲痛な声。カプセルをこじ開けようと爪を立てて
いる。

「マスター。いえ、ジン様。コト八様の心肺停止から十年経って
います。無駄なことはおよしなさい」

カプセルをこじ開けようと、指先に込めていた力が抜ける。

「十年？」

惚けたような顔でコトシロを見る。

コトシロは口をへの字にしている。辛そうだ。

「パネルの数字を見るがよい」

クレアがコトシロの代わりに口を開いた。

「左端に十という数字が出ているだろう？ それは経過年数だ。…
…そして。真ん中が日数。五十五日経ってるってことだな。あと、
右端が秒数だ」

クレアが歩いてくる。仁の肩に手をかけた。

「十年と五十五日前だ。諦めろ！」

一瞬、仁の顔が笑ったように見えた次の瞬間、表情が壊れた。くしゃくしゃになっていく口、頬、鼻、そして目。目が水っぽくなって、大きな水滴が現れて、それがこぼれて、どんどんこぼれて、流れとなって涙が頬を伝う。

「うわーっ！ うわーっ！」

クレアの両腕を力一杯つかんで泣き叫ぶ。

頭をクレアの胸に押しつけて泣いた。

クレアは、そっと仁の頭に手を置き、自分の胸に抱いたのだった。

「マスター・ジンが、亜ビフレストの橋で降臨なされた場所はハティ山。その余波で、上から三分の二が消滅しました。マスターが降臨されるまでは、アルフレイ最高峰だったのですよ。その隣に、スコール山という山がありまして、十年前は、ハティ山を抜いて最高峰だった山です。同じく、三分の二が消し飛びました。十年前のお話です。ウラシマ効果なのでしょう。繭の中での僅かな差が、現実世界では十年という年月の差になって現れたのです。これはマスターの責任ではありません」

あれからどれくらい時間が経っただろう。

今の仁は、同じく座り込んだクレアにもたれ、かるうじて座っている状態だ。クレアの胸が仁の涙で濡れていた。

我に返ると、クレアと一緒に毛布にくるまっていた。いつ掛けられたのかもわからない。

そして、頃合いを見計らったコトシロが、話を始めたのだ。

「先代のコトシロが、引退を決める直前のお話です。アルフレイランド始まって以来の天変地異。我らもどう対処していいかわから

ず、全てが後手に回りました。まさか大規模なビフレストの橋により引き起こされたとは、コト八様を調査隊が救助した後に判明したこと。それも救出限界時間を超えた五日後の話です」

コトシロも、仁の脇に座り込んだ。膝を抱える。

「事の次第を全て理解した我々は、全力で体組織の修復……マスター達の世界では治療というのでしたね。治療に当たりましたが、各身体機能の損傷が激しく……」

床の一面を見つめたままの仁。小さく頷く。

「どれもこれも、先代のコトシロが全力を尽くした結果です。誠に申し訳なく……」

重い体を持ち上げ、立ち上がる仁。

「琴葉ちゃんに最後の挨拶をさせてください。最後にもう一度顔が見たい」

琴葉の顔には白い布が被せてある。

「マスター。顔は見ないでやってください。綺麗な頃のコト八様のままの記憶で送ってあげてください」

あのととき、手を離しさえしなければ……。

どんなに痛かったろう、どんなに苦しかったろう、……そして、どんなに寂しかっただろう。

「それなのに……」

食いしばった歯の隙間から嗚咽が漏れる。だのに涙が出てこない。出し方を忘れてしまったようだ。

いや、涙が無くなるまで泣ききってしまったのだろう。

心から潤いが無くなっていく。ひび割れた荒れ地が広がっていく。体の中が砂漠化していく。

「コト八様が先立って御降臨なされたので、マスターの御降臨を予測でき、いち早い救助活動が行われたのです。マスターは、コト八様により生かされているのです。くれぐれも短絡的な事は、お考えなさらぬよう。コト八様を悲しませることだけはおやめください」

仁の、あまりの落ち込み様に、釘を刺すコトシロであった……。

21・琴葉から仁へ（後書き）

琴葉タソのキャラがお気に入りw

いつか彼女を主にしたお話を書いてみたいです。

次回、「クレア！メイクツ、アップーツ！」

UP予定は明日（10日）お昼。

よろしければポチツと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の真実が付いてきます！

22・クレア・メイクアップ！

「さようなら、琴葉ちゃん」

真っ赤な目、憔悴しきった顔。

仁は海に灰を撒いている。

時は翌日の午前。所は海上軍戦艦の後部甲板。

手すりの向こうはバリアリーフ。エメラルドブルーの海。

最後のレバーは、琴葉の遺体を茶毘に付すためのレバーだった。

レールに沿って、小さな扉をくぐる琴葉の棺。扉が閉まる。遠くで聞こえるバーナーの音。

ほんの数日前まで、馬鹿なことを言い合っていたのに。側にいて当たり前が存在だったのに。

琴葉は、あつという間に白い骨に。それも粉になっていた。

白い粉しか残らなかった。長くて綺麗で自慢だった黒髪は、形跡すら残されていない。

仁とコトシロとクレアが、灰を拾った。

言伝ことづてで墓は要らぬ、灰は海に撒いてくれと、先代コトシロに頼んでいたそうだ。かたがたサファイア色の海に撒くと、それはもうきついお達しだったという。

「アル弗雷イ・ランドには、海底地形の具合でサファイア色の海が無いんだ。かわりにエメラルドの海に撒くからね」

頬がこけ、やつれの目立つ仁。ベージュ色の爺むさいカーディガンを羽織っている。

その仁の両脇に、支えるようにして立つクリアとライラ。取り仕切ると思われたコトシロは、何故か同行を拒否した。

ミアはコトシロとお留守番。初めての海に興奮し、危ないまねを避けるためというのがその理由。

クリアが花束を仁に渡す。何が気に入らないのか、始終不機嫌な顔のまま。

百合モドキ草を中心に、カスミ草モドキを配備した花束。白い花に琴葉の笑顔が被る。

山での苦労は何だったんだろう？

バラバラになりそうな体に鞭打ち、消えて無くなりそうな意識を奮い立たせ、命からがら金獣の集落から逃げ延び、崖から川に飛び込み、拾った命に感謝した。

全てが、琴葉を助けたいがため。だのに……。
何のために僕は生きている？

金獣に捕まったとき、あのまま殺されてたらよかった。
いっそ。

仁は、花束を持ったまま、手すりに手を掛けた。
いっそ、琴葉ちゃんのところへ。

……花束だけを、海に投げ入れた。

それを合図に、音楽隊が悲しいメロディを奏でる。

「黙禱！」

ライラが号令をかけた。クレアをはじめ、一緒に乗り込んだエルファイ達が目を閉じる。

仁は手すりの最上段に、ひょいと立った。何気ない動作。黙禱中だ。だれも気づかない。

軽くジャンプ。足が手すりから離れる。体は空中にある。体がくるりと回転。後頭部から綺麗な海に落ちる。

確実性を持たせるため、水中で呼吸。勢いでやらなければこんな事できない。肺に海水が入る。

当然咽せる。咽せるから水を吸い込む。吸い込むから咽せる。咽せてもがく。苦しい。でも琴葉ちゃんはもつと苦しかったはずだ。

体のどこかでブツンと言う音が聞こえた。しゅんと意識が麻痺する。

ぐるぐると世界が回る。青い光が体を照らす。太陽光が海水を通して……どうでもいいや。琴葉ちゃん、もうすぐ会えるよ。

「この、馬鹿が！」

仁は意識を無くす直前、誰かの声を聞いたのだった……。

……仁は、琴葉の気配を感じた。

「琴葉ちゃん！」

そう叫んだつもりだったが、口からは別のモノが出てきた。

「げぼぼッ！」

口から噴水が出た。塩辛い噴水だ。どこかで見た光景。ああ、そうだ、川でおぼれたときクレアさんに助けてもらって……。

「お目覚めになりましたか？」
優しい微笑み。……ライラさんだった。

どうやら死に損ねたらしい。

人垣ができていた。エルフィの女の子達が心配顔でのぞき込んでいる。

垣根の一部が割れていた。そこには……。

誰かが転がっていた。横向けに。びしょ濡れ。

ああ、クレアさんだ。またあの人が助けてくれたんだ。余計なことを。

顔を隠すように白いタオルが掛けられていた。

白いタオルが顔に……。琴葉とオーバーラップした。

「クレアさん！」
飛び起きる仁。

「何だ、やかましいぞ！」

声は白いタオルの下から聞こえてきた。

タオルの下、モゾモゾと動く濡れ鼠の体。

「今度飛び込むときは、前もって声を掛けてくれないか？」

手が動き、タオルでワキワキと銀の髪を拭いている。

「次も必ず本官が助けるから、安心して死ぬがよい」

仁の目から涙が出てきた。今度はやたら熱い涙だった。

むくりと起き上がり、腕で目を「ごしごし」こする。

「これ以上コトハを泣かすな。エルフィを泣かすな。お前……もとい、マスターが死ねば、マスターの立ち位置にエルフィ達が立つことになるのだぞ」

タオルで声がかくくもっている。顔に掛けたタオルが……。もしや！
「クレアさん顔を怪我して！」
クレアのタオルに手を掛ける仁。

「ば、馬鹿！ やめろ！」
クレアが両手でタオルを力一杯握りしめ、丸くなる。
「ライラさん！ クレアさんの容態は？」
タオルで綱引き。寝転がっているクレアの分が悪い。

「怪我というか、ウォーターシールドが入ってなかったのが痛恨のミスで……レベル的に言うと……大切な物が取れちゃったというか……でも心配しないでください。命に別状はありませんから」
のほほんとした顔ながら、眉を八の字に寄せるライラ。辛そうに話す。

仁はタオルから手を離れた。

「心配しなくていいと言っとるうが！」
クレアは起き上がるうとして片手をついた。そこに隙ができた。

「今だ！」
クレアの間を突いて、タオルをむしり取る。

「あっ！」

下からあらわれたのは！ …… クレアさんの顔じゃない。

切れ長だったはずの目が、ぱっちりとしていて…… クレアさんに似た幼い顔……。

なにこれやだ可愛い！

「…… クレアさん……ですか？」

「クレア・コウジュ本人だ！」

仁の手からタオルをむしり取り、顔を隠すクレア。

説明を求め、ライラに視線を向ける。

「ですから、水に濡れてメイクが取れたと……。一番見せたくない状態ですから……」

なんとも情けない顔をするライラ。上司部下の関係なく、女としての同情心から出た言葉。

「クレアさん……、萌えー！」

ボソリと呟く仁。

対してクレアは。

「みーたーなー！」

タオルを顔にかけたクレア。隙間から覗く片方の目が、危ない閃光を放っている。

「クレア萌え？」

クレアが凄んでも、かわいいのであまり怖くない。

「クロス！」

目にもとまらぬ早業。コンマ二秒。抜きざまに放つクレア。それも水平発射。

撃たれた！

その瞬間、仁の周囲はグレースケールとなった。

仁は、反射運動でしゃがむ最中。

クレアが持つ銃の角度と、空中に浮く、一個の弾丸の位置。考えれば当たり前のこと。クレアは意図的に外している。回避行動をとらなくても安全な頭上。かなり上に着弾するだろう。

仁は、それを「認識」した。

世界に色が戻る。

立て続けに二発。クレアが放った。それも、外れるはずだ。計三発。三連射。予定通りに、仁の背後、天井に三発の弾痕が刻まれたのだった。

「今のは………いつたい？」

仁は、発砲以外の異変に呆然とするのであった。

22・クレア・メイクアップ！（後書き）

人の足は立ち上がる為にある。

次回更新は、明日お昼頃の予定！

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の謝意が付いてきます！

23・クレア少尉、無理をする。

「で？ 死んでコト八様を悲しませようとしたわけですね？」
何回目のフレーズだろうか。セントラルでコトシロに叱責されて
いる仁である。

「ごめんなさい」

仁はコトシロに頭を下げた。

コトシロは、腕に抱いたミアの頭をなでている。どうやらミアが
お気に入りらしい。

「謝ればすむとお思いですか？ 生きて帰って！ と願っていたコ
ト八様の思いを踏みじじる行為。断じて許されるものではありません
ん！」

「すみません」

コトシロの責めはきつい。かれこれ一時間になるだろうか、ずっ
とこの二文の繰り返しである。そしてこの二文は正解だ。真つ正面
の正解だった。

仁がどのように反論しても、コトシロはこの二文を繰り返すのみ。
やがて仁は、謝るだけとなる。

座れとも言わず、立ってるとも言わず、ただ単調に責めるだけ。
目がバイザーで見えないから、コトシロの表情も読めない。終わりが
推測できない。

これは辛い。

コトシロが執拗にお説教を繰り返しているのは、仁を思っていること。
二度と同じ考えを持たないよう、脳細胞へすり込むべく、わざ

と苦しめているのだ。

解ってはいたが、周りの者も、もう見ていられなくなってきていた。

コトシロの説教は粘っこい。過失傷害で懲役三年のところ、終身刑を言い渡されるようなもの。罪に対して刑罰が重いような気がする。

「あの、コトシロ様、マスターも反省なさっていることですし、そろそろ、許してあげてもよろしいのでは……」

さすがに口を出してきたライラ。

「わたくしが怒っているわけではありません。コト八様なら、このようにお怒りになるのではないかと思ったことを口にしたまで」

ライラが口を挟んだので隙ができた。仁は、別世界に落ちた。

あの時以来なぜか、この世界に、琴葉の気配を感じるのだ。

あの時、琴葉ちゃんの手を離さなかったら。それは新たに生まれた仁の後悔。

ふと厳しい視線を感じ、現実に戻った。視線の主は。

綺麗な長い黒髪を揺らし、ライラをバイザー越しにきつく見据えるコトシロである。

「あ、あははは……」

笑ってごまかす仁。手をひらひらと動かしている。

「馬鹿じゃないの！」

コトシロが怒った。コトシロらしくない。いや、アルフレイの住人らしくない。

仁が目を見張る。その、ものの言い方に、デジャブを感じた。

「……とコト八様なら言っていたはずです」

コホンと咳を一つ、握った手に落とすコトシロ。

あ、ああ、そうか、琴葉ちゃんの真似なんだ。

いや……、まさか？

コトシロの見かけは二十代半ば。琴葉が生きていれば二十四歳、
ちょうどその位。

十年もすれば、……そして、あの綺麗で長い髪。

もしコトシロが琴葉なら……。

気ぜわしく厚かましい彼女の事。恩着せがましく名乗り出るはず。

名乗りでないのは……。

大怪我をして、姿が変わってしまったから？

十年の年齢差ができてしまったから？

住む世界が違ってしまったから？

いろんな理由が頭の中で舞っている。仁は、拳を握りしめてうつむいた。

その姿を勘違いしたのだろうか、珍しくもクレアから援護射撃が来た。

「コトシロ様、本官からもお願いします。マ、マスターは十分反省しております。どうかマスターをお許しください」

クレアに視線を向けなおすコトシロ。綺麗な黒髪が揺れる。

「あなたまで、……そういえば、クレアさん。マスターに向かつて発砲したそうですね。その件について、気の短いあなたにお話があ

ります」

しまった！ 声に出さなくてもわかる。そんな顔をするクレア。そういうわけで、今しばらくコトシロの説教が続くのであった。

「災難でしたね、少尉」

「いやかましい！ 痛たっ！」

スリッパを床にたたきつけるクレア少尉。リバウンドしたスリッパがクレアの顔に跳ね返る。

時は、琴葉の散骨式を終えた午後。場所はいつものスーパーサイ
ーツ。

忌々しげにスリッパを踏みにじるクレア。

今は、いつも通りクールビューティの方の顔。

「いやほんと、びっくりしましたよ。メイクという皮一枚の下、あんなかわい素顔をお持ち……いえ、何でもないです。すみませんでしたっ！」

こめかみの皮膚が感じる冷たい金属感。

所持は許されたものの、一回り小型になった自動拳銃。クレアさんの目に、狂気の赤い光が灯っている。小型になったからといって、こめかみに密着させたまま発射されれば、仁の命はあるまい。

「忘れる！ それも今すぐにだ！」

「はい、忘れました、少尉殿！ そうそう、ご降級おめでとござ
います！ 念願の少尉職であらせられますね」

聞きようによらなくても嫌みであるが、前に昇級を毛嫌いしていたクレアである。言い返せず、忌々しげに銃をホルスターに収める。

マスターに向け、発砲したかどで軍法会議にかけられるところであつたが、特別に三階級降格ということで、内々に決着が付いた。

本来なら死刑になつてもおかしくない事例であるが、仁の嘆願により一発で解決した。

マスターの権限、無限大。

仁の命を救つただけでなく、死相が浮かんでいた仁を凶らずも顔芸で復活させたクレア。彼女を処罰する者など、アルフレイ・ランドにいない。

ただ、胸元のくりが、窓と呼べるほど大きくなったところに陸上軍上層部のしたたかさが見て取れる。あと、スカート丈も微妙に短くなっていた。

ほとんど股下ゼロセンチ。嬉しいやら怖いやら。

「済んだ事は致し方ない。潔く全身で受け止め、我が血肉としてくれよう」

自分に言っているのか、仁に聞かせているのか、いずれにしても潔く文句を垂れ流しながら、クレアの所有物と化した黒檀の巨大デイスクにつく。

いつものノーパソを始動し、仕事を始める。

「食後に一回、いや、二回と……。順調に回復している模様」
いつものでたらめな報告書である。

「いやちよつと、少しくらいはいい目を見させてさせてもらっても良いんじゃないかな？ パンツ見せてくれるとか……」

「なんだ十四歳？」

膝を抱えてうずくまる仁。じっと固まる。

「……白い骨を見るのは初めてか？」

入力する手を止め、クレアが聞いてきた。

時間を空けて、こくりと頷く仁。

「で、貴様、……マスターはこれからどうする？」

「生きて帰る。……それが琴葉ちゃんとの約束だから」

仁の目が暗い。毛足の長いカーペットの一角をじっと見つめている目が、頑固そうに暗い光を帯びていた。

「また胸を貸してやるのか？」

クレアの手が、ボードの上をさまよっている。

「別の意味でなら遠慮無く借りますが、もう僕は泣きません」
努めて明るく笑う仁。

「人間、体に良くないことは、良くないことだと知れ！」

彷徨っていたクレアの指が、動きを止めた。キー位置を特定したのだろう。

再び入力音が聞こえ出す。

「私……いや、本官は、甘い言葉や行為で貴様……マスターを慰める気は毛頭ない。そんなもので悲しい記憶が消えるはずないからな。悲しい記憶を抱いたまま生きていけるように強くなれ、少年！」
クレアの言葉は冷たい。そして容赦なかった。

「しかし、愚痴を聞く耳くらいは持っている。遠慮無く話すがいいいきなりだった。クレアは腕を伸ばし、仁の首根っこをつかんだ。クレアは仁の頭を抱え、その豊かな胸に押しつける。

自分の身に何が起こったのか解らず、うろたえる仁。胸に顔が埋もれて息ができない。思考力が綺麗に消え失せた。

五感だけが生きていた。

クレアさんの胸は柔らかくて温かい。

軍服の生地を通して、大きく息を吸った。

良い匂いがした。

「本官も昔、いろいろあった。母はいつもそばにいて、いつまでも下らぬ愚痴を聞いてくれた。それだけでずいぶん救われたものだ。貴様……もとい、マスターと本官では違うかもしれないがな」

抱き寄せるのもいきなりだったが、突き放すのもいきなりだった。くるくると回転して尻餅をつく仁。

「今から散策。………ついでに買い物、と。夜は二十時に就寝。回数
は一回……。こんなものでよからう！ よし！」

クレアは、ノーパソの光を消し、真っ直ぐ立ち上がる。

「どこにいるミア！」

「ミアッ！」

クレアの呼び声に反応して走ってきた。ミアは、洗面台にいた。

ここ数時間、蛇口から出る水を見つめ続けるという苦行を飽きもせず熱心に修行していたのだ。

「スケジュール通り、散策に出よう。三十秒で用意！」

相変わらずのクレアであった。

23・クレア少尉、無理をする。(後書き)

いやーっ！(汗)

18話と19話、がアップされてなかった！
あんなに急いだのに！

というわけで申し訳ございません！
割腹して責任を取らせて頂きます。

バカヤロウ！とお思いのあなた。
よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の返り血が付いてきます！

24・アルフレイ・シティ、全土警報発令！

「今になって気づきましたが、アルフレイ・ランドって暖かい気候だったんですね？」

仁は肺によんだ空気を吐き出すように二度三度、大きく深呼吸してからそう言った。

泣かないというのは撤回するが、必ず元の世界に帰るという誓いは撤回しない。重い荷物を背負っているが、体は軽いつた感じ。広い歩道を歩きだす仁とクレア。その足下をちよろちよるとミアが走り回る。

車道を挟んで左右に店が並ぶ。ここは、セントラル中央商店街である。

「アルフレイは、一年を通して温暖な気候が特徴だ。そのことに気づく余裕が出てきたようだな」

すれ違うエルフィ達は、みな一様に仁の出現に驚く。

熱い視線を送ってくる者。真っ赤な顔でチラチラ見ている者。果ては気絶する者まで。

百四十万人からのモテ率百パーセント。うれしい！ けど行き過ぎ！

上京したての田舎者よろしく、全方位をキョロキョロ見渡す仁。あることに気づいた。

「ところで、護衛の女の子達はいないようですけど、どうしました？」

「ふふん、一丁前いちぢまへに気になるか？」

虐めるようなクレアの目。下心を見透かされ、慌てて頭を振る仁。

「私が護衛を引き受けるから、付いてくるなと言った。もともと、護衛なぞマスターには付かない。ライラの意図することは見え見えだ」

仁は極力残念そうな顔をしないよう気をつけた。

「ライラさんに怒られないですか？」

「これはマスターのプライバシーに関わる件だ。軍将官ごとき小物に文句は言えぬ。考えてみる、マスターはエルフィの神。ならば本官は神の側近だ。その言葉は予言者や教祖並。少将閣下が必死になる所以だ」

そうか、人間はエルフィの神様の立場だったっけ。

「エルフィは、アルフレイでおきたことは絶対に口外しない。マスターのプライバシー最優先だからな！」

仁を親指で指すクレア。扱いがモノ的な気がするのだが、その件については後でじっくり話し合おう。

「例えば、側近である本官がいかかわしい場所を一人でうろついていても、エルフィ達は見ぬふりをする。本官が、マスターの命で、いかかわしい商品を購入しようとしているのかもしれないからな。」

「……おっと、ここだ、ここ！」
大きな店に挟まれた小さな店。残念ながらいかかわしい店ではない。

看板に書かれたエルフィ文字は読めないが、手芸専門店のようだ。レースや生地の小物が品良く並んでいる。

……クレアさんと手芸店の組合せが想像できない。

ドアをくぐろうとしたが、ミアがむずがった。

甘い香水の香りが店内から漂っている。これが嫌なのだろうか？

ミアは、ショーウィンドウ下に置かれたベンチに飛び乗り、寝そべる。

中で走り回って、商品棚を倒されるよりマシか……。

「しかたないなあ。おとなしく待ってるんだよ」

ミアを置いて店に入る。万が一、迷子になってもGPSで一発オケー。心配はない。

「いらつしゃい……あら、マスター！ と、ついでにクレア？」

「ついでは余計だ！」

出てきたのは黒くて長い髪の女性。

琴葉ちゃん！。

もちろん違う。

大きなウエーブのかかった黒くて長い髪。片目を覆っている。琴葉とは似ても似つかぬ妖艶な大人のお姉さんだ。

「何バカやってんだろう？」

軽く首を振って、頭から追い出し、お姉さんを観察する。

着ているものは、シンプルな黒いロングのワンピース。

胸元が大きく開いていて、ボロリとこぼれそうな乳白色で丸いゲツフンゲフン！

「まあーっ！ ほんとにクレア？ すっかりクリスタルがピンクになっちゃって！」

「本官の軍同期でケツを割った友人、マルタだ」

「初めまして、マルタ・コウジユです。以後お見知りおきを」

「こんにちは、……あのマルタさん」

気になる事があった。

なんですか？ と首をひねるマルタ。

「クリスタルの色が変わると、なんかなるんですか？」

へのへのもへじをリアルにしたような表情を顔に浮かべるマルタ。

「クレア、あんた何も言っていないの？ マスター、知らないみたいじゃない！」

「言わんでいい！ あんなのお偉いさんが決めた飾りだ！」

狼狽えるクレアさん。これで終わりとはばかりに後ろを向く。それを見たマルタ、肉食獣の目をする。

「所有物扱いがピンクの証。クレアの身も心もマスター・ジンの物だから、他のマスターは手を出しちゃだめって印よ！ 良かったわねー、クレア！」

「しょ、所有物？ 所有物って言うていいの？ 人権とかホントに無いの？」

「言うな！ この発情メス猫め！」

振り向き、両手の指をわなわなさせているクレア。

「まあ、御下品！ それより、どう？ クレアの具合？ とうぜん寝たわよね？ お姉さんと比べてみない？」

カウンターに丸いお尻を乗せ、スカートのスリットから覗く白い太ももを見せつける。

「なんか、こっ、水蒸気と見まごうばかりの色気がムワッと沸きあがってるんですが……」。

これって、誘ってる？ あきらかに誘ってるよね？

「あははは……」

クレアが背後でもものすごいガンを飛ばしているので、何も言えない。でも……。

顔、クレアさんに似てないか？

「ひよつとして……、お二人は姉妹？（きょうだい）」

「あかの他人っ！」

二人ハモリながら完全否定。二人シンクロして手を左右に振っている。

……よく考えれば、エルフィの誕生システムからいって、姉妹は発生し得なかった。

「マルタが一度会わせるとしつこいので、無理矢理スケジュールを合わせて　うるさいぞマスター！　やってきたらこの扱いか？　この店は暴力ぼったくりバーか？」

「ごめんなさいねマスター。私と金型が同じなのに、この子はS気がマックスのストイックタイプだから」

「そういうマルタは、ラウドネス値がマックスだろう？」

「ちよつと待って、ちよつと待って！」

無理矢理二人の間に割ってはいる仁。

「なんですか？　金型とかラウドネス値とか？　頭の上で会話しないでください！」

きょとんとした二つの顔。そうやって同じ表情をしますます、この二人そっくりだ。

「金型とは身体構成のタイプ。我らの場合、コウジユ型と言う。ラウドネスは付けられた性格の種類。以上、説明終わり！」

早口で説明するクレア。よくわからず、ポカンとしている仁。

マルタが変な顔をしていた。

「それじゃ、わからないでしょ！ あなたちゃんと説明したの？
いい？ マスター。金型とは、服でいう型紙のような物。生産工場
でね、同じ金型からはほぼ同じ外見を持ったエルフィが作られるの
！ ラストネームがコウジュ同士。コウジュ・タイプという金型か
ら作られた私たちは、見た目が似ていて当然なの」

そういえば、エルフィのお姉さん達は、生まれるんじゃないって作
られるんだっつけ！

「じゃ、マルタさんもメイクを落とせばロリ顔に……」
仁のセリフは撃鉄を起こす音で遮られた。

「ふふふ、エルフィが持つメイク術は、整形手術を軽く凌駕するの
よー！」

それがマルタさんの答えだった。

マルタさん、胸の下で腕を組む。バスト強調の荒技！ 片目に被
った髪が揺れる。なんか、なんかイイ！ もっかい言うけど、なん
かイイ！

「約束通り顔見せしたからな。もう用はない。帰るぞ！」

襟をつかまれ、後ろに引っ張られた。

「ちよつと待ちなさいよ！ せつかくだから何か買ってちょうだい
よマスター。支払いはクレアに付けとくから！」

片目に被った髪を揺らし、ここぞとばかりに接近するマルタ。

ふと、あることを思いつき、店内を見渡す仁。良いのがあった。

「じゃ、これとあれとそれ、ください」

「この穢けがしたくなるような純白のサテンレース生地と、縛っても痛

くない平面テープ、そして液をいっぱい吸い込みそんな同色の綿生地ですね。有り難うございます」

まとめて小さな、それでいていかがわしい模様の紙袋に入れてもらうのをクレアが横目で見ている。なんとも疑わしそうなジト目だ。

「いやらしいプレイに使うんじゃないだろうな？」

「何言ってるんですか！ 逆にどんなプレイですか？ 教えてくださいよー！」

「あれだよ、ほら、あれ。……本官に何を言わせるかつ！」

拳を振り上げ、すんでの所で止めるクレア。これ以上降格したくなかったのだろう。

逃げるように店を出る仁。

「説明し損ねたけどラウドネス値はクレアに聞いて！ またいらしてね、マスター！」

肉食獣のようにベロリと舌を出し、唇を舐めるマルタ。ごくりと唾を飲む仁。

「お、おいで、ミア」

仁は慌てて目をそらし、表でゴロゴロしていたミアを呼ぶ。

「ミアッ」

すでにベンチから下りているミア。転がるように走ってくる。息が荒い。

「クレアさん、ラウドネス値ってなんです？」

答えないクレア。仁を追い抜いてずんずん先へ進む。

どうしても知りたい。大きな声で聞き直す仁。

「ねえ、クレアさん、ラウドネスって」

振り向いたクレア。手で仁の口を押さえる。銃を撃ちまくって

るのに柔らかい手だ。

「スティックとは、ナニに対して潔癖であること。その正反對に、ラウドネスとは淫乱という意味だ。あいつのラウドネス値はいつぱいまで振られている。わかったか？ わかったなら、大声でラウドネスラウドネスと、日の高いうちから大通りで叫ぶんじゃない！」

「クレアさんの声の方が大きい……なに？」

遠くでサイレンが鳴っている。すぐに別の地域と思われる方向からも、二つめのサイレンが鳴りだした。

「まさか、クレアさんの言葉が猥褻物陳列罪だったとか？」

「違う、馬鹿！ これは」

仁がいる地区でも鳴りだした。

「クレア！」

後ろから声がかかる。マルタさんだ。

「店に戻りなさいクレア！ 金獣が仕掛けてきたらしいわ！」

クレアに続き、仁も足下に視線を落とした。

何のことかわからず、狼狽えながらハッハッハ言ってるミアがいたのだった。

24・アルフレイ・シティ、全土警報発令！（後書き）

残すところ、あと（たぶん）6話。

次話は、明日、お昼頃アップします。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の人生が付いてきます！

25・アルフレイ・シティ、痛恨の一撃！

「襲われたのはコドノ発電所。被害は発電機制御コンピューターと、発電機用エネルギー伝導管のみ。共に大破。現在復旧作業中。第十三区から三十五区まで停電！」

ここは陸上軍のとある会議室。報告しているのはセントラル防衛の責任将校。

出席者は、ライラを含む陸上軍の重鎮五名。海上軍トップ三名。あとは議長役のコトシロ。そして仁とクレア。

本来この会議に、仁は招かれざる客である。無理に出席できたのは、マスターとしての権限だ。その理由は、ミア達金獣が気になったから。

金獣がらみとは、仁がらみの事。知らないでは済まされないような気がしたからだ。

さらに報告は続く。

「エルフィ十五体軽傷。重傷者、死者共に無し。目撃者によると、襲撃してきた金獣は十二体。全員、斧で武装」

「斧？ 金属の斧か？」

ライラが聞く。金獣たちは、金属加工技術を持たないらしい。

「はい、ただし、エルフィの斧です。金獣たちは、まず駐車されている車を襲い、標準装備されている緊急脱出用の斧を手に入れ、後に発電所を襲った模様です」

「これは問題です。金獣の知恵を褒めるべきか、陸上軍の迂闊さを攻めるべきか」

ここで海上軍側の一人が皮肉を放つ。

「レムリア中将、発言は拳手の後にどうぞ」

コトシロが、海上軍中将を諫めた。コトシロが仕切らないと、陸上軍と海上軍の中傷合戦になってしまうだろう。

「では、我らが愛しいマスターの御前で、二つの問題を定義いたします」

立ち上がるレムリア海上軍中将。ウエーブをかけた栗色の長い髪。言うまでもなく美人。

泣きぼくろがセクシー。

「車両の中にある斧の存在に、何故どのようにして金獣は気づいたのでしょうか？」

指を一本立てている中将。ずいぶん芝居がかっている。

そしてもう一本立てた。

「機械設備の知識に疎い金獣が、見事に発電所の急所を破壊しています。あの二カ所は急所。大変効率の良い優れた破壊活動と言えます。おかげでタカマ十七区一帯は麻痺状態。ご存じないかと思われませんが、十七区は、我が海上軍の鎮守府がある地区です」

海上軍中将レムリアの目が尋常でない。もともと金色だけ。

「一方、ロクヤオン地区に位置する陸上軍は、被害地域外」

一同をみわたすレムリア中将。特に仁を念入りに、そこだけ色っぽい目で。

なんか凄く緊迫してきた。

「金獣による襲撃が鮮やかすぎます。あの者達に情報を与えた者の存在を確信いたします」

レムリアが睨む先、それは陸上軍幹部がしめる席。

「我ら陸上軍を疑っているのですか？」

ライラの隣で美女が立つ。ライラより肩の線が一本多い。

「気に障ったなら謝罪する。そのとおりだ！」

軍部双方の幹部達が椅子を蹴って立ち上がった。ライラと海上軍の一人を除いて。

「マスターが可愛がっておられる金獣の幼体はどこにいる？」

海上軍で一人座ったままの小柄な美少女。良く通る声だ。緑の髪が美しい。

「ミアちゃんは控え室でおとなしくしてます！」

カチンと来た仁。声を荒げてしまった。全員の目が仁に集まる。ちよつと恥ずかしい。

出過ぎたまねをしてしまった。仁が言わなくてもコトシロがモニターしているはず。

「マスターがおっしゃるとおり。マスター専用控え室で……悪戯をしておいでです」

コトシロがバイザー越しに宙を見上げ報告。控え室のモニターか、受信機を見ているのだろう。口が僅かに笑いの形をとっている。

気まずい雰囲気の中、小柄な少女はコトシロを見据えたまま。

「では、マスターが治療中の時は？ コト八様の散骨式の時は？」

ライラより年少に見える、冷たい美少女。もつとも、エルフィの場合、見かけはなんの役にも立たぬ。現にライラとクレア 見た目、年上に思えるクレアの方が年下だったりする。

「治療中は、マスターの病室内で缶詰。ロックは一度も外しておりません。出入りは全てわたくしがチェックいたしました。ちなみに、病室の窓ははめ込み式。散骨式の時、わたくしが同室にて直接監

視しておりました。その他、全てこのコトシロの監視下に置いてお
ります。一度たりとも外部と接触した形跡はありません」

バイザー裏に写る情報を読んでいるのだろう。コトシロは、レポ
ートを読んでいるように機械的に述べるだけだが、しっかり仁をフ
ォローしている。監視という単語を意図的に多用した。

「みなさん、お疑いのようですが、ミアは二歳児。たとえわたくし
の目を盗んで金獣と接触したとしても、どうやって情報を伝えるの
でしょう？ 第一、あの子にコンピューター制御だとか、エネルギー
ーだとかの概念があるとは思えません。発電システムに詳しいよう
にも見えませんし……。この中で発電所の急所を的確に指摘できる
者、拳手願います」

コトシロは一同を見渡した。睨め回すと言った方がいいかもしれ
ない、上から目線。

「電気関係に詳しいエルフィなど、見たことがない」
仁の考えを読んだわけではないだろうが、いいタイミングでボソ
リとつぶやくクリアさん。豊かな胸の下で腕組みをしている。

クリアさんの意見はごもつとも。エルフィの成り立ちを考えれば、
彼女らは何が得意で何が不得意かわかるというもの。軍隊を組織す
る事自体、皆様は無理をしておられる。

納得いったのだろう。全員がおとなしく席に座った。

「マスターの『所有物』である金獣の幼体の監視は、わたくし・コ
トシロにお任せください。全責任をもって任に当たります」

コトシロは、真つ先に自分の責務を宣言した。

手慣れたものだ。

マスターの所有物、と強調したところがズルい。でも、これでミアちゃんの安全は約束された。

こういった先手の打ち方。お姉さんのもの言い方。琴葉の言動に一致する。

疑念を深めていく仁。

「ではいったいどうやって金獣たちが」
その時、ドアが勢いよく開いた。

「伝令！」

頬を赤く染めた少女兵が会議室に飛び込んだ。今にも泣きそうな顔をしている。異常だ！

「部外者は立ち入り禁止である！」

ライラが伝令兵を咎めた。だが、伝令兵は意に介さず敬礼する。

「金獣の襲撃です！」

この場にいる全員が席を蹴った。二脚ばかり、派手に転がった。

「被害場所は……被害場所は、『マスター歓迎サプライズ式典』会場！ うわーっ！」

言って両手に顔を埋め、伝令兵は泣き崩れた。

「なんですとー！」

あの、マイペースを崩さない、おっとりした性格のライラが、真先に取り乱した。

それを機に、スズメ蜂の巣をつついたような騒動が起きる。

「おのれ！ なんて卑劣な！」

「我がマスターへの想いを！ 全軍、鎮圧に回れ！ 予備役も招

集！」

「いや、そのサプライズって何？」

「全艦隊！ 第七管区に回せ！ 海上より艦砲射撃を食らわせてやる！」

「状況を知らせよ！ 被害状況を報告せよ！」

「クレア少尉専用赤いウサギモドキの着ぐるみが燃えました！」

「その企画起こしたヤツ、出てこい！」

書類が舞い上がり、人の出入りが始まり、怒号が飛ぶ。軍服が、走り込んできた事務方とぶつかって、抱えていた書類が宙に舞う。

「ええい！ このような時こそ、本官が鍛えた山岳猟遊部隊の場だというのに、なんとも歯がゆいわ！」

額のクリスタルを指でトントンしているクレアさん。イライラしている。

「クレア少尉！」

呼んだのはライラ少将。

「本官の出番か！」

「あなたの管轄下にあった山岳部隊を引き継がせてもらいたい。予想とは、ちよつと違ったようだ。足踏みをするクレアさん。

「仕方ない。よしとしよう！」

やる気満々、クレアさんの鼻息が荒い。

「つきましてはマスター。緊急事態ですので、少しの間クレア少尉をお借りしたいのですが。もちろん、かわりの案内をお付けいたします。許可していただけないでしょうか？」

「やる気に溢れた乱暴な人を引き留める勇氣はありませんから、かまいませんけど……」

仁は人見知りの気がある。知らない場所で知らない人と一緒にい

てるのが不安だ。

「わたくしがマスターのお世話を仰せつかりましょう」
いつの間に近くへ来ていたのか、コトシロが真横に立っていた。

「シテイのシステムは把握できませんが、軍事行動は苦手です。部外者は邪魔にならないよう、ミアちゃんと一緒に控え室へこもっていきましょう」

知らないエルフィに緊張されながら案内されるより、苦手ながらも、見知った人と一緒にいる方が良い。……それに確かめたいことがある。

「よろしくお願いします」

そういうことで、臨時作戦本部となった会議室を出る事となる、仁とコトシロであった。

25・アルフレイ・シティ、痛恨の一撃！（後書き）

いや、だめだわ！

30話 33話になる！

さてさて、いよいよ大詰めです、伯爵（誰？）

明日も更新します。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の暗黒面（ネタ切れ）が付いてきます！

26・犯人はヤス！（笑）

「マスター？　どうかなさいましたか？」

「は？　え？　あ！」

コトシロの声で我に返る仁。

相変わらず体が沈み込む三人掛けソファに座る仁。彼の前で立っているコトシロ。

超豪勢な控え室。

仁は、先ほどまでミアを膝に乗せたまま、慣れない手つきでお裁縫をしていたのだ。マルタの店で買った端布が、仁の手により形を変えていた。

いつからか手が止まり、ただぼーっとしたのだった。

正確には、ぼーっとしていたのではなく、いろいろな事をとりとめもなく考えていた。

仁が気にしていることは、大きく分けて三つある。

一つめは、元の世界に帰れる可能性。二つめは、金獣の脅威と、それに付随する内通者の可能性。三つめは、琴葉のこと。

まず、一つめの心配事は時の運。じたばたしても始まらない。

望郷の念はマックス。琴葉に誓った。必ず帰ると！

でも、帰るのは一人だけ。琴葉が眠るこの世界を捨てて帰る罪悪感が仁を責める。

次の二つめは……、金獣関係について与えられた情報が少ない。

もし、金獣に内通している人、もしくは組織があったと仮定すれば、……得する人が犯人なんだろうね？

よくわからないから、身内が犯人でなければそれで良しなんだが……。

クレアさんは、金獣の集落を襲撃した実行犯である。内通どころか、金獣に命を狙われる立場。だからシロ。

次にコトシロさんの容疑。

襲撃、闘争によってこの町のシステムがガタガタになっている。

コトシロさんは、いまこうしている間でも、各所に指示を飛ばして修復に忙しい。余計な仕事を増やしてと、おかんむりだ。損害を被る立場上、シロで間違いないだろう。

それにコトシロさんは……いやいや、なんのなんの！

その次にミアだが……コトシロさんが言ったように、膝の上でよだれを垂らしながら眠りこけている二歳児に何ができようものか。

どこにあるかもわからない電子機器であるコトシロさんの目を盗む事など不可能。だいいち、部屋にロックか掛けてしまえば、ミアは一步も出られない。だから真っ白。

ライラさんは、残念ながらチャコール並に濃グレー。あの向上心出世欲は恐い。思考過程に怪しいところが多々ある。

少将という立場も微妙。少将ともなれば、いろんな権限を持つ。ほとんどの事ができるだろう。そして上には中将、大将という席がある。野望を抱いても不思議じゃない。

金獣の乱を手際よく抑えれば、さらに箔が付く。しかし、この説

には弱点がある。

手際よく抑えられていない。

仁の見たところ、この人は頭脳明晰用意周到、先手先手と打っていくタイプ。今回の事件、ライラさんの手腕からはほど遠い対応。一度ならず二度までも先手を取られている。

ライラ少将のスペックはここまで低くない。

最終目的があって、わざと失態を犯しているのなら話は別だが……。だからグレー。

いちばん面白そうなのが、海上軍組織犯説。

最初に損害を被ったのは海上軍だが、何か壊れたとか、兵士が死んだとか、そんな被害じゃない。せいぜいが停電。

物的および人的被害ゼロ。

発電所襲撃による被害は目くらましとも考えられる。

なにせ、仁の一件で陸上軍に優先権を取られっぱなし。ここは一発逆転を狙って！ なんて動機も充分。だから、もっとも濃いグレ

とはいうものの、仁に対し、純粹すぎるエルフィの皆さんが、ここまでダーティな手法をとれるだろうか？ そもそも、エルフィは、物騒な計画を思いつくのだろうか？

そんな辺りをウロウロしていた時にコトシロから声がかかったのだ。

「金獣と内通者の事で、お沈みになられておいでですね？」
ずばり言い当てられた。

「ライラさんか、海上軍関係者が一番怪しいと思うのですが……」

仁は、先ほどの考えを披露してみる。

「なるほど。実に面白い説ですね」

いつの間に運ばれてきたのか、テーブルの上にはコーヒーが二つ置かれてた。

すでにミアは、テーブルの下でホットミルクと格闘している。猫舌だったのか、柔らかいほっぺを丸く膨らまし、さかんにフーフー息を吹きかけている。

コトシロが角砂糖のポットを開けた。

「いくつ入れます？」

二つ。……と言いかけて手を止め、コトシロのサンバイザーに隠れた目を見る。

琴葉がここにいたら「お子様」と一蹴されたであろう。ましてやコトシロさんは……。

「ブラックで」

精一杯男前の顔をする仁。

コトシロの唇がほころんだように見えたが、たぶん気のせいだ。

「コトシロさんは、どう思われますか？」

立ったままのコトシロ。腰を沈めて自分のカップに角砂糖を二つ入れる。何か考えているのだろう。

「わたくしの考えを述べる前に、金獣についてお話ししたいと思い

ます」
カップを持ち上げ、すつくと背を伸ばすコトシロ。彼女の姿は、
ハイネツクの白いハイレグ。少ない面積の生地から、メタリックな
手足が伸びている。

仁の目の前に、そのコトシロの逆三角形が来た。
えてして、アルフレイの住人は、細かいことを気にしない傾向に
ある。

気恥ずかしさに顔をそらすものの、目がそれてくれない。

「金獣とは、ヒトの手によって作られた疑似生命体。エルフィとは
姉妹の関係。その目的はエルフィと同一」

ポカンと口を開ける仁。

「そうか、それで……」

仁は気づいていた。ミアがマスターという単語を聞いたたび、尖
った耳をヒクヒクさせていたのを。

「過去、とある一時期。アルフレイ・ランド経営の強化策として、
当時ヒトの間でブームになっておりました獣耳と獣尻尾を導入しよ
うという事になりました。それを具現化したのが金獣。スヴァルト
というのが正式名称ですが、エルフィ達はだれもそう呼びません。
商売敵ですからね。それに、いまいちテコ入れにならなかったと聞
き及んでいます」

仲が悪いのはそれが原因か。……にしても、全力で間違った方向
にネコ耳を追求しすぎたのが敗因だと思う。変なノリも入っていた
に違いない。あと、官も。

「だとすると、僕が拉致られたのは……」

「エルフィに先んじての接待でしょう」

あのケモノ耳とモフモフ尻尾は……。いやいや、あの鍋の片方は、煮込み料理？

もう一方は、嬉し恥ずかし露天風呂で、ケモノ耳といっしょに煮込まれましょう……。なんて夢の設定だったとですか！

遠い目をする仁。

ソファが右に少し傾いた。コトシロさんが、仁の右隣に腰掛けている。

すぐそばに見かけ二十代、濡れるような黒髪。大人の女の人。萌えるサイボーグ！

仁にメカフェチ症状は無いはずなのに、ドキドキしていた。体が熱くなってくる。

そのお姉さんが、角砂糖を二個追加した。知らなかった。サイボーグって甘党なんだ。

「ニケという金獣は、クレアの立場にいたものと思われませう」
クレアと死闘を演じ、全身と片目に怪我を負った金獣。仁に暴力は振るっていない。むしろニコニコしていた。……。それが妙に怖かったが……。

「なるほど」

エルフィと同じく、長い年月、マスターを待ち焦がれていた金獣達。山一つ消し飛んだ天変地異だ。マスターがアルフレイランドに舞い降りたことは、容易に想像できるだろう。

自分たちのテリトリーに降り立ったマスター。当然のごとく、それを迎え入れようとしたところ、眼前で商売敵のエルフィにマスターを奪われた。

見れば、怪我で弱ったエルフィー一人による事件。ここは金獣たちのシマ。

なめんじゃねえぞ！ とばかりに、実力を行使してマスターを奪ったものの、その弱ったエルフィー一人にあっさり奪還された。

面目丸つぶれ。いや、存在意義の否定。

よって、今回の暴挙に出る。

「そういったところでしよう。彼女たちの目的は十中の十、マスターの奪還。当然、エルフィー達は全力でそれを阻止することでしょう」
更に二個、角砂糖を追加して、カップを口に運ぶコトシロ。サイボーグの味覚って……。

カップがソーサーに戻る。艶やかなコトシロの唇。

「陸上軍、海上軍どちらだとしても、嘆かわしい話だと思いませんか？」

コトシロさんも軍部を疑っているようだ。

暖かい気配。コトシロさんの顔が仁のすぐ側にある。

腰を退きたくも、ソファに沈み込んで自由がきかない。

「この争いをなくす方法が一つだけあります」

コトシロが囁くように、仁の耳元へ密やかに話しかけてきたのだ。
った。

26・犯人はヤス！（笑）（後書き）

こんばんは。カフェイン中毒のアズマダです。
寄せられた感想に刺激され、半日早くお届けできました。
さあ、登った山は駆け下るのみ。

次回更新は明日のお昼。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の叫びが付いてきます！

27・・・ミアちゃん。

「いたって簡単なのですよ。簡単がゆえに、難しくもある。基本ですから、……余計にね」

コトシロさんは、犯人捜しよりも、争いそのものをなくそうと考えているみたいだ。

きめ細かい白い肌。濡れたような黒い髪。クレアさんとはまた違ったいい匂い。

「マスターがいなくなること。元の世界へ帰られることです。そうすれば、争いの原因が無くなってしまいます」

「いえ、それは言われるまでもなく……」
なんでいまさら？ 琴葉ちゃんに対する後悔を引きずってるからか？

「わたくしは……冷たい言い方をしているのでしょね。でも、わたくしは調整者。世界の調和こそがわたくしの使命。エルフィのように浮かれることはありません」

それは微妙な方向性の違い。仁とコトシロ、お互い齟齬が生じている。

「すぐには帰れないんでしょう？」

仁の手をコトシロが握ってきた。金属特有の熱伝導が仁の体温を少しばかり奪う。

「お話しする機会が遅れましたが、兆候が見られました」

ビフレストの橋。その元になったあのミラー球が現れるというのか？

そして、なんで手を握る？

「微量ですが特徴的な電磁波が観測されました。コト八様の体が無くなったことに関係あるのかもしれない。特異点がマスター・ジン一人になつたしまつたからかもしれない」

「特異点？」

何の事やら、さっぱり。

「マスター・ジンとコト八様の体から観測される、微量のエネルギーのことです。電磁波の一種としてしか観測できませんが……」

未知のエネルギーが体に？ コトシロに握られた手を見る。

「次元と空間の壁を移動したミラー状超常現象体を持つ、何らかのエネルギー。その一部がジン様とコト八様、二つの肉体に蓄積されているのです」

一方の体は失われてしまった。僕の体だけが残って……。

「特異点と言われても自覚無いんですけど」

「空間のゆがみに関連する現象や事象があつたはずですよ
そんなのあつたっけ？」

コトシロが単語を並べていく。

「次元、空間……歪み、速度、時間」

「あ！」

速度と時間。その言葉について心当たりがあつた。

散骨式の船上。クリアさんが発砲したとき。世界がグレーになつて、時間がゆっくり流れているように見えた。

仁だけを残して時間の進行が遅くなったあの現象。

……ちよつとまてよ。

クレアさんに初めて出会ったすぐ後。

土砂崩れに巻き込まれたはずなのに、どういうわけか回避できた。あの時も、周囲から色が消え失せグレースケールになっていた気がする！

「心当たりがあるようですね」

コトシロさんの握る力が強くなった。

「いいですか？ 片方に振りきってしまった振り子は、反動でもう一度戻ってきます。それが最後にして唯一のチャンス。特異点とはその支点となつていて考えると考えてください。だから必ず、マスターの肉体がある地点にビフレストの橋が架かるのです」

琴葉ちゃんは、もしかしてこれを知っていて……。だから灰にして海に撒けと……。

なんだか、目が熱い物でいっぱいになってきた。琴葉ちゃんの願いと献身。それを受け取ったからこそ、元の世界へ帰ると誓った。

でも、しかし、……。琴葉が生きていたら二十四歳。ちよつと、コトシロさん位の年。

「コトシロさんは生まれたときからそんな体だったんですか？」

仁は勝負に出た。コトシロの長い黒髪が、琴葉と重なって仕方ないのだ。

それが気にしている最後の一つ。第三の案件。

まさかと思うが、……ほんとうにまさかと思うが、もし琴葉が生きていれば二十四歳。

ちょうどコトシロの見かけに準ずる。

大怪我をした体のパーツを機械に置き換えて……。

もしや、あのバイザーの下の顔は……。

「わたくしは調整者として……造られたのです。先代の調整者も、先々代も、アルフレイランドが創られたときよりずっと、調整者と呼ばれる者は、機械の一部。愛だの恋だの、エルフィのような生き方は理解できません」

コトシロは、仁の言葉を中傷と受け取ったようだ。

それを微妙に感じ取った仁。或いは……わざとずらされたか。

「コトシロさんは、もしかして琴」

「ここにいたか！」

「ミアッ！」

勢いよくドアが開く。驚いて転げ落ちるミア。クレアがノック無しで入ってきたのだ。

「コトシロもいたか。ちょうど良い、コトシロ、フル機能で探査してくれないか？ 雨も降らないのに黒い雲だけが渦を巻いている！」
「情報処理室とコンタクト。データダウンロード。緊急配備」
いままで落ち込んでいたコトシロとは別人じやなかるうかという変わりよう。コトシロは一つのメカとして、処理を進めていく。

クレアは部屋を突っ切り、窓のカーテンを大きく開けはなった。

遅れて窓へ駆け寄る仁。窓ガラスに張り付くようにして空を見上げる。

黒い台風があつたとしたら、まさに目の前のがそれ。
高速で渦を巻く禍々しい雲塊。竜のような雷光が、いくつもの雲
間を飛び回る。

大荒れの天気。なのに、町には風が吹いていない。夕方とはいえ、
日が沈むには早すぎる。なのに、この暗さはなんだ？

「亜ビフレストの橋予兆観測。全アルフレイ・ランド、非常態勢宣
言！ 外出禁止令発動！」

またサイレンが鳴った。過去二回とは違う音色。ずいぶん寂しい
音だ。

「マスター・ジン、これを」

コトシロがメタリックな腕をジンに伸ばす。腕を覆うカバーが開
いて、中からシャンパンピンクの携帯電話が出てきた。ずいぶん、
傷が付いている。

コトシロは、それを仁に手渡した。

「これは、琴葉ちゃんの……」

デコレーションは全て取れていた。でも、これは確かに琴葉の携
帯だ。

仁はポケットから自分の青い携帯を出す。傷はない。綺麗なもん
だ。

「コト八様の形見です。せめて、これだけでも連れて帰ってあげて
ください」

コトシロの顔を見上げる仁。彼女は寂しく笑っていた。

「わたくしとはここでお別れです。わたくしは、これよりセントラ

ルタワーへ入ります。だから……マスターと初めてお会いしてから、たった二日のお付き合いでしたが……楽しかったです。お元気で、マスター」

「ありがとうございます……ございます。コトシロさん、あの
コトシロが仁の手をメカニックな手で握った。」

「あなたは！……マスターは、生きて帰らなければなりません。コト八様との約束でしょう？コト八様の気持ちを大事にしてあげて！ マスター・ジン、どうかお元気で」

キュット、仁の手を握るコトシロ。琴葉の携帯を持った手ごと握るコトシロ。仁と琴葉の存在を確かめるかのように強く握り、そしてゆっくりと離す。

「お別れです」

コトシロの、その言葉があまりにも決定的だった。

手が震えてくる。首筋にいやな汗がわき出る。

仁の心の中で、何かがフツと音を立てて切れた。

琴葉かもしれないと疑っているコトシロの決意を見て、未練が切れたのかもしれない。

「クレア少尉、マスターをビフレスト・ポートへ！ ミアちゃんは私に任せて！」

問答無用。仁に確認させるいとまを与えようとしない。

「了解した！」

教科書に載ってる敬礼とはこの事。びしりと決めたクレアは、仁の震える手を握る。

「急げ！ ビフレストの橋の根元へ連れて行ってやる！」

いきなりだが、元の世界へ帰れるというあの橋が架かったというのか？

「ちょっと待ってクレアさん！ ミアが！」

もう一つの心配事。コトシロの腕に抱かれたミア。

不安そうな目をして仁を見ている。

「ミアとはここでお別れだ。心配するな。貴様……、マスターのお気に入りだ。我々が責任を持って金獣共の群れに帰してやる」

「でも！」

いきなりじゃないか！

「ミアを連れて帰る気か？ あの子が貴様にくっついたら、絶対離れないぞ！」

無理に引きはがされるミア。不安と寂しさで狂ったように泣き叫ぶだろう。

もう一度だけ振り返った仁。それは後悔を招くのみ。

最後に見たミアの顔が、初めて見る泣き顔だったなんて……。

「さようなら！」

仁は、ミアを見ずに、別れの言葉を口にしたのだった。

27・・・ミアちゃん。(後書き)

さあ、行こうか、仁君！

残すところ、後6話なのだよ！

次回、クリアさん、男前大爆発！

明日、更新します。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の情炎が付いてきます！

28・エルファイ・サーカス。

「なにせ、山一つ消え去る現象だからな。アルフレイの町中で橋が架かると、大変なことになる。大災害だ！」

カーキーグリーンに塗られたフルタイム2WDのサイドカーが疾走している。

側車に座ってる仁。バイクに跨るクレアさんの白く肉感的な太ももが眩しい。見えそうで見えないのが、これまたいいのかもしれない。

いやいやいや、不謹慎不謹慎。さっきコトシロさんと、いや、ミアと涙の別れをしたばかりだというのに。僕は最低の男だ！でもムッチリとした太ももは正義だ！

「おい、聞いているのか？」

「聞いてます聞いてます！」

銀髪を風になびかせるクレアさん。ゴーグルの向こうの目が冷たい。

「説明を受けていないか？ マスター達がビフレスト・ポットに乗って天界とアルフレイを行き来する場所がある。それがビフレスト・ポットという施設だ。あそこなら巨大なエネルギーを一点に集約できるだろう。と、というのがコトシロの読みだ。我らが向かう先はトナン地区にあるッ！」

つんのめるような急ブレーキ。車体が斜めになって止まった。

「よりによってこんな時に！」

道をふさぐのは金獣の群れ。仁とクレアの道程を知っていたかのような待ち伏せ。

先頭に立っているのは、美しき隻眼の金獣。
二ケだ！

嬉しそうな顔をして仁を見る。つづいて殺意剥き出しの牙をクレアにむけ、手にした斧を持ち上げた。

発電所を襲うときに手に得た斧。小さい斧だが、無限の体力を誇る金獣の二ケが持つと、とんでもない破壊兵器になる。

「場所を教える。貴様……もとい、マスターは先に行け！」
「え？」

ホルスターから銃を抜くクレア。
走り出す金獣の一群。二ケが率いている以上、ただの金獣たちではなからう。

道を教える間など無い。拳銃で裁ききれぬ数ではない。まして、クレアの銃は小口径。

その時、右手から複数の銃声が！ 機銃音も混じっている。

バタバタと倒れ伏す金獣。とは言っても生命力旺盛な金獣である。二ケ達は何もなかったように立ち上がる。そして銃弾を防ぐため、物陰に入った。

「今の内です、少尉！」
金獣たちを攻撃した部隊の一人。指揮者らしきエルフィから声がかかる。

「シエリル軍曹！」
一隊が移動する間、もう一隊がけん制の弾をばらまく。滞ること

なく訓練された動き。

そんな部隊長にクレアが声を掛ける。

「また計ったように出てくる！ そんなにマスターに気に入られた
いのか？」

クレアにサムズアップするシェリル軍曹。仁に向けてシナを作る。

「本官子飼いの優秀な兵士だ。ここは任せて先に行くぞ！」
タイヤを軋ませて元のコースに戻り、戦闘現場を後にする。

後ろを向いたままの仁。

「ニケさんは、僕と仲良くしたいだけなのに」

リズミカルに聞こえる機銃音。また血が流れるのだ。

「ニケは貴様、……もとい、マスターに恋いするが故に、集落へ連
れて行こうとしている。そのためには、マスターをビフレスト・ポ
ートから引きはがさなければならぬ」

クレアの片手が伸び、仁の肩を乱暴につかんだ。

「何を迷っている！ コトハとの誓いを忘れたか？ 橋が架かると
き、ポートに貴様……もとい、マスターがいなければこの都市は大
爆発を起こし壊滅する。元の世界に帰れなくなるのは、ただのオマ
ケ。それでもいいのか？」

「いいわけない。僕は誓った！」

「なら覚悟を決める。……エルフィ達も辛いのだぞ。なにせ、自分
たちは、愛する恋人と別れるための努力をしているのだから！」

通りを真っ直ぐ走っていくサイドカー。仁は、後ろを向いたまま。
クレアに頭を小突かれた。

前を向くものの、背後が気になる。

「後ろにも目があればいいのに」

「背中に目が無いのは幸せなことだ」

クレアを見上げる仁。ゴーグルを付けたクレアの目は、伺うことができない。

「なにせ、後ろを向いて生きて行かなくていいのだからな」

クレアさんの銀髪が、風になびいている。

大きな交差点を曲がり、大通りに出た。しばらく直線が続く。

もう、後ろから戦闘の音は聞こえてこない。クレアはアクセルを全開にしたのだった。

「こちらです！ 早くマスター！」

手招きするのは、眉を吊り上げたライラ少将。車両や戦車で防衛ラインが築かれていた。

バリケードの中に、サイドカーごと突っ込んで止る。

仁の姿を確認した金獣たちの動きが活発になっていた。それに対応する陸上軍の攻撃もハンパない。

「金獣共め！ 総攻撃をかけてきたな！」

その身体能力をフルに生かし切った接近戦を仕掛ける金獣たち。ライラ少将が陣頭指揮をとるエルフィ陸上軍がそれを食い止めている。……ものの、押され気味。

「何故、ここがわかったのだ？」

クレアが戸惑う。そう、ここはビフレスト・ポート。

なぜ、仁の目的地がこことわかったのだろうか？ クレアはそう言っているのだ。

やはり、仁の知らない内通者がいるのか？

矢継ぎ早に指示を出していくライラ。それがまた的確なポイントを突いていて、金獣たちは動けない。加えて、先回りしてここを押さえたカン働。この人は有能な軍人だ。

額に浮いた汗を拭こうともしないライラ。内通者が、この人であるはずがない！

では海上軍か？

南の方角から立て続けに爆発音が聞こえてきた。黒煙がいくつも立ち上る。町外れの自然開放地区だ。

「海上軍艦艇からの艦砲射撃です」

忙しい指揮の間を縫ってライラが説明してくれる。

「考えれば戦闘艦は移動砲台ですからね。沿岸部ならどこへでも撃ち込めます。陸上軍が着弾位置を確認して修正データを送ってまですから、効果的に金獣共の足止めができます。巨大砲弾は心強いです」

海上軍説却下！ もういい！ 内通者なんてどこにもいない！ 金獣さん達の能力がエルフィの予想を上回っていただけなんだ！

「ごめんなさい！」

仁は、頭を下げたあやまった。

「マスター、なにを？」

ライラは我を忘れて、仁の行為に見入った。

「エルフィの皆さんは、いい人達ばかりです！」

眉がつり上がったままのライラ。やがて穏やかな、のほほんとした元の顔に戻る。

「その通りですよ」

「こない人達を疑ってしまった。それも興味本位で！」

仁は泣けてきた。涙の粒が二つ。アスファルトに落ちた。

「こんな大事おおいでになるなんて……」

仁の涙は悔し涙へと変わっていた。

「たっ、戦いを止めることはっ、でっ、できないですか？ 方法はないんですか？」

しゃくりあげながら、誰ともなしに聞く仁。

「ムリだな」

クレアが一刀のもとに断ち切る。にべもない。

「貴様……、もとい、マスターが止めると言えばエルフィは戦いを止める。そして、金獣に殺されていく。貴様……、もといマスターは、金獣の集落に連れ去る途中でビフレストの橋が降り大爆発。二ヶはそこで死亡だ」

クレアは掌を広げて爆発の模写をする。

「金獣に言葉は通じない。コトシロなら知っているだろうが、あいつはエルフィサイド。言葉というのは信用だ。コトシロの言葉は信用されない」

人を愛するのに言葉は要らない。どこかの時代で誰かが言った。た。

それは間違いだ。言葉一つで全てが無茶苦茶になる。

「アーツ・マスタ・カツ！」

聞き覚えのある声。顔を上げる。

ビースト・ビューティ、ニケだ。

ニケ率いる一団が現れた。ビフレスト・ポート前で戦っていた金獣たちが勢いづく。

「追いついてきたか。……ということは」
クレアの唇が歪む。

……たしかシエリル軍曹と呼んでいたっけ。

「シエリルさんは？」

「そう言うことです」

答えたのはライラ。自分の拳銃を予備弾倉と共にクレアへ手渡す。
大型拳銃だ。

「少尉、これより我々は攻勢に出る。その間にマスターと中へ！
以上！」

「了解ッ！」

踵をならし、敬礼するクレア少尉。

ニヤリと笑い、崩れた返礼をするライラ少将。そして顔を引き締める。

「打ち方やめ！」

ライラさんが陸上軍兵士の真ん中に飛び出し、仁王立ちした。

攻撃が止んだのを見て、金獣たちが突撃してきた。

「斉射イツツ！」

一糸乱れぬ動作。陸上軍全員が息を合わせて五連射した。

「今だ、走るぞ！」

クレアが動いた。仁の手を引き、ビフレスト・ポートの入り口を

くぐり抜ける。

くぐり抜ける直前、仁は後ろを振り返る。

ライラの横顔は、磨き上げられたナイフのように美しい笑顔だった……。

28・エルフィー・サーカス。(後書き)

太ももは真実・内股は正義！

次回、ラストラン！ クレアさん、走ります！

明日、更新します。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の悪夢が付いてきます！

29・ラストラン……。

「きついつス！」

階段を駆け上がる仁。その後ろから追い立てるクレア。せめて先に走ってくれれば、下から覗けて

「なんか言っただか？」

拳銃を手にしているクレアさん。目が怖い。

聞けば、ポートは五階にあると言っ。急ぎ足程度なら楽勝なんだが、全速で駆け上がれと無茶を言っ。

そもそも。

『エレベーターは使わないでください』

ホールに入っすぐ。館内放送が入っ。声はコトシロのもの。

『ビフレスト・ポートに電力を供給するシンエン発電所が金獣に襲われています。ポートの施設自体は独立した自家発電ですが、付帯設備まで電力を回せません。発電所が落ちますと、エレベータはもとより、私の目である監視装置まで死んでしまいます。エレベーターの中に缶詰になっってしまうと、わたくしの力ではどうすることもできません』

エレベーターが止まると、そこで終了という事になる。

「仕方あるまい。走ろう」

そんなクレアの一言で階段を駆け上がる事となっただ。

「死にたいか死にたくないかではない。生きたいし殺したくないし

！……だろう？」

クレアさんがハツパをかける。

ビフレストの橋が架かるまでに到着しなければ、この町ごと吹き飛ばす。琴葉との誓いも破ることになる。それはわかっているのだが、なにせ、足がほら、もたついて……。

「肩ぐらいなら打ち抜いても、走るのには問題なさそうだな」
仁の足が速くなった。この人ならやりかねない。

五階まであと少し。この階段を登り切れば、あとは這ってでもどうにかなるだろう。

心臓がストライキを起こす寸前、ただっ広いフロアに出た。五階だ！

地平の彼方まで横一列に並ぶ黒い球体。端っこが霞んで見えない。まだ走らなければならぬようだった。

「ここがポット。あのポットに入って蓋を閉めれば、それで任務完了だ。座るな！」
へなへなと崩れ落ちつつある仁を叱責するクレア。

「聞こえますか、マスター？」

コトシロの放送が入った。

「そこから左へ走ってください。担当のエルフィがポットの準備をしている」

コトシロの放送が途絶えた。照明が一斉に消える。すぐさまオレンジの非常灯が付く。

「発電所がやられた。コトシロの調整がきかなくなった！」
建物がぐらりと揺らいた。遅れて聞こえる爆発音。かなり大規模
場所は……。

この建物の一階あたり。……ライラさん？

「ライラが抜かれたな。どうする？ もう走れないか？」

「まだ走れる！」

真っ赤なルージユを引いた唇が、楽しそうに笑った。

「そうだマスター・ジン。まだだ。まだ間に合う。左と言えば……」

「お茶碗を持つ方向！」

仁とクレアは、同じ方向に視線を向けた。

「あそこだ！」

指さすクレア。その遙か彼方、エルフィ三人が手を振って合図を
送っている。

「なにせ、これだけあるポットの中で、生きているのは一個だけだ
からな」

彼女たち、すっごく小さく見えるんですけど……。

「ラストラン。走るぞ！」

クレアについて走る。足が動くから不思議だ。

どんどんポットに近づいていく。

一つだけ、ハッチが開いたポットがある。それが見てとれた。仁
が使う予定のポット。この世界で唯一生きているビフレスト・ポッ
ト。

「帰るよ、琴葉ちゃん！」

ポケットに入れた琴葉の携帯を確かめる仁。

後ろで大きな音がした。

弾かれたように、背後を振り返る仁とクレア。

「ワコエルフィーツ！」

ニケだ。ニケが階段の出口から姿を現した。手に斧を持っている。

何も知らないニケ。ただただ、マスターを追ってきただけのニケ。

ニケの仲間がいない。彼女も一人。

仲間の金獣たちが、ニケ一人だけを生かしたのだ。

ここで、仁がポットに乗らなければ、エルフィだけではなくニケも死んでしまう。

ビフレストの橋に巻き込まれ、死んでしまう。

クレアも、ニケも、ミアも、コトシロも。

それを伝える術を持たない仁。それが歯がゆい。それが悔しい。

「先に行け！ ここは本官が……」

言葉を匂切るクレア。初めて見る。仁に向けた、慈しむように優しい笑顔。それも一瞬。

「必ず食い止める！」

拳銃を構えるクレア。ニケは、残像を伴うスピードで、ポットの陰に隠れた。

「ニケも、いつかわかってくれるさ。だから貴様……、もとい、マスターは走れ！」

「もう貴様でいいよ！」

理解してる。わかってる。

でも、ここでクレアさんが、なぜ、犠牲にならねばならぬのか？

いつも励まし、尻を叩いてくれたクレア。口は悪かったけれど、いつも仁を助けてくれたクレア。

今気がついた。仁はクレアが好きだ。琴葉と同じくらい大好きだ！

仁は後ずさった。二歩三歩と後ずさった。

ホールに響く射撃音。クレアが発砲した。それを合図に仁は、踵を返して走り出す。

さらに二発の射撃音。仁は後ろを見ずに走る。ただ一つのポットへ走る。

早く早くと、ポット係のエルフィが手招きする。仁はポケットに手をつ込んだ。コトハの携帯を取り出す。もう一方の手に自分の青い携帯を握りしめる。

「さあ帰るよ、琴葉ちゃん！」

さらに、銃声が三つしたのだった……。

29・ラストラン……。 (後書き)

残り、もう少しですな。

次回更新は明日の予定。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の憑依霊が付いてきます！

30・超常現象。

ポットは目の前。係のエルフィは最終操作に入っていた。ポットの上に設置された円柱の先端から、あの銀色の光が漏れている。

「ビフレストの橋が架かります！ お急ぎください！」

一人は脇のパネル操作。一人は固定装置をスタンバイ。一人は仁の手を取り、ポットの中に押し込んだ。

ポットに入る前、ステンレスの仕切りパネルに自分の姿が映った。醜い姿に見えた。

そして、仁はポットに入る。

建物が唸りを上げて震えだした。天井にひびが入り、小さな破片が落下している。

間欠的に発光する銀の光。黒いポットが銀色に変色していく。

「ビフレストの橋、いま架かりました！ 急いでっ！」
間に合った！

パネル操作係のエルフィが、スタッフを叱咤している。
また銃声が三つ。クレアさんは健在だ。それが心強い。

エルフィが二人がかりで固定装置を降ろす。ジェットコースターに装備されている、あの安全バー的な油圧式固定装置だ。

「キヤーツ！」

バーを降ろしていた二人が、悲鳴を上げて真横に飛んだ。

入れ替わりに現れたのは、片目を黄色い布で隠したニケ。満足感に溢れた優しい笑みを残った目に浮かべている。

二ケが口を開く。

「マスター、アイシテル」

二ケが、仁の言葉を喋った。

言葉が通じるのか？

「だめだよ二ケさん！ 僕は帰らなきゃならないんだ。でなきゃ二ケさんも死んでしまう！ わかるかい？」

二ケの対応は、首を傾げるだけ。

アイシテル、この言葉だけしか知らないのか……。

二ケは、仁に手を伸ばしてきた。

「そこから離れろっ！」

二ケの後ろでクレアが銃を構える。ライラより託された大型銃。超回復力を持つ金獣といえど、この銃の前では動きを封じられる。

一瞬で戦士の顔になる二ケ。ゆっくりと振り返る。

ポットのパネルを操作する女の子から悲鳴が飛ぶ。

「少尉！ 撃ってはだめです！ 外れたら最後のポットが！ マスターがっ！」

大口径の銃。普通の人がある弾を食らったら、手足くらい吹き飛んでしまう威力。

金獣の身体能力は狼男並。この距離でもかわすことは可能。なら、弾は仁に当たってしまう。当たらずとも、ポットを壊してしまう。そうなれば全てが終わる。

この町も消えてしまう。

シェリル軍曹やライラ少将の想いが　そして琴葉の想いが無駄になる。

「そんな事わかってる」

クレアが叫ぶ。クレアは、危険性を知っているから先に声をかけたのだ。

ニケを殺すだけなら、何も言わず撃てばよい。

おそらく、クレアはニケを倒す最初で最後の機会を仁の為に捨てたのだ。

ポットの発光が一段と強まった。ニケが動く。

射線から、マスターである仁を外すかのように。いや、外すために。

「安全柵、仰起！」

操作係のエルフィが唱和すると、腰までの高さの柵が床から伸びてきた。

揺れが一段と激しくなる。ひびが床や壁に伸びる。固定されていないポットが、いくつも台座から転がり落ちる。

太陰対極図を描きながら、クレアとニケが接近していく。

銃を眼前に構えたクレア。斧を下段に構えたニケ。

ポットの上。円柱の先端から伸びる眩しいエネルギー光。

銀色のベールに覆われていく転移ポット。この色は、あの時のミラー球の色！

「空間転移ポート、ペンテコスト開始！ ハッチ閉めます！」

係の女の子が泣き声で叫ぶ。

「もう行っていいぞ」

クレアがかけた言葉に、はじかれるようにしてかけていく女の子達。

仁の目の前でハッチが、……上と下に別れたハッチが、この光景を挟み千切るように、ゆっくり閉まっていく。油切れだろうか？ その動きがぎこちない。

「これでさようならだ。貴様……もとい、マスター」
「貴様でいいっていつたろう？ 仁って呼んでいいよ！」

クレアとニケ。二人の間が狭まっていく。

二人は似ていた。錯覚しそうなほどよく似ていた。二人が協力すれば、天の星だって取れるだろうに……。

あれ？

仁の頭に閃くものがあつた。よく似ている。それは錯覚というものの。

じゃあ、あれが間違いで、これが正解だとしたら……。
手にした琴葉の携帯を見る。

ばらまかれていた鍵と、散らかった錠が全部合致した瞬間。

すべて、理解した！

「じゃあな、……仁。結局、エルフィ本来の仕事をしてやれなかった。元の世界の人たちによろしくな！」

二人の距離はゼロ間隔。クレアさんの持つ拳銃が、ニケの額に触れそう。ニケの持つ斧は、クレアさんの首に届く位置。

クレアさんが笑った。泣いているのに笑顔でいられるのは何故か！

どうすればいい？ 僕はどうすればいい？ 真実がわかった僕は！

このまま帰るのか？ でも帰れる唯一無二のチャンスだぞ！ 琴葉ちゃんに誓ったろ？

ハッチが閉まる。隙間は五十センチを切った。仁にはもう何もできない。

ニケが斧を落とした。床に音が響く。

それを合図に、クレアが発砲。ニケはすでに指を揃え手刀にした左手をクレアの喉元に食い込ませている。その色がオールグレーに変わった！

世界から色彩が消える。クレアの銃口に灯る炎までがグレーの世界。

特異点である仁の能力である。過去二回の超低速を遙かに越える超々低速の世界。

ハッチの隙間は四十センチで止まっている。しゃがんで出ようとしたが、狭すぎる。両手に持った二つの携帯を座席に放り投げ、這って出る。

転がりながら外へ出た。安全柵を乗り越える。重い体を引きずって二人に近づいていく。

クレアさんの銃口から弾丸が飛び出していた。ニケの額に接触寸前。いかなニケといえど回避は不可能。一方、ニケの手刀はクレアの首に食い込んでいた。

仁はクレアの頭と肩に手を当て、……考えた。ここは超低速の世界。それは仁から見ればの話。第三者から見れば仁は超音速で動いている。

マツハの動きで乱暴に扱ったら、クレアの白くて細い首が折れる。

だから、そつと押した。時間をかけて、二ケの手刀からクレアの体をずらした。

次は二ケ。

いけない！ 弾丸が額に接触している。時間が止まったわけではないのだ。マツハの弾丸を先に処理すべきだった。

仁は、カ一杯二ケに体当たりした。不死身の金獣のこと、マツハの体当たり位じゃ、たいして怪我をしないだろう。

床に転がる頃には、ふらふらだった。精神力と体力のほとんどを消費したみたい。

斜めになった視界に、走って逃げている、ポット担当の女の子を捕らえた。一人だけこちらを振り向いて見ているが、三人とも空中で止まっている。

仁の緊張が解けた。世界に色が戻る。空中の女の子達が着地した。銃声の続きがとどろき渡る。バランスを崩した二人が倒れた気配を感じる。

そして……。

ビフレストの橋をゆっくり昇っていく、誰もいないポットが見えた。

ああ、……琴葉と仁の携帯が乗っていたっけ。

鋭い銀光にフラッシュしたポット。水平に広がる衝撃波。吹き飛ばされるポット群。フロア中のガラスが砕け、粉と化す。

ポットは空気を振るわせ、切り裂き、暴虐の限りをつくし、この世界から姿を消した。

最後のポットが、最後のビフレストの橋を駆け上がっていったのだ。

緊張感の回復。クレアがなんか叫ぼうとしているのは火を見るより明らか。

死力を尽くして仁は立ち上がった。勢いよく！

「二人ともストロップ！」

掌をめいっばい広げ、両手をめいっばい伸ばして、二人の間に割って立つ。手に何も持っていないから、いくらでも手を広げられる。そして、いくらでもつかみ取ってやる。

「仁！ 貴様どうして、なぜ？ むぐっ！」

クレアさんの赤い唇に指を一本立て黙らせる。

訳もわからず口を開いている二ケに正対する仁。

「言葉が通じなくても言葉を通じさせてやる！」

「ごそそと、ポケットを探る仁。何かをつかんだ。」

「二ケさんこれ！」

仁が差し出したのはマルタの店で買った生地。……で作った、なんか紐状のレース商品。

時間を作ってはチクチクと縫っていたのだ。

「そのままにして！」

こちらも指一本で二ケを静止させる。迫力勝ちというやつだ。

二ケの右目に巻かれている薄汚い布を取り去る。つぶれた右目は閉じられたまま。その右目に当てて、頭の後ろでひもを結ぶ。

純白のレースで作った可愛いアイパッチ。

「うん、よく似合うよ」

ここまで、あのニケが着せ替え人形状態である。

ニケの肩を押して右向け右。ステンレスパネルに姿を映す。

自分の姿を見て、口をOの字に丸めているニケ。

「うんうん、きれいきれい」

ステンレスの鏡と仁を交互に見る。クレアのことはどうでもよくなったのだろう。目を伏せ、頬を赤らめ、なよなよしく立つばかり。

「まったく！ 女の財布で買った物を違う女にプレゼントするとは！」

仁の背後から、怒りに染まった声がした。クレアだ。

「お、怒ってますか？」

「怒ってるさ！ 帰らなかったことに対してな！」

人差し指で仁の額を小突くクレア。

「なんで帰らなかった？ みんなの想いを無駄にしてしまった！」

本官を助きたいなどというつまらん返答だったら、この場で撃ち殺すぞ！」

「全てを解決できるんです。僕なら！ わかつちゃったんです、全て！ みんなの想いを無駄にしないために。だから手伝ってください！」

クレアは、しばらく黙って仁を見ていた。

やがて、クレアは、拳銃をガンマンよろしく三回転させてホルス

ターに戻した。

「いいだろう」

怒った顔のまま。特に金色の目が怒っている。でも紅いルージユに彩られた素敵な唇は怒っていなかった。

「仁に賭けよう」

仁に手を伸ばそうとしたクレア。すんでの所で止まり、腕を組む所作に変えた。

で、戦闘的な目付きでニケを睨み、親指で指す。

「こいつはどうする？」

「もちろん手伝ってもらいます」

ニケはニケで、凄まじく妖艶な目でクレアを睨み返していたのだ。
った。

30・超常現象。(後書き)

次回解決編！

べ、べつに、推理物なんて書きたくないんですからねっ！

次回更新は明日の予定。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の魂のダイブが付いてきます！

31・八重事代主神（ヤエコトシロヌシ）

「ポット転送完了。^{ベンテコステ}ビフレストの橋、消滅。シンエン発電所、機能停止。次はキャッスルと、このセントラルが目標に……」

コトシロが、被害状況を機械的に読み上げている。

セントラルのコントロールセンター。仁が初めてコトシロにあつた部屋。

壁一面を埋め尽くすモニターには、アルフレイ・ランド各要所で戦闘状況が映し出されていた。

「ミアちゃん、あなたはお逃げなさい」

「ミアッ？」

抱いていたミアをゆっくり降ろすコトシロ。ミアの頭を優しくなでてから、首輪を外す。

「その首輪、外しちゃうんですか？」

あきらかな動揺を見せ、コトシロがこちらを向いた。

「とても似合っているのに」

仁がコトシロの部屋に入ってきた。ミアは何も言わずダッシュ。

仁の胸に飛び込んだ。

「マスター……ジン？ なぜここに？」

「ポートの電気が落ちたんでモニターできませんでしたか？ ここにいるのは僕だけじゃありませんよ」

ベロベロとミアに顔を舐め回されている仁の後ろから、クレアとニケが現れた。

「まさか、コトシロが金獣との内通者だったとは……」
銃を構えるクレア。仁の左につく。

獰猛な目をしたニケは、仁の前で姿勢を低くし、全身にバネをためている。

「わたくしはここを動いておりません。外に出れば目立つし、目撃者も多数いているはず。どうやって金獣と接触したのでしょうか？」

コトシロの声には怒気が含まれているが、仁は努めて無視した。

「コトシロさんが接触したとは言っていないません。金獣達と接触したのは、何も知らないミアちゃんです。コトシロさんは、センターにいながら全てを操っていたんです」

「それは以下の点で不可能です。ミアちゃんが目撃されたという報告がありません！」

仁の説に穴を見つけたコトシロ。今度は自信たっぷりだ。

「ミアちゃんも僕の側近扱いですよ？　じゃ、エルフィの方々は僕のプライバシーを優先して、見て見ぬふりをして黙っているはず。目撃者ゼロで間違いありません」

マスターのプライバシー最優先。側近の行動はマスターの行動。目撃したエルフィ達は、墓場までその情報を持って行く。

「とはいうものの、何も知らない二歳児のミアが情報を伝えることなどできません。でも、金獣と接触さえすれば、首輪のスピーカーで話してきますよね？　コトシロさん、金獣の言葉を話せますし」

コトシロが手に持つ、ミアの首輪を仁が指さす。

仁の腕が震えている。実のところ、腕はもとより、膝までガクガク震えている始末。

「最初に会ったとき、言っていましたよね？ コトシロさんは、アル
frey・ランド全ての電子機器を調整する者だと。各セキュリティ
システムを管理・調整するのが仕事なんだと」

時々裏返る仁の台詞。コトシロは、口を挟まない。

「ミアちゃんの動きを監視しているのはコトシロさんだけ。コトシ
ロさんが部屋にいると言えば、ミアちゃんは部屋にいます。本当は
いなくても。部屋の鍵を外すも閉めるも自由自在。誰も疑わないし、
確認もしない」

仁の言葉は細かく震えていた。

「共犯者がいればだれでも……いえ、コトシロさんしかできない。
その首輪があれば、ニケさんたち金獣と話ができる。発電所の弱点
も襲撃手順も教えられる。地図だって渡せる」

先ほどから指しっぱなしにしている首輪のことだ。……すこし、
指さすのが早かったのかもかもしれない。マヌケな姿を想像して、ちよ
つとばかり後悔する。

「ミアは難しいことをしなくていい。ニケさん達と会えさえすれば
それでいい。琴葉ちゃんの病室へ行ったとき。マルタさんの店へ行
ったとき。船で灰を撒いていたとき。金獣襲撃の会議をしていたと
き。そのほかにもあったのかもしいけど、充分打ち合わせでき
る時間がありましたよね？ ……なんちゃって」

この世に生を受けたからには、いつか一度は言ってみたい「お前
が犯人だ！」という台詞。それがこの体たらく。

あと、嘘をつくとき声が大きくなる！ という定番も言い損ねた。

コトシロが長い黒髪をかき上げる。

「わたくしを疑うとは、心外です。どのような証拠があつて、……

なんちゃってね」

ひよいと肩をすくめるコトシロ。彼女らしからぬ軽い動作。

「バレバレですねえ。いつわかったのかしら？ これでも自信あったのよ」

コトシロは、寂しい笑みを口に浮かべた。

「確信したのはポットに座ったとき。でも、発電所襲撃会議の頃からわかっていたんだと思います」

結局「お前が犯人だ！」とは言えなかった。

「そもそも、僕の間違いは、こうであって欲しいと願う、思いこみによるものでした。でも、それが間違いだって事に、さっき気づきました。そうしたら先入観が無くなって……共犯者の存在にまで考えがたどり着いたら、全てわかつたんです」

両手を肩まで上げるコトシロ。

「わかつたら何？ わたくしをどうするっていうの？ 調整者無しでアルフレイ・ランドが無事機能すると思ってるの？」

「えーとね、犯人を暴くためや捕まえるために、ここに来たんじゃないんです。ここでしたかったことは」

仁は、早足で部屋の中央へ歩いた。構えるコトシロを無視して通り過ぎ、全アルフレイ・ランド内放送用マイクを手にした。コトシロにとって予想外の動きだった。

コトシロが全エルフィに向け、仁がマスターであることを告げたマイク。

「マイク、貸していただきます」

一度見て覚えている。脇のスイッチを入れた。四音の予鈴が鳴る。

「僕です。マスターの仁です。僕は僕の意志でこの世界にとどまる事にしました。マスター命令です。金獣との戦闘を停止してください！」

各地を映しだしているモニターには、戦闘の手を休め、キヨロキヨロ周囲を見渡すエルフィの兵士達が映っていた。

「無駄な事を。金獣にはマスターの言葉は届きませんよ」

腰に片手を当てるコトシロ。彼女の言うとおり、動きを止めたエルフィ軍に対し、ここぞとばかりに襲いかかる金獣。

「そうかな？ 僕はそうは思いません」

大きく息を吸って、溜めて。

「みんなっ！ 愛してるっ！」

仁は、スピーカーが割れそうな大声で叫んだ。

金獣の動きが止まった。無防備な姿で立ちつくしている。そして、エルフィと一緒に声の主を捜している。

「みんな僕の恋人だ！」

エルフィ、金獣、分け隔て無く同じ仕草をとる。顔を赤らめるという仕草。

言葉は通じない。でも声の調子から意味は伝わる。金獣たち全員が、「それ」を望んでいたのだから。

戦いを仕掛ける者は両軍通して一人もいない。

これが、この内戦の終演。あっけなく戦いが終わった。

マイクを仁から奪う手があった。ニケの手だ。

「ニケ・エ・マスター。オナカム！」

ニケの声が、放送された。

たぶん、彼女はマスターと一緒にいるとでも言ったのだろう。

腕を突き上げ、雄叫びを上げる金獣。

一人二人とその場を走り去りやがていなくなった。金獣たちはみんな笑顔だった。

仁は、マイクのスイッチを切った。そして、コトシロに向き直る。「さつきも言ったけど、真犯人解明は通過点の一つに過ぎないんですよ」

それは本当。だから、コトシロには極力丁寧に説明しようと思っている。勘違いして欲しくないから。

「僕はある間違いに気づいた。そして、たぶん真実にたどり着いた。その副次的……まあ、オマケとしてコトシロさんが主犯だということに気づいたまで。だけど、僕が知りたい真実はそんな事じゃないんです。えーとお……」

首にしがみついたままになっているミアを肩に乗せた。肩車の格好。

「なぜ、こんな事をしたんですか？ コトシロさんには何の利益にもならない事でしょう？」

仁は、コトシロの言葉を待った。どんなに時間がかかっても待つつもりだった。

なぜなら仁にはコトシロに対し、ある負い目があったからだ。

31・八重事代主神（ヤエトシロヌシ）（後書き）

回収！

次回更新は明日の予定。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の、転がるような俺の生き様が付いてきます！

32・サヨナラ。

ところが、コトシロは間を開けずに話し始めた。

「羨ましかった……からかな？」

チラリとクレアを見るコトシロ。クレアは銃を動かし、続きを促した。コトシロは、今はエルフィしか映しだしていないモニターを眺める。

「マスターを愛する事しか能のない、馬鹿なエルフィとスヴァルトが……」

長い黒髪が揺れる。

「だから、二人を争わせたかった。二人の生き甲斐であるマスターを取り上げてしまったかった！」

激しく音が響く。コトシロがパネルを両手で叩いたのだ。

「マスターを取り上げたかったなら、僕を殺す方が簡単だったはずだ」

「だから、ニケをビフレスト・ポートへ導いた」

バイザー越しにコトシロが仁を見る。

「うつそだあー」

仁が笑う。

「いや、ニケさんを向かわせたのは嘘じゃなくて、嘘と言ったのは、それで僕を殺そうとした方ね」

手を置いて、のジェスチャーにしている仁。

「だって、他に確実に殺せる方法が、いくらでもあったじゃないですか。例えば、さつきあのままエレベーターに乗せて停電させるとか、食べ物に毒を混ぜるとか……だいいち、ニケさんが僕を殺さないのは、コトシロさんが一番知ってるはずですよ」

いまいち決まらないのを自覚する仁。後頭部を掻こうとしてミアの腰を掻いてしまった。

キヤツキヤと無邪気に笑うミア。

「わたくしもそんなに笑ってみたい。声を上げて笑ってみたかった！ ヒトを……マスターを愛し、愛されたかった……」

後ろを向き、背を見せるコトシロ。肩を振るわせている。

「それにマスター・ジン。あなたはわたくしに何を求めておいででしたか？」

仁が問い詰められる番。それこそ、仁が気づいたという点。負い目を感じたところ。

「僕は、コトシロさんを……琴葉ちゃんじゃないかと思っていた。大怪我をした琴葉ちゃんがサイボーグ手術でコトシロさんになったんだと」

長い黒髪。見た目の同一年齢。

「でも、それは間違いなんだよね。琴葉ちゃんは、死んだんだ。もうここにはいない」

琴葉の死に対し、仁の目にブレはない。

「コトシロさんは、短い間だけだったらと気を回してもらって、琴葉ちゃんぽく振る舞ってくれたんだよね？ お互い、傷つけ合うだけなのに」

後ろを向いたまま、コトシロは何も言わない。

「ごめんなさい」

仁は頭を下げて謝った。コトシロは許してくれそうにない。

「あなたが謝る必要はありません。わたくしも反省などいたしません」

機械の腕を上げる。二の腕の外装が開き中のメカが丸見え。関節がモーター音を挙げて回転する。

「わたくしはこんな体」

後ろを向いたままのコトシロ。

「だれも、こんなわたくしを愛そうなどと思わないでしょう。コト八様のまねをしていれば、少しは気が惹けるんじゃないかと邪念しただけ。わたくしは醜」

コトシロの言葉は、そこから続かなかった。コトシロの背を後ろから仁がそっと抱いていたから。

コトシロを振り向かせる仁。そっと手をバイザーに沿わす。かちりと音を立て、バイザーが上がった。

もちろん、琴葉ではない。知的な美女の目が、仁を見ていた。色は金色。

「うん、やっぱりきれいだよ」

コトシロは、振り切るように仁から離れた。二歩、三歩と後ずさる。

「ひどいですよマスター。わたくしはこう見えても、まだ十三歳なんですよ」

涙が一筋、彼女の頬を流れた。

仁より一つ小さい少女だったのか。

……コトシロさんを助けたかった。

仁は決断をした。

「あとは警察に任せよう」

「アルフレイに警察機構はない」

クレアが冷たく言い放つ。

「コトシロが警察と検察の機構を兼ねている。もっとも、アルフレイで、警察沙汰になる争いなど起こったためにはないがな」

シニカルに笑うクレア。対して、目を丸くしてクレアを見つめ、口を開けている仁。

仁は首をかしげて考えている。やがて、仁は何かを確信したのか、口を閉じ、うんうんと噛みしめるように頷いた。

「もし、僕に権限があるとしたら、この件は不問にしたい。……だめだろうか？」

仁はクレアに問うた。

「コトシロ次第だな」

コトシロはディスプレイを背にして立つ。背後に手を回す。回した手が出てきたら。手に銃が握られていた。

ニケが飛びかかろうとしたが、躊躇した。銃口が狙っているのは仁だからだ。

クレアはとつさに降ろしていた銃を構えなおそうとして……、床に片膝をついた。

「クレアさん！」

仁がクレアの肩を抱く。手に力が入らないのか、銃を持つクレアの手が震えている。

「この部屋に、ある波長を組み合わせた電波を流しました。エルフイであるクレアは、体の自由がきかないはず。万が一、エルフイが反乱を起こした時用に、ヒトが作った防護策です。さあ、この部屋を出て行ってちょうだい！」

「コトシロさん！」

発砲音。仁の足元に穴が空く。ニケが飛びかかる隙を与えず、第二弾装填。

「そうですね、ニケさんが邪魔ですね。マスターキトウヨ・ロリツミア」

コトシロが金獣の言葉を喋った。とたん、ニケの体から戦意が喪失。仁とミアとコトシロを代わる代わる見つめた後、髪の毛を掻きむしって両の膝をついた。

「何を言っただんですか？」

クレアの腕を取りながら仁が問う。十三歳の少女は、いつもの笑みを唇に浮かべていた。バイザーを上げたままなので、笑顔が見える。邪気のない可愛い十三歳の笑顔だった。

「マスターはまだ未成年だと言っただけです。ついでに、ニケではなくミアを恋人に選んでいると付け加えておきました」

そしてバイザーを降ろす。口元に笑みはない。コトシロに戻った。「これで金獣につきまとわれないでしょう？ さあ、お行きなさい！」

断固とした物の言い様。

「だめだよコトシロさん！ 早まっちゃ
」
「ならば、あなたはわたくしを愛してくれますか？」

それはできない。だって僕は……。
でも仁は言い返したかった。クレアに止められなかったら。

「部屋から出るんだ。……部屋から出てやってくれ！」
何度かコトシロとクレアを交互に見た後、仁はクレアに肩を貸した。ニケの腕を引っ張りながら、コントロールセンターを出て行く。

廊下に出ると、ドアがゆっくり閉まっていく。仁との名残を惜しむように。

部屋の中のコトシロは銃を構えたまま。ドアが閉じきる直前。コトシロの唇が動いた。

サヨナラと。

32・サヨナラ。(後書き)

始まりがあれば終わりもある。

終わらせるためには、始めなければならない。

いよいよ次回、最終回。更新は明日正午の予定。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。
まもなく作者の涙が付いてきます！

33・キス中は喋れない。(最終回)

「アルフレイ・ランドの機能が正常に動いているということは、コトシロ様が健在で働いているということでしょう」

これは片手を吊ったライラ少将の見解。

ここは、主立った役職のエルフィ達が一堂に会し、報告会と善後策を協議する場である。

仁とクレアは、その場を後にしていた。事の顛末は、オブラートに包んで話しておいた。

コトシロを許してやってくれと言う仁の願いは、あっさりと通った。

廊下で、鼻の頭に絆創膏を貼ったシエリル軍曹と出くわした。ミアに手を振ってすれ違っていった。

何のことはない。みんな無事だったのだ。

エルフィの体は、戦うためにできたものではない。有り体に言えば打たれ弱い。ちょっとした衝撃で腰を抜かす。僅かな痛みで、あえなく失神する。

だから、戦闘自体、見た目ほど激しかったわけではない、ということだ。

エルフィ側死者ゼロ。重傷者ゼロ。コケたとき、不用意についた手を捻挫させたシヨックで白目を剥いたライラが一番の重傷者だった。

金獣サイドも死者が出たとは思えない。銃で撃たれても平気な体と回復力である。

つくづく平和な世界であった。

「低脳猫耳クソ女の二ケもおとなしく引き上げてくれたことだし、ほとぼりが冷めたら金獣のムラへ遊びに行くといい」

クレアが車のドアを開ける。

「コトシロも、いつか引きずり出してやる」

「そうだね。引きずり出さなきゃね」

監視カメラを覗きながら、仁もドアを開ける。ミアが隙間から滑り込んだ。

地下駐車場におかれた緑と白のツートンカラーの車は、クレアの個人所有車だ。タイヤハウスが左右に飛び出したデザインの、小さなスポーツカーである。

クレアがハンドルを握る。仁は助手席に収まる。後部座席でミアがはしゃいでいる。

「結局、仁は帰らなかったわけだが、……馬鹿なことをした。悔いが残るぞ！」

口調は怒っているようだが、顔は怒っていない。

「実は、僕のかわりに、琴葉ちゃんと僕の携帯が帰っていったんですよね」

「それは面白い。向こうの人間がどんな顔でそれを見るか、想像するだけに愉快だ！」

クレアは、笑いながらシートベルトを締めた。作り笑顔ではない自然な笑い。

「だが、コトハはもうここにいない。アルフレイで人間はただ一人寂しくないか？」

ハンドルを握り、真っ直ぐ前を向いたままのクレア。

仁は、それに答えず、質問で返した。

「クレアさんはどうですか？ いえ、どうでしたか？」

仁は、クレアが答える隙を与えず、話を続けた。

「クレアさんだけ、なんでアルフレイって呼ぶんですか？ みんな

アルフレイ・ランドってフルネームで呼んでますよ」

「ランドを付けると、安っぽく聞こえるから……かな？」

アクセルを踏み込み、車は滑るように走り出した。

「ライラさんは、日本のお茶碗のこと知らなかったみたいだよ。お箸も知らないみたいだし」

クレアに対し、堅苦しかった仁の口調は、ここに来て普段通りの話し方になった。

「そう？」

クレアの返事は素っ気ない。

やがて地下駐車場を抜け出す車。日差しが車内に入り込む。後ろでミアがくしゃみを一つした。

「アルフレイ・ランドには警察と検察組織が無いのに、なんでクレアさんは、その名称を知ってるのかな？」

「アレだ、……コトハの携帯に入っていた。百科事典の中に」

左折のウインカーを点けざまに、本線と合流する。後部車両の急ブレーキ音が聞こえる。

「マスターの中には、大枚をはたいてエルフィになる人もいるって、

前に言ってたよね？」

「そうだったっけ？」

すこししゃべり方が変わってきたクリアが、何かを隠すかのよう
にアクセルをめいっばい踏み込んだ。加速で、ミアが後ろで転げて
いる。

「大怪我をした琴葉ちゃんは、どうやってあの手紙を書いたのだろ
う？　しっかりした筆跡だったけど」

「さあ？」

なかなかのドライビングテクニック。追い越し車線、本線とジグ
ザグに車を抜いていく。

「おでん……って日本語だよ？　日本特有の料理だよ？」

「そうとも限らないんじゃないか？」

リヤタイヤをスライドさせ、大きなカーブをクリアしていく。

「クリアさん、十年前、何してました？　生まれて十四年間、どん
な仕事してました？」

「……」

クリアと仁、ミアの乗った小さな車がスローダウンしていく。

やがて車は、力なく路肩に止まった。

サイドウィンドウを開けるクリア。肘を出し、空を見上げる。

綺麗な空気が入ってきた。車の走行音に混じって、小鳥モドキの
さえずりが聞こえてくる。

「クリアさん、琴葉ちゃんだろ？」

後頭部、産毛の生え際を爪でポリポリ掻くクリア。彼女の癖のよ
うだが、明るい銀の髪もまたいいね。

あ、クレアさんと目があった。
今度はそらさない。真っ直ぐ見つめることができる。

クレアさんの、真っ赤なルージュに彩られた唇が動いた。
「正解！」

次にクレアが取った行動で、仁は、喋ろうにも喋れなくなってしまったのだった。

おしまい。

33・キス中は喋れない。(最終回)(後書き)

最後の後書き

最後まで読んでいただいた皆様、ありがとうございます。

最後の最後で、仁君は琴葉ちゃんに会う事ができました。

少年は、とうとう少女を捜し出しました。

少女は、ずっと少年を待ち続けておりました。

ボーイミーツガール。僕の彼女は百四十万人、それはそんなお話です。

コメディではありませんw。

終わりの無い話はありませんし、終わらない話は嫌いです。

これにて、「僕の彼女は百四十万人」は一卷のお終い！

とはいうものの、二人の人生はまだまだ続きます。

さて、この後、仁君はどんな人生を送るのでしょうか？

決まっている事は、たった二つ。

琴葉ちゃんの尻に敷かれ続ける人生である事。

ろくな死に方をしないであろう事。

それ以外は、アズマダにも解りません。

このお話の続きは、皆様の頭の中にある、ソレ。そうソレです。

では、また近いうちに。

よろしければポチッと評価ボタンを押してください。

ときにはネロのような可愛い作者とツメが付いてきます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0068y/>

僕の彼女は百四十万人

2011年11月20日19時46分発行